

特別寄稿

不夜城を照らす静かな光

「馳星周氏の直木賞受賞と
『極夜』第二部開始に寄せて」

書評家

村上貴史

■楊偉民
（リョウエイミン）

一九九六年の衝撃——『不夜城』は、まさにそう呼ぶに相応しい小説であった。

馳星周のデビュー作である。

新宿歌舞伎町で故買屋として暮らしている劉健一。台湾人の父と日本人の母を持つ彼は、ある情報を伝えられて驚いた。かつての相棒が、一年ぶりに歌舞伎町に舞い戻ってきたというのだ。歌舞伎町を牛耳る上海マフィアの大物の右腕を殺して逃げていたのだが、またこの町に戻ってきたのだ。それを契機に健一の日々も平穏を失う。上海、北京、台湾。歌舞伎町を舞台に繰り広げられる抗争に、健一も否応なしに巻き込まれていく……。

昏い熱気、疾走感、緻密な構成、いずれもが破格であり、いずれもが新鮮であった。『不夜城』は、デビュー作でありながら第一八回吉川英治文学新人賞に加えて第一五回日本冒険小説協会大賞国内部門大賞を受賞し、また『このミステリーがすごい!』及び『週刊文春ミステリーベスト10』で一位を獲得した。さらに、受賞こそ坂東眞砂子『山姥』に譲ったものの、第一一六回直木賞にも宮部みゆき『蒲生邸事件』などとともにノミネートされた。

デビュー作にしてこの冠。『衝撃』と呼ぶ所以である。

『不夜城』はその後、一九九七年の『鎮魂歌 不夜城Ⅱ』、及び二〇〇四年の『長恨歌 不夜城完結編』で三部作として完結した。念のため記しておく、馳星周にとって二作目の著作となる『鎮魂歌』は、第五一回日本推理作家協会賞長編部門を受賞している。

その『不夜城』の衝撃から四半世紀が経過し、二十世紀が二十一世紀となり、平成が令和となった二〇二〇年。馳星周は、本誌で『極夜』という小説の連載を続けている。先日までの掲載分で第一部が終了し、今号から第二部が始まる。そしてこの第二部で、『極夜』というひとつの物語が完結する予定だ。

『極夜』の主人公は楊偉民。『不夜城』において、歌舞伎町で菓屋を営みつつ、一帯ににらみをきかせていた台湾人であり、劉健一の祖父的存在として登場した男である。この楊偉民の若き日々を、昭和二十一年の東京を舞台に描いたのが、『極夜』第一部なのだ。そう、『極夜』は『不夜城』の前日譚なのである。

かつては田んぼや畑しかなかった土地。

そして昭和二十一年現在では、闇市が開かれている土地。

銀座でも上野でも浅草でもないその土地——新宿——こそが、いずれ東京の桃源郷になると見抜いた男がいた。上海出身の国民党軍の上校（大佐）であった陳文龍である。台湾から薬学を学ぶために日本に留学してきた楊偉民は、友人二人と新宿で闇市を営んでいたが、知人によって陳文龍に紹介され、日本で成功しようとする目論む陳の警護役及び日本語通訳を務めることとなった……。

戦後五十年以上が経過した歌舞伎町が舞台の『不夜城』に登場した楊偉民——『不夜城』に「いつだったかテレビのニュースでこの国は五十年の間戦争に閑与してないってほざいていた」という科白が記されている——をご存じの読者にとってはおそらく意外だろうが、終戦翌年を舞台とする『極夜』の冒頭の楊偉民青

年は、正義漢として躍動しているのである。窮地に陥った仲間を救うため、棒きれを片手にヤクザの若い衆たちのなかに飛び込んでいくような、熱く行動的な男なのだ。のちに歌舞伎町の裏社会に君臨する不気味な老人になると知りつつも、それを一〇〇パーセント忘れさせるほどの活力で、『極夜』では暴れ回るのである。抜群に魅力的なのだ。

しかしながら、終戦によって日本に渡っていた台湾人が二等国民から戦勝国民へと立場を大きく変える時代のうねりのなか、楊偉民の道は次第にねじ曲げられていく。「薬学を学びたい」「友人に誠実でありたい」という純粋な気持ちを楊偉民は抱いていたのだが、彼の剣の腕や明晰な頭脳、あるいは胆力は、それを利用しようとする輩を引き寄せてしまうのだ。新宿でのし上がろうとする陳文龍だけではない。新宿のヤクザやGHQも楊偉民とつながりを持ち、彼の行動や判断に制約を与える。さらに、同胞である台湾人たちの心も様々で、それもまた楊偉民を様々に束縛する。そうして彼は、主体的に動き、自分で判断しながら動いているにもかかわらず、望まなかった地へと、望まなかった局面へと足を進めてしまうことになるのだ。

そうして到達する第一部のクライマックスは、渋谷である。台湾人たちのなかに、そこに「戦勝国民」として租界を作ろうという動きがあり、友人が渋谷に入り浸りになった関係で、楊偉民もまた渋谷に足を運ぶことになったのである。その「自分たちの地」で、台湾人たちは、ある「敵」との間で激しい闘いを繰り広

げることになる。夥しい数の銃器や刃物が駆使され、何人もの死者が出る。戦争とでも呼びたくなるような闘いなのだ。この場面の迫力は相変わらず一級品。男たちの緊張と忘我と熱狂、そして血。そんななかで楊偉民もまた、刀を振るい、銃弾を放つことになる……。

『極夜』第一部は、楊偉民と彼を取り巻く人々との様々なつながり——友情や利害関係、あるいは損得を超越した親愛の情——を描き、それが青年の心を変えていく様を描いた小説である。ストーリーのうねりで読ませるし、そのストーリーを、登場人物たちがきちんと支えてもいる。楊偉民はもちろん、陳文龍や新宿のヤクザ野上、一癖も二癖もある二十歳そこその女性ハル、台湾の仲間や「兄弟」たちといった個性的な面々がしつかりと造形されており、味方にせよ敵にせよ裏切り者にせよ、各自が確かに生きているのである。繰り返しになるが、『不夜城』の前日譚という冠を取っ払って、単独で十二分に愉しめる出来映えなのだ。それほどに完成度の高い小説なのである。

■劉健一

ここで『不夜城』三部作を振り返ってみるとしよう。

第一作『不夜城』は、劉健一の物語である。劉健一が「おれ」という一人称で、新宿は歌舞伎町で危機を脱出すべく足掻きながら、己の過去と向き合い、己の心と向き合う。自分の命と他人の

命を天秤にかけざるを得ない状況に追い込まれ、そして決断する物語である。そして——そこに楊偉民がいた。

老人として登場した楊偉民は、母とともに自分のもとにやってきた十三歳の劉健一に目をかけ、母親にはクラブのママの地位を与え、母子には大久保のマンションを与え、健一には教育の機会を与えた。純粋な台湾人ではなく、半分日本人の血が入っている健一に、「おまえは孫だ」との言葉までかけたのだ。

その後、劉健一は楊偉民の後ろ盾を失うことになるが、それでも生活の拠点は歌舞伎町にあり、歌舞伎町の葉屋である楊偉民の影響から逃れることはできなかった。劉健一は、舞い戻ってきたかつての相棒が引き起こした騒動のなかで、改めて楊偉民と対峙することになるのである。

続く『鎮魂歌』では、直接の主人公を務めるのは、郭秋生グオチウションという台湾の殺し屋と、滝沢誠という元警官——悪徳警官——だ。

二人の三人称視点を通じて、歌舞伎町における上海と北京のバランスが崩れていく様が語られている。その物語において、劉健一は「おれ」というかたちでは登場していない。しかしながら、彼は相変わらず歌舞伎町に存在しており、秋生の行動にも滝沢の行動にも影響を与えている。そしてそう、やはりそこにも楊偉民がいるのである。秋生と滝沢の物語でありながら、二人とも、劉健一と楊偉民の影響に囚われているのである。

特にこの二作品では、読者は、楊偉民が人を操る凄味を最終的に感じるようになる。楊偉民は様々な圧力を適切に駆使し、直接

に、間接に、人を動かす。ときには動かされている本人がそれに気付かず、自分の意志で動いていると信じてしまうほどに、周的な計算のもとに。

この楊偉民の姿は、若き日の楊偉民とはまったく対照的である。『極夜』第一部において楊偉民は、終戦直後の激変のなかで、誰かに操られるというよりは、むしろ運命としか呼びようのない人々の個々の想いの奔流によって己の道をねじ曲げられた。それに対して、老いた楊偉民は、己の意志で、他者を徹底的に操るのである。自分の力を維持し、自分に有利な状況を維持するため。

一方で劉健一である。第一作では自分が生き延びる（そして途中からはある人物を救う）ために知恵を使い、それが結果的には人を動かすことにもなっていたが、同時に、楊偉民を含む何人もの面々に操られる側でもあった。それが、『不夜城』の最終シーンを経た後、『鎮魂歌』においてはすっかり操る側にまわっている。しかも、視点人物の座も降りて、楊偉民と同じようなポジションに移動しているのである。もちろん楊偉民と手を組むのではなく、心理戦を繰り広げながら、だ。そしてその心理戦や策略を背景に、秋生と滝沢が様々に関係性を変化させながら必死の闘争を繰り広げる姿を『鎮魂歌』は描いている。『不夜城』の単なる続編ではなく、しっかりと進化した小説なのである。

その第二作で劉健一が故買屋としてとんでもないものにまで手を出していることが明かされるが、第三作『長恨歌』において健一は、より現代的に“情報”の売買を生業とするようになってお

り、その“情報”によって人を支配する。より巧妙に、より強力に。

残留孤児二世として歌舞伎町で暮らす武基裕たけもとひろの視点で、物語は綴られる。かつては通勤電車で会社に通う生活を送っていたが、不況で会社が倒産した結果、彼は“北京語を話せる日本人”という能力を歌舞伎町で活かして生きることになった。北京と上海、あるいは台湾というかつてのバランスが崩れ、中国人裏社会の掟が消え去った歌舞伎町では、小さなグループで活動する中国人たちに加え、日本のやくざも活動しているし、麻薬取締官も武基裕を使って成果をあげようとしている。それぞれが自分のために。それ故に、銃の取引を試みた連中が、売り手も買い手もショットガンで撃たれるような事件が発生するのである。そしてその歌舞伎町には、やはり劉健一がいた……。

『不夜城』三部作は、劉健一の物語である。「おれ」という一人称は第一作だけで放擲したものの、放擲したが故に、操る立場が強調されることになった。秋生が、滝沢が、武基裕が操られ、血が流され、命が消える。

そしてそんな劉健一を生み出したのが、楊偉民なのである。『極夜』を通じて、読者は楊偉民についてさらに知ることになるのである。

■多聞

二〇二〇年、『極夜』の連載が続くなか、馳星周は『少年と犬』で直木賞を受賞した。一九九六年の『不夜城』以降、『夜光虫』（九八年）、『M』（九九年）、『生誕祭』（二〇〇三年）、『約束の地で』（〇七年）、『アンタツチャブル』（一五年）と六度のノミネートの後に、七度目の正直での受賞となったのである。

二〇一一年に東日本大震災で飼い主を失ったらしい多聞という名の犬を軸として、多聞と人との交流を六つの短篇として纏め上げた連作短篇集である。犯罪者であったり老いた猟師であったり、あるいは少年であったり、多聞とふれあう人々は多様だが、彼／彼女は、いずれも多聞を愛し、多聞に救われる。それを静かに綴った『少年と犬』は、そう、『不夜城』三部作とは対照的な一冊である。

しかしながら、表裏一体でもある。

人と犬との交流——『少年と犬』が言葉を操れない犬とのコミュニケーションを描いたのに対し、『不夜城』三部作は、人々とのコミュニケーションを描いている。そこには言葉があり、言葉には嘘がある。ときに真実がある。語り手が真実と思い込んでいる嘘もある。語られない言葉もある。これらの言葉によって——コミュニケーションによって——人々は動かされる。

歌舞伎町の裏社会での言葉によるコミュニケーションには、さらにもう一つの要素が加わる。台湾語、北京語、上海語、日本語。複数の言語が飛び交うのである。『極夜』の昭和二十一年には、英語もそうだった。『不夜城』の冒頭もまさに冒頭において、劉

健一が北京語を用いるチンピラに注意喚起するシーンは、このシリーズにおける言語の重要性を象徴しているといえよう。

つまり、だ。歌舞伎町における人と人との言語によるコミュニケーションにおいては、嘘と真実を操る者がいて、それぞれに異なる言語を操る者がいて、その狭間に価値が、あるいは存在意義が生じる。そうした価値や存在意義に汚染されたコミュニケーションの脆弱さや醜さは、多聞と人との言葉を介さない、しかしながら確かで豊かなコミュニケーションによって、くつきりと白日の下にさらされてしまうのである。『少年と犬』の最終話「少年と犬」に登場する少年の名は「光」。その光は、不夜城を照らしてしまふのである。照らしてしまふが故に、いささか逆説的ではあるが、そうした言葉による不確かなコミュニケーションの隙間をなんとか埋めようと足掻く人々の切なさも見えてくる。

もう一つ注目したい点もある。多聞は東日本大震災を生き延びてきた犬だ。東日本大震災では、多くの命が失われた。それらは「己の命と他人の命を天秤にかけて選択する」などのいとまもないままに失われた命である。その光景を見てきた多聞は、果たして、命の選択を経て歌舞伎町で生き延びてきた健一をどう見るのか。人を操って人の命を消してきた健一をどう想うのか。黒い夢を見続けてきた健一とどう接するのか——。

そもそも『少年と犬』と『不夜城』三部作はそれぞれに独立した小説である。こんな風に重ねてみることに意味はないのかもしれないし、もちろんこんな問いに答えなどないのかもしれない。

しかしながら、いずれも馳星周の小説であり、いずれも読者の心を強く揺さぶる小説である。なので連続して読むと、こうして強い影響を受け、ついつい考えてしまうのだ。命について、コミュニケーションについて。あるいは、自分と他者について。

いささか余談だが『鎮魂歌』の秋生は、犬が好きである。いつか山奥で犬と暮らしたいと願い、犬の凶鑑を持ち歩き、すり切れるほどに何度も眺めてきた。『不夜城』三部作には、そんな主人公も登場しているのである。

■楊偉民

さて、前述したとおり、本号から『極夜』第二部、「眠らぬ王」が始まる。舞台は新宿歌舞伎町。第一部の十年後の物語として——つまり、『不夜城』のおよそ四十年前の物語として——幕を開ける。

いったい馳星周が、この四十年のうち、どれだけの年月を「眠らぬ王」で描くのかはまだ明かされていないし、それはつまり、楊偉民の半生がどこまで語られるのか判らないこともある。

しかしながら、だ。我々は、第一部で若き日の楊偉民を知り、そして『不夜城』三部作で老いてからの楊偉民を知っている。その間の物語なのだ。読み手を愉しませてくれることは確信できるし、そしてまた、読み手の心を強く揺さぶってくれることも確信できる。

昭和三十一年、楊偉民が
台湾から新宿に戻ってきた。

歓楽街の覇権をめぐり、

新たな血が流れる。

緊迫と興奮の『不夜城』前史――

眠

The Sleepless King

らぬ

王

画〓ケツソクヒデキ

馳星周

Hase Seisyu

「極夜・第一部」第1回

主な登場人物

楊偉民（ヤン・ウェイミン） 日本に留学に来たものの、闇市で日銭を稼ぐうちに華僑総本部の男たちと親しくなる。「渋谷事件」の最中、陳文龍の手引きで、台湾に逃れる。

陳文龍（チェン・ウェンロン） 上海人。国民党軍の元・上校（大佐）。新宿の土地を買い占めている。日本語に堪能で腕の立つ楊をかつて右腕として雇っていた。

野上修（のがみ・おさむ） 新宿闇市をシマとする松若組幹部。組に勧誘するほど、楊を買っていた。

【第一部あらすじ】 台北出身の楊偉民は親が営む薬局を継ぐ予定だったが、成り行きから、渋谷の地に台湾人租界設立を目論む華僑総本部と深く関わることに。その一方、友の身の安全を図るため、葛藤を抱えつつ、GHQに情報を流していた。渋谷署との小競り合いから、台湾人たちが銃器を手に警察署を襲撃する「渋谷事件」に発展。事件に身を投じた楊は総本部長の座にありながら同胞を裏切った張栄健への復讐を胸に誓いつつ、貨物船で日本を離れた。

楊偉民は鼻から空気を吸い込んだ。かつてとは違う、華やかな香りが鼻腔を刺激する。

十年ぶりの新宿は文字通り様変わりしていた。伝え聞いたところによると、一時はこの街に歌舞伎座を建設するという計画が持ち上がったらしい。そのため、町名も歌舞伎町と変えられた。だが、歌舞伎座誘致の計画は頓挫し、今は、歓楽街としてその姿を変えている。

偉民はかつて自分が暮らした辺りを歩き回った。庶民たちが暮らしていた区画はすっかり取り壊され、バーや居酒屋、キャバレーなどに姿を変えている。

偉民が間借りしていた金物屋も、三嶋親子がやっていた刃物屋も消えていた。

歌舞伎町の中心に足を向けた。酔客やホステスに混じって、得体の知れない連中が通りを我が物顔で歩いている。

しばらく歩を進めると巨大な工事現場が視界に入ってきた。もうすぐ完成するという新宿コマ劇場なのだろう。

偉民は工事現場の出入口近くに立って煙草をくわえた。オメガ

の針は午後九時を指している。その時間にここで待てと言われたのだ。

「楊先生ですか？」

煙草を吸い終わろうかというころ、ひとりの男が偉民に近寄ってきた。首の太い小柄な男だ。鼻が潰れて横に広がっている。口にしたのは台湾語だった。

偉民は男の足もとに向けて短くなった煙草を弾いた。

「そうだ」

「陳大人がお待ちです。ついてきてください」

男は偉民が捨てた煙草を靴底で踏みじり、偉民に背中を向けた。

「陳大哥（兄貴）は元気か？」

男の背中に訊ねた。

「はい。毎日猛然と働き、猛然と酒を飲み、猛然と女を抱えています」

偉民は自分の口元が綻ぶのを感じた。笑顔を浮かべるのはいつ以来だろう。台湾にいる間は、常に緊張を強いられ、笑うことなどほとんどなかった。

「なぜこんな面倒くさい手間を掛けるんだ？ 直接、大哥のところへ向かわせればいいものを」

「初めての人にはわかりにくい場所にあるんですよ、大人の事務所は」

男は振り返ることもなく、歌舞伎町の奥へと進んでいく。

「あんたの名前は？」

男が振り返った。

「欧恵博、台湾人です。楊先生のことは渋谷の闇市でお見かけしたことがあります」

「あんたも渋谷にいたのか」

「まだ、ガキでしたがね」

欧恵博は正面に顔を向けた。慣れた足取りで人混みをかき分けていく。

「五年ぐらい前に、縁があつて陳大人と知り合つたんです。昔、渋谷をうろうろしていたというと、楊偉民という男を知っているかと聞かれて、闇市で何度も見かけたつて話をしたら、それだけで仕事をくれるようになりました。楊先生のおかげです」

「おれはなにもしてない」

偉民の口調は自然と暗くなった。昭和二十一年七月、渋谷闇市の台湾人が結成した華僑総本部が渋谷警察署を襲つたが、惨めな敗北に終わった。その最中、陳文龍の手引きで台湾に逃れたのだ。

「あの事件の後、渋谷にいた台湾人たちは散り散りになりました。おれは親と一緒に横浜に逃げて、中華街で数年過ごしたんですよ」

「そうか」

林昌明と徐勝雄の顔が脳裏に浮かんできた。台湾に帰つた当初は頻繁に思い出していたものだが、やがて、身近で死人が増えすぎて、ふたりは死者の群れの中に埋没してしまっていた。

「ここです」

欧恵博が足を止め、右手に建つビルを見上げた。入口の上部に〈日中互助組合ビルディング〉という看板が掲げられている。

「これが陳大人のビルですよ。この街のあちこちに大人の持ちビルがありますが、ここが本拠地です」

「立派な建物だ」

偉民は言つた。

「ご存じのように、大人は先見の明があつて、歌舞伎町がこんなふうになる前から土地を買ひ占めていましたからね。今じゃ、歌舞伎町の顔役ですよ。大人は五階の自室にいます」

欧恵博は偉民に右手を振つた。

「一緒に行かないのか？」

「わたしにはまだ別の仕事があるんで」

欧恵博は笑顔を見せて立ち去つた。偉民はもう一度ビルを見上げた。溜息に似た吐息を漏らすと、ビルの中に足を踏み入れた。

階段を上り五階に達すると、息を殺し、周囲の気配を探る。この十年の間に身についた癖だ。闇の世界に身を置く者は、他者が放つ気を察知できなければ生き抜くことができない。

五階に人の気配はなかった。偉民は廊下の端に立つた。ドアはひとつしかない。そのドアをノックする。

「入れ」

懐かしい上海訛りの北京語が耳朶を打った。ノブに手をかける。鍵はかかつていなかった。ドアを開けると、煙草の煙が流れ

出てきた。相変わらずヘビースモーカーのようだ。

「失礼します」

偉民は後ろ手にドアを閉めた。部屋の中は中華風の作りになっていた。上がりかまちはなく、靴のまま部屋の中に入るようになっていた。短い廊下を抜けると、その先はだっ広い居間になっていた。陳文龍が革張りのソファに腰を落とし、煙草を吸っている。

「大哥——」

偉民は陳文龍に声をかけた。陳文龍が立ち上がり、偉民に向き直った。

「好久不見、弟よ」
ひさしぶりだな

陳文龍が破顔した。陳文龍は丸々と太っていた。最後に別れたときより二十キロは増えているだろうか。相変わらず顔の血色はよく、笑顔には人を引きつけてやまない愛嬌があった。

「ご無沙汰しています」

偉民は頭を下げた。

「堅苦しい挨拶はよせ。おまえを台湾に送り返したのはおれだ。まさか、あんなことになるとは思ってもいなかったがな。さあ、こっちに來て座れ」

陳文龍に促され、偉民は応接セットの陳文龍の向かいにあるひとり掛けのソファに腰を下ろした。陳文龍が差し出してきた煙草を受け取り、口にくわえる。ラッキーストライクだった。昔とは違い、陳文龍がダンヒルのライターで火をつけてくれた。

「目つきが陰しくなったな。昔のおまえの目は曇りを知らず、真っ直ぐだった」

「台湾では地獄の住人だったんです」

偉民は煙を吐き出しながら言った。

「すべて、蒋介石のせいだな」
ジャングゼンシ

陳文龍の言葉にうなずく。陳は国民党軍の上校（大佐）だったのだ。蒋介石を直接知っていてもおかしくはない。

台湾に戻ると、生まれ故郷は故郷ではなくなっていた。日本人が去った後にやって来たのは大陸の国民党の軍と官僚たちだった。精銳部隊は大陸に残って紅軍と対峙していた。台湾にやって来たのは無知で無能で残酷な連中だった。台湾人をあからさまに蔑視し、搾取することにはささかの躊躇も見せない連中だ。

荒くれ者も同然の兵隊たちは強盗や殺人、強姦を繰り返した。被害者は泣き寝入りするほかなかった。たとえ訴え出たとしても濡れ衣を着せられて投獄され、拷問を繰り返して獄中死するのが当たり前だったからだ。

狗去猪來——犬が去って豚が来たと台湾人たちは声をひそめて口にした。

犬は日本人で、豚は国民党の連中のことだ。

そんな中で事件は起こった。

一九四七年二月二十七日、台北。

闇煙草を売って生計を立てていた林江邁リンジャンマイという寡婦かふが密売の取締官に摘発されたのだ。林江邁はゆるしを乞うた。闇物資を売

ることで、子供ふたりとの暮らしをなんとか成り立たせていたのだ。だが、その場に居合わせた警官たちは彼女を拳銃の柄で殴打し、煙草と金を没収した。

この行為が、我慢を強いられてきた台湾人たちに火をつけた。どこからともなく人々があつまり、取締官たちに抗議の声を上げた。すると、取締官のひとりが威嚇射撃をはじめた。その弾丸が、事件とは無関係の台湾人に命中し、命を奪った。

国民党に対する怒りは燎原の火のように広まった。

翌二十八日、前日の事件に対する抗議のデモ隊が市庁舎前に集結した。偉民もその中に混じっていた。だが、憲兵隊が、市庁舎の屋上に据えた機関銃を、デモ隊に向けて無差別に発砲した。

銃弾を受けて血をまき散らしながら倒れる人々、悲鳴を上げて逃げ惑う人々、そういう人間に踏み潰され、息絶える人々。

市庁舎前は阿鼻叫喚の地獄と化した。

この日、デモが起こつたのは台北だけではない。全土で人々が抗議の拳を振り上げ、国民党軍の銃撃で無残に殺された。

しかし、国民党のこの残虐な行為は台湾人の怒りの炎に油を注ぐ形となった。

本省人か外省人か——台湾人か大陸から来たばかりの中国人なのかを見分けるために日本語で言葉をかけあい、『君が代』を歌いながら抗議のデモ行進を続け、国民党を圧倒する勢いを得たのだ。

中華民国の長官府は台湾人側に対話を持ちかけてきた。愚かな

台湾人はその提案に乗っけてしまう。

長官府は対話で時間を稼ぎ、その裏で、大陸の蒋介石に台湾人が叛乱を起こしたと嘘でたaramを報告して援軍を要請していた。

三月八日。蒋介石が派遣した第二十一師団と憲兵隊が台湾に上陸、それと呼吸を合わせるように、在台湾の国民党軍も台湾人に対する反撃を開始した。

大量殺戮がはじまったのだ。抗議行動を先導したエリート、知識階級は軒並み逮捕、投獄され、拷問の後に殺された。

肅清の波は台湾を覆い、一九四九年十二月、国共内戦に敗れた蒋介石が台湾にやって来た後も続いた。

「台湾の話はなかなか漏れて来ないんだが、どれぐらいの人間が殺されたんだ？」

陳文龍は煙草を灰皿に押しつけた。

「さあ。数万人というところでしょうか」

「そんなに……」

「連中は、文字通り虫けらのように台湾人を殺しまくりましたからね」

「そのせいで、おまえの顔に憂いが張りついてしまったのか」

「人を殺しすぎたせいです」

偉民は言った。陳文龍の右の眉が吊り上がった。

「それはどうのことだ？」

「おいおい話しますよ。それより、どうしてぼくを呼んだんですか？」

陳文龍が唇を舐めた。腰を上げ、窓際に移動してカーテンを開けた。歌舞伎町の明かりが差し込んでくる。

「おまえも覚えているだろう。戦後、おれは日本人に嘲笑あざわらわれながら、新宿の土地を買い漁った。ここが、東京の新たな桃源郷になると踏んでいたからだ。そして、おれの思っていたとおりになった。今や、歌舞伎町は銀座と肩を並べる歓楽街になろうとしている」

偉民はうなずき、煙草を消した。

「おれは買った土地にビルを建てた。そのビルを人に貸している。キャバレーにバー、ダンスホール、ビリヤード場に雀荘。借り手はいくらでもいる。賃料だけで左団扇ひだりうちわだ。だが、おれが日本にやって来たのはこんな小銭を儲けるためじゃない。もっとでかい勝負をしたいんだ。稼いだ金を投資に回す。金はいくらあっても足りん」

陳文龍は憑かれたような目をしていて。言葉を切ると、偉民に向き直る。

「だというのに、最近、台湾人の愚連隊や、日本のやくざたちがシヨバ代だ、みかじめだと言っては、おれの店子たなこたちから金をむしり取っていく。家賃を滞納する店子が増えているんだ。手を打つ必要がある」

「ぼくにそれをやれと？」

陳文龍がうなずいた。

「この十年、なんとかひとりでやって来た。だが、それもそろそ

ろ限界だ。商売が大きくなりすぎたんだ。だれかに手伝わせたいが、信用できる人間などおらん。おれが日本に来て唯一信用できたのはおまえだけだ、弟よ」

偉民は溜息を漏らした。

「大哥、久しぶりに顔を見ることができてよかった。少し痩せてください。太りすぎだ。今のままじゃ、長生きできませんよ」

陳文龍に頭を下げ、踵を返した。

「どこに行くつもりだ？」

「台湾に戻ります。こんなぼくでも、必要としてくれる人たちがいるんです」

誰にでも訊かれたら、そう答えようと思っていた。

「おれにもおまえが必要だ」

偉民は足を止め、振り返った。

「大哥はせいぜい金を儲けてください。でも、台湾のぼくの同胞たちは命を懸けて中華民国政府と戦っているんです」

「張栄健チャウワンキンが戻ってきたらしい」

陳文龍が言った。偉民は息を飲んだ。

「おまえを台湾に帰らせた後も、ずっとあいつのことを探し続けていた。東京を出たらしくて、手がかりを失っていたんだが……」

「東京に舞い戻ったと言うんですか？」

「台湾人愚連隊を背後で操っているのが張栄健だという情報が入った。それで、おまえを呼び戻すことにしたんだ」

「どこにいるんです？」

偉民は自分の声が強ばっているのに気づいた。陳文龍が上着のポケットからなにかを取り出し、放つてよこした。偉民はそれを空中で受け止めた。マッチ箱だった。

《キャバレー フォックステイル》と印刷されていた。女の横顔が描かれている。

「張栄健のことをおれに教えてくれたのは、そのキャバレーのママだ。話を聞いてくるといい。張栄健が東京にいると得心できた。またここに戻って来い。おれはおまえが張栄健を見つける手伝いができる。おまえはおれを助けることができる。兄弟で支え合ふんだ」

陳文龍は新しい煙草をくわえ、火を点けた。不味そうに煙を吐き出すと、顎をしゃくって偉民に行けと促した。偉民はマッチ箱をポケットに押し込み、部屋を出た。

* * *

《キャバレー フォックステイル》はすぐに見つかった。工事現場の裏手に間口の広いビルがあり、その三階が《フォックステイル》だった。

ドアを開けると、生バンドが演奏するジャズの音色が耳に飛び込んできた。テーブルはほぼ満席で、酔客とホステスがジャズなどそっちのけで歓談している。店の中央にはテーブルのない空間があり、体をくっつけて踊っている客とホステスもいた。

店に入っすぐ右手にバーカウンターがあった。偉民はテーブル席に案内しようとする店員に邪険に手を振り、バーカウンターの隅に腰を下ろした。

「ご注文は？」

バーテンダーがすかさずやって来た。

「ママを呼んでくれ」

バーテンダーが怪訝そうに眉をひそめた。

「ママとお知り合いですか？」

「そうだ。早くしてくれ」

語気を強めるとバーテンダーはうなずき、姿を消した。

偉民は煙草をくわえ、マッチで火を点けた。煙を吐き出しながら店内の様子を探る。客の大半は勤め人のようだった。柄の悪そうな連中もいくらかいたが、店の隅の方でおとなしく飲んでいる。白いワイシャツに黒のチョッキを着た店員が女をひとり従えて偉民の方に向かってきた。女は両肩が剥き出しの黒いドレスを着ている。店内の照明が暗いので顔の判別がつかなかった。

「だれかと思ったら、楊偉民じゃないの」

女が言った。聞き覚えがある。偉民は目をすがめた。ミラーボールが反射した光が一瞬、女の顔を浮かび上がらせた。

「春菜……」

偉民は女の名を口にした。

「十年ぶり？ 懐かしいわね。いつ日本に戻ってきたの？」

宮下春菜は一緒に来た店員に手を振って追い払い、偉民の左の

スツールに腰掛けた。

「どうしておまえが——」

「あなたを見逃す代わりに陳文龍ちんぶんりゅうからお金をもらったでしょ？
それを元手にこの商売をはじめたのよ。おかげさまで大盛況」

したたかな女が、したたかに困難な時代を生き抜いたのだ。

「このビルだって陳文龍の持ち物なのよ。昔のよしみで安く貸してくれてもいいのに、あいつつたらドケチなんだから」

「春菜——」

春菜が右の人差し指を偉民の唇に押し当てた。

「ここでは雅と呼ばれているのよ。雅と呼んで」

「名前なんかどうでもいい。兄貴から聞いた。張栄健はどこにいる？」

偉民は春菜の手を乱暴に押しやった。

「やっぱりその件か。陳文龍はきつとあなたを呼び戻すと思ったわ」

「張栄健はどこにいるんだ？」

春菜は答える代わりに煙草をくわえ、高級そうなライターで火を点けた。

「変わったわね。せっかちで強引になった」

「この十年、地獄の底で生きてきたんだ。どんな人間でも変わる。おまえを殺すのも抵抗はない」

「葉曉丹ようぎょうたんという台湾人がいるの。愚連隊のリーダー格よ。去年、そいつが角筈つのはすの暗がりでだれかと話し込んでいるのを見かけたの

よ。張栄健に似ていると思ったわ。それだけ」

「本当にあいつだったのか？」

偉民は春菜に詰め寄った。

「暗がりですって言ったでしょう。顔なんかはつきりとは見えないし、わたしも急いでいたからちらつと見ただけなのよ。そのことは陳文龍にも言ったわ」

「葉曉丹という男にはどこに行けば会える？」

春菜は偉民の顔に煙草の煙を吹きかけた。

「ただで教えろって言うわけ？」

「金なら、後で兄貴に借りて持ってくる」

「端金はしがねならいらないわ。あなたの力でこの借り賃、安くしてもらえないかしら」

「兄貴はそういう話に耳を貸したりはしないさ」

「やる気はないということ？ それともやってはみるけど期待はするなってこと？」

「努力はしてみる」

春菜が破顔した。

「頼んだわよ。台湾人の愚連隊は、よく、〈国士無双〉っていう雀荘にいる。コマ劇場の工事現場の前の通りを北の方へ五分ぐらい歩いたところにあるわ」

「わかった」

偉民はスツールから腰を上げた。

「待ちなさい」

春葉が偉民の右腕を掴んだ。

「こういう店に来て一杯も飲まずに帰るつもり」

「おまえから話を聞きに来ただけだ」

「今から行ってもだれもいないわ。愚連隊が集まるのは真夜中近くになってからの。再会を祝して乾杯しましょう」

「台湾から戻ったばかりで、日本の金を持っていない」

「馬鹿ね。わたしの奢りよ」

春葉が指を鳴らした。バーテンダーが待ち構えていたというように姿を現した。

「ダイキリをふたつ。お勘定はわたしにつけておいて」

「かしこまりました」

バーテンダーは丁寧にお辞儀をした。

「たいしたものだ。柄の悪い連中もおとなしく飲んでいる」

「ああ、あそこにいるのは野上組の幹部よ。チンピラみたいな下品な飲み方はしないわ」

「野上組？ もしかして——」

「そうよ。あなたと縁の深い、あの野上修が五年前、自分の組を立ち上げたの。歌舞伎町じゃ株が上がりっぱなしよ」

偉民は顎をさすった。この十年の間に、かつて偉民と関わりを持った人間たちは大きく立場を変えたのだ。

春葉が煙草を消した。

「おれを逃がしたことをオコナーに責められなかったのか？」

「あなたが故郷に帰るのはかえって好都合だったようよ。本国へ

帰って、今はCIAというところで働いているみたい。まだ日本

にいるとき、台湾であなたの所在を突き止めようとしたことがあったわよ。台湾の情勢を知るためにまたスパイに仕立てられたみたい。結局、所在は掴めなかった。どこでなにをしていたの？ ご両親は中華民国政府の肅清でふたりとも命を落とされたんでしょう」

「その話はするな」

偉民は冷たい声を放った。春葉が驚いたというように目を瞠（みは）つた。

「そんな声が出せるようになったのね。まるで、刃物を突きつけられたみたいだわ」

「茶化すのはよせ」

バーテンダーがカクテルグラスを運んできた。春葉が自分のグラスを掲げた。偉民も仕方なくそれに付き合った。

「再会を祝して」

グラスを軽くぶつけ合い、酒を口に運んだ。アルコールを体に入れたのは何年ぶりだろう。目眩（めまい）がするほど強烈な刺激だった。

「台湾にいる間も、あの女性のことは忘れなかったの？」

春葉は酒を一気に飲み干してから口を開いた。

「だれのことだ？」

偉民はとぼけた。視界の隅で、野上組の人間が座っている席を捉え続けた。年の若い男が席を立ち、店を出ていく。

「ごまかしても無駄よ。三嶋裕子（ゆきこ）さん。どこでなにをしているか、

知りたくはないの？」

「知っているのか？」

「ええ。日本に帰ることがあったら、あなたが真っ先に聞きたがるだろうと思って氣にかけていたのよ」

偉民はグラスに残っていた酒を飲み干した。空になったグラスをカウンターに置く。春菜が勝ち誇ったような目を向けてきた。

「負けたよ。おまえの言うとおりだ。彼女のことがずっと氣になっていた」

「陳文龍が刃物屋のあった土地を相場より高く買い取ったの。あなたがあそこの裕子に惚れていたんだってわたしが教えてあげたからよ」

偉民は煙草をくわえた。身体が震えるほど不愉快だが、なんとか自分を抑えて春菜に喋らせ続けた。

「三嶋家はそのお金で、四谷の空き家を買って引っ越したわ。裕子さんは、近所の酒屋と再婚した。今は一男一女のお母さん」

「そうか」

偉民は煙を吐き出した。

「幸せなんだな。なら、それでいい」

自分は今もう、あの女性に相応しい男ではない。ただ、自分に関わったことが彼女の人生に影を落としていないかどうかが氣になっただけだ。

「ところが、幸せってわけでもないのよ」

春菜は思わせぶりに微笑んだ。偉民は煙草を吸いながら次の言

葉を待った。春菜は偉民が續きを急かすのを待っているが、その手に乗るつもりはない。

「旦那が博打狂いのよ。麻雀に競輪に競艇。店の売り上げを博打に注ぎ込んで、妻が文句を言うのと殴る蹴る。酒屋の名前、知りたい？」

「いや」

偉民は煙草を消した。

「邪魔をした。酒をご馳走様」

「今度はちゃんと遊びに来て」

「用事が済んだらすぐに台湾に戻るから、そんな暇はない」

偉民は腰を上げ、出口に足を向けた。背中に春菜の視線を感じたが、一度も振り返らなかった。

* * *

この街の住人と思われる者何人かに声をかけ、〈国土無双〉のあるビルをやつと見つけた。鉛筆を縦にしたような細長いビルで、その三階が〈国土無双〉だ。

ビルに足を踏み入れようとしたところで、右手から声が飛んできた。

「あんた、楊偉民だろう？」

偉民は舌打ちしながら声のした方に顔を向けた。背広に開襟シャツの男が両手をズボンのポケットに突っ込み、くわえ煙草で立

っている。

「あんたはだれだ？」

「そっちはおれを覚えてねえだろうが、おれはよく覚えてるぜ。オヤジが気に入ってた台湾人だ」

見た目と喋り方はやくざ者であることを雄弁に物語っている。

「オヤジが会いたがっている。ついてきてくれ」

男はくわえていた煙草を吹き捨てた。

「オヤジというのはだれのことだ？」

「野上のオヤジのことだよ。決まってるだろうが」

偉民は溜息を漏らした。台湾から戻ってきた初日だというのに、次から次へと昔馴染みが寄ってくる。

「用があるんだ。野上さんには後日、顔を出すと伝えてくれ」

「おまえ、ふざけてんのか。天下の野上組の親分が、わざわざお越しくださいって言ってるんだぞ」

「用があると云っただろう」

偉民は男に背を向けた。

「待てよ、この野郎」

男が追いかけてくる。偉民はまた溜息を漏らした。

「どうしておれが新宿にいとわかった？」

機先を制して口を開いた。男が虚を突かれたという表情を浮かべて足を止めた。

「(フオックステイル) だな？」

「ああ。あそこで飲んでた身内がおまえに気づいて、事務所に知

らせをよこしたんだ」

やはり、あのとき席を立った男が野上のもとへ駆けつけたのだ。

「今夜はどうしても外せない用事があるんだ。明日、必ず顔を見せに行くと野上さんに伝えてくれ」

「(国土無双) なら、今夜は閉店だぜ」

偉民は男の顔を凝視した。

「このところ、おいたが過ぎるんで、昨日、オヤジの命令でみんなでこの店に出入りしてる連中を可愛がってやったんだよ。店長は入院中だ」

男が嗤った。

「葉曉丹という男を知っているか？」

偉民は訊いた。

「ああ。この辺りの台湾人愚連隊を束ねている男だ」

「そのことも可愛がったのか？」

男が肩をすくめた。

「昨日は顔を見なかったな」

「どこに行けば会える？」

「知るかよ」

男は足もとに唾を吐いた。

「教えてくれたら、今から野上さんのところへ行く」

「神出鬼没なんだよ。特に根城にしているところもねえ。こっちも居所を突き止めたいんだがな。あんたが頼めば、オヤジが本気で捜してくれるかもしれねえぜ」

「わかった。野上さんのところに連れていってくれ」

男がついてこいというように顎をしゃくった。路地を縫うようにしながら西へと向かっていく。背の低い建物の向こうに駅舎が見えた。

「あんなところに駅があったか」

「西武新宿駅だ。そうか、あんたは知らないんだな。昭和二十七年にできたんだ。所沢まで行く田舎電車だよ」

男についていくと、駅舎の正面に出た。

「最近じゃ、埼玉や千葉に家を持って東京まで通勤するってサラリーマンが多いんだ。この手の電車は増える一方だぜ」

男は駅を左手に見ながら歩き続けた。五分ほど進んだ先にあるビルの手前で足を止めた。

「あれが野上組の事務所だ。オヤジが建てたんだぜ。歌舞伎町じゃ一番の組だ」

男は誇らしげに言うと、ビルの中に入っていった。偉民はビルを見上げた。入口の上部に達筆で書かれた〈任侠 野上組〉という立派な木材で造られた看板が掲げられている。

ビルを入った左手が階段になっており、その奥には重々しい扉がある。どうやら、倉庫になっているようだった。

男は階段を上っている。四階まで上ると、背広の襟えりを直した。

踊り場から廊下に出ると、右手に〈野上組 事務所〉と記されたドアがあった。男はノックもせずにドアを開けた。途端に、煙草の煙が廊下に流れ出てきた。

部屋の中は十畳ほどの広さで、机や椅子が乱雑に並べられていた。隅の方で男が五人、車座になってくわえ煙草で花札に興じている。男たちはそれぞれ、日本酒の入った一升瓶を脇に置いていた。

「こっちだ」

男に声をかけられた。入口の正面にもうひとつドアがあった。

男はドアの前に立ち、丁寧にノックした。

「入れ」

懐かしい声が部屋の奥で響いた。

「楊偉民を連れてきました」

男がドアを開けた。煙草とは微妙に違う香りを伴った煙が流れてくる。偉民は男に続いて部屋に入った。八畳ほどの部屋で、ドアの正面に重厚な机が据えられ、野上が座っていた。葉巻を口にくわえている。

「ああ、本当に楊君だ」

野上が破顔した。十年前より皺が増え、髪の毛が薄くなった。

酷薄な雰囲気が強まっているが、それは偉民も同じだった。

「ご無沙汰しています」

偉民は日本風にお辞儀をした。

「堅苦しい挨拶は抜きだ。手下におまえを見かけたと聞いたときは、他人の空似だろうと思ったんだがな」

野上は腰を上げ、偉民に手招きをした。

「まあ、座れよ」

「失礼しました」

男が声を張り上げ、部屋を出ていった。偉民は机の前に置かれた椅子に腰を下ろした。

「険のある顔つきになったな。台湾じゃ苦勞したのか」

「いろいろとありまして」

偉民は言葉を濁した。台湾の情勢は、日本ではほとんど知られていないらしい。

「血の匂いがする」

野上は手にした葉巻を顔から遠ざけ、鼻をひくつかせた。

「匂いがしますか」

「ああ、ぶんぶんする。昔の楊君とは違う匂いだ」

「自分の組を興したんですね」

偉民は話題を変えた。

「ああ、五年ぐらい前になるかな。他人の下にいたんじゃ、稼いでも稼いでも上前をはねられるだけだ。いい加減、馬鹿馬鹿しくなつてよ。上前をはねる側に回ったんだよ」

「飛ぶ鳥を落とす勢いだつて聞きましたよ」

野上が嬉しそうに笑った。

「まあ、うちは相変わらず喧嘩上等だからな。最近のやくざはヤワになつちまつて、揉め事を金で片づけようとする。うちのやつらはゴロ巻きじゃあ、どこにも負けねえ——」

野上が口を閉じた。ドアが開き、さっきの男が瓶ビールとコップを持ってきた。

「気が利くな、吾郎。楊君、再会を祝して一杯やろうじゃねえか」
偉民は男からコップを受け取った。野上が自ら、偉民のコップにビールを注いでいく。

「それじゃあ、旧友との再会を祝して、乾杯だ」

偉民は野上に合わせてコップを掲げ、ビールに口をつけた。野上はコップの中身を一息に飲み干していく。

「日本に戻ってきたのは、陳文龍の野郎に呼ばれたからか？」

野上は空になったコップを机に置いた。吾郎と呼ばれた男がそのコップに新たなビールを注いでいく。

「なんでもご存じなんですな」

「あの中国人もいろいろと苦しいみたいだからな。せつかく、この辺りの土地を買い占めて大地主になつたのに、おれたちみたいなのが上がりを掠めていく」

野上が右目を瞑つてみせた。

「それに対抗するために、自分も組みたいなもんを作ろうとしてるようだが、なかなか人が集まらないのさ。当たり前だ。一日やそこらでだれもが恐れるような組織を作れるなら、そんな楽なんはねえよ。いずれ、右腕としておまえを呼び戻すことになるんだらうと思つてた」

偉民はまたビールに口をつけた。台湾では酒を飲むことを自分に禁じていた。春菜のところで飲んだ酒がじんわりと胃を温めている。ビールがその火照りを一旦冷ましてくれるが、すぐに火照りは復活する。

「ぼくは用が済んだら台湾に戻ります」

偉民は言った。

「用ってのはなんだ？」

「渋谷の件で、落とし前をつけなきゃならない」

野上が小さくうなずいた。

「そうだな。楊君はそういう男だ」

「華僑総本部の張栄健が東京に戻っていると聞きました。葉曉丹と名乗っているようです。なにかご存じありませんか。〈国士無双〉という雀荘を根城にしている台湾の愚連隊を陰で操っているようですが」

「ああ、そいつらなら、昨日、手下たちに可愛がらせただが……吾郎、なにか知ってるか？」

野上は傍らに立っていた男に顔を向けた。

「さあ。ただ、昨日は、あの店には葉村はいませんでした」

偉民は右のこめかみがひくつくのを感じた。張栄健らしき男は日本名では葉村と名乗っているようだった。

「なんだ？ 葉村の野郎に逃げられたのか。おれは聞いてねえぞ」
吾郎が神経質な仕草で頭を掻いた。

「佐山の兄貴には報告が行ってるはずですよ」

野上が舌打ちした。

「葉村を見つけておれの目の前に連れてこいと佐山に伝えろ」

「は」

吾郎は背筋を伸ばして返事をする、足早に部屋を出ていった。

「葉村というのはどんな男ですか？」

偉民は野上に訊ねた。

「台湾人だってことしかわかってねえんだ。去年ぐらいからかな、仲間の台湾人を連れてこの街を肩で風を切って歩くようになった。はじめは陳文龍の息が掛かっているのかと思っただが、見当外れだった。陳の店子の中国人や台湾人たちからみかじめ取ったり、ただ飲みだのただ食いだの、やりたい放題だよ。言うことを聞こうとしないやつらには問答無用でこれだ」

野上は右手で拳を握ってみせた。

「愚連隊だ。仁義もへったくれもねえ」

「葉村が見つかったら、ぼくに知らせてくれますか」

「昔のよしみだ、そうしてやるよ。ヤサはどこだ？ 見つけたら使いを出してやる」

偉民は苦笑した。

「なにがおかしい？」

「すぐに台湾に戻るつもりだったから、家もなにもないんですよ」

「おれが用意してやろうか？」

「いえ。陳さんがなんとかしてくれるはずですよ。家が決まったら、連絡します」

偉民はコップを野上の机の上に置いた。

「もう帰るのか？ 積もる話もある。今夜は朝まで飲み明かそうぜ」

「今日、台湾から着いたばかりなんです。くたびれました。これ

で失礼します。酒を飲むのは、また後日」

「少し、日本語に訛りがあるな。昔はなかった」

「台湾で話されてる日本語に影響されましたかね。数日で元に戻ると思いますよ」

「もういい。今度、ゆっくり飲もう」

「野上さんも、ちゃんと休んでください。昔に比べると、肌の色が悪い」

「親分ともなると、気苦労が絶えなくてな」

野上が笑った。偉民は微笑みを向けると、腰を上げた。

* * *

野上組の事務所を出ると、欧恵博が路上で煙草を吸っていた。

「ねぐらまで案内します」

欧恵博は煙草を指で弾いた。

「どうしておれがここにいとわかった？」

「蛇の道は蛇^{へび}って言うじゃないですか。さ、ついてきてください。」

陳大人が大哥のために用意した家まで案内します」

「おれはおまえの兄貴じゃない」

偉民は冷たい声で言った。

「陳大人の弟分なら、おれにとつては大哥ですよ」

欧恵博は気にする素振りも見せずに歩きはじめた。

「葉曉丹^{ハルヘン}という台湾人を知っているか？」

偉民は欧恵博の背中に声をかけた。

「この辺であいつを知らないやつはいませんよ。陳大人の悩みの種です」

「どういう男だ？」

「葉曉丹は張栄健ですよ」

間違いないか。偉民は胸の奥でながもそりと動くのを感じた。両手で拳をきつく握り、唇を舐める。

「あの渋谷の事件の後、張栄健は姿をくらましたんですよ。張栄健だけじゃない。あの頃渋谷にいた連中はみんな散り散りになって、いなくなつた。残つたわずかなやつらが、もう一度渋谷に台湾人の租界を作ろうって、張栄健を探したんだけど、見つからなかった。それが、去年だったかな、仲間を連れて現れて好き勝手にやりはじめた。名前を変えて、少しいじつたのか顔かたちもちよつと変わつてるけど、おれにはすぐわかりましたよ。あいつは総本部長だった張栄健だって」

偉民は溜めていた息を静かに吐き出した。

「もう、張栄健のことを覚えてる台湾人もほとんど残ってませんからね」

「仲間の台湾人というのは渋谷にいた連中じゃないのか？」

「知らない顔ばかりですよ。連中の話を聞くと、関西の訛りがあるんですよ。大阪辺りから連れてきたのかな」

「やつのねぐらは？」

欧恵博が肩をすくめた。

「あちこちを転々としてるみたいです。陳大人がねぐらを突き止めようとしたことがありますけど、無駄でした」

欧恵博は入り組んだ路地を器用に縫いながら、南に向かって進んでいく。

しばらく無言で進むと、欧恵博が足を止めた。

「ここです」

路地に面した建物を指さす。一階は店舗で、二階が住居になっているようだった。路地を南に進むと、すぐに靖国通りとぶつかる。建物の周りはスナックや焼き鳥屋などが建ち並んでいた。

「去年まで、日本人がここで薬局をやっていました」

欧恵博が言った。

「薬局？」

「栃木の人間だったんですけど、実家で親父さんが倒れたとかで店を畳んで帰ったんですよ。すぐに、陳大人がここを買収取って、偉民のために空けておけて。ここなら、その気になれば薬屋を開けるからって言ってました。なんのことかよくわからないけど……」

「大哥がそんなことを？」

「ええ」

偉民はくわえていた煙草を吐き捨て、靴底で踏みにじった。台北で薬局を継ぐ夢はとうの昔に捨てた。本人が忘れてしまった夢を、陳文龍は忘れずに温めていてくれたのだ。

「布団からなにか、家財道具はひととおり揃えました。なにか

不便なことがあったら言ってください」

「しばらくはここで寝泊まりするが、自分のねぐらは自分で探すと大哥には伝えておいてくれ」

「せっかく大人が用意してくれたんですよ」

欧恵博が口を尖らせた。偉民は首を振り、新しい煙草をくわえた。

台湾では一カ所で長く寝泊まりを続けることは命取りだった。

国民党政府は台湾人に密告を迫り、多くの仲間たちが逮捕、投獄され、中国共産党のスパイを意味する匪諜フエイデイエのレッテルを貼られて処刑された。

寢床だけではなく、居場所を転々と変え、あの手この手を使った通信手段で仲間と連絡を取り合い、どうにかこれまで生き延びてきたのだ。

欧恵博が小さく舌打ちをした。大方、礼儀知らずの頑固者だとも思ったのだろう。

「これが鍵です」

偉民は欧恵博がズボンのポケットから取り出した鍵を受け取った。

「腹、減ってませんか？ 美味しい台湾料理を食わせる店がありますよ」

「長旅で疲れた。今夜はもう寝る」

「わかりました」

欧恵博は軽く頭を下げると軽やかな足取りで立ち去っていった。

偉民はその背中が見えなくなるまで待った。おもむろに鍵で戸を開け、中に入る。かすかな消毒液の匂いが鼻をついた。薬局だったころの名残だろう。

しっかりと鍵をかけ直してから明かりを点けた。電球は何度か明滅を繰り返してから光を放ちはじめた。

左右の壁には空の棚が並んでいる。正面にはガラス張りの陳列棚。その後ろにはレジスターを載せた台があり、レジの奥に別の部屋へと通じるドアがある。菓の処方室だろう。

偉民は処方室に入った。この部屋も、左右の壁に棚が並んでいる。漢方薬を調合していたのだろう。乾いた植物の匂いが残っていた。部屋の西側にもうひとつドアがあり、ドアの先は階段になっていた。

靴を脱いで短い廊下を進んだ。途中に戸がある。便所だった。階段を昇る。二階には部屋が三つあった。真ん中の部屋には簡素な台所がしらえられている。どの部屋も畳敷きで、南の部屋の押し入れに真新しい布団がひと組入っていた。

偉民は窓を開けた。途端に、酒と煙草の匂いが押し寄せてくる。ここはもう、偉民が暮らしていたころの新宿とは違うのだ。

布団を敷き、煙草をくわえながら寝転がった。台所のある部屋のちゃぶ台の上から持ってきた灰皿に灰を落とす。

こんなに落ち着ける夜は久しぶりだった。密告者の目や警察の影に怯えることもなく、自堕落に煙草を吸っている。

『仲間を見捨てて逃げるのか』

耳の奥で、同志の声がよみがえった。江志鋼（江志鋼）のざらついた声だ。日本に行くと言ったとき、江志鋼は烈火のごとく怒った。

偉民は一切言い訳をしなかった。過去に落とし前をつけに行く。そう言えは聞かぬはいいが、本当は、逃亡者の生活に疲れ果ててしまったのだ。反政府運動が盛り上がる機運はどこにもなく、日ごとに抑圧が強まっていく。

軍人や警察官や下っ端官僚を数人殺したところで大勢に変化はなく、失望と徒労感が心を蝕んでいく。

そんなときに、陳文龍から連絡があった。日本に戻ってきてくれと。

偉民は陳文龍が差し伸べてきた手にしがみついた。

少しの間だけだ——自分にそう言い聞かせた。大恩のある陳文龍が困っている。彼を助け、すぐに台湾に戻るのだ。

だが、日本に向かう船に乗っている間に気づいてしまった。自分には疲れている。骨の髄まで疲れ果てている。陳文龍の恩義に報いるためというのはでたらめだ。あの小さな島から逃がれたかったのだ。

日本に着き、陳文龍への挨拶を済ませたら姿をくらまそう。そう思っていた。

なのに、張栄健の名を耳にした途端、くすぶっていた怒りに火がついた。

人間とはどこまで愚かにできているのだろうか。

偉民は短くなった煙草を灰皿で押し潰し、目を閉じた。

台湾から日本までの密航船の中でも、どこかに警察の密偵がいるのではないかと神経を尖らせ続けてきた。船から下りると、緊張がほぐれていった。ここは日本だ。国民党の力はこのには及ばない。

眠りはすぐにやって来た。

2

車のクラクションの音で目が覚めた。瞼が膠まぶたにかわでくっつけたように張りついている。体もだるい。寝過ぎたせいだ。窓の外はすっかり明るくなっている。

手を使って目を開け、頭を振った。三時間以上寝続けられたのはいつ以来だろうかと記憶をまさぐりながら布団から這い出た。

またクラクションが鳴った。偉民は窓を開け、顔を突き出した。家の前にアメリカ車が停まっていた。丸っこいデザインの前フォードのセダンだ。後部座席の窓が開き、陳文龍が顔を覗かせた。

「いつまで寝ているつもりだ、偉民」

「すぐに降りていきます」

偉民は窓を閉め、鍵をかけた。階段を駆け下り、外に出る。施錠していると、陳文龍の笑い声が聞こえた。

「歌舞伎町の人間なら、この家はおれのものだとみんな知っている。泥棒なんて入らんぞ。それに入ったところで、今のおまえに盗まれて困るものがあるのか？」

「癖なんです」

偉民は苦笑した。正面の出口は厳重に施錠して、裏口や窓など、一カ所はいつでも逃げられるように鍵を開けておく。台湾ではそれが日常だった。

「その様子じゃ顔も洗ってないな。まあいいだろう。乗れ」

偉民は車の後ろを回って反対側の後部座席に乗り込んだ。左側にある運転席では欧恵博がハンドルを握っている。

「出せ」

陳文龍が言うと、フォードがゆっくり動き出した。靖国通りに出て左折する。次の信号をまた左折する。

陳文龍は昼間の歌舞伎町を偉民に見せようとしているようだ。た。

「夜はあれだけの賑わいなのに、陽が昇ると潮が引くように人がいなくなる。目に入るのは野良猫とカラスだけだ」

陳文龍はラッキーストライクをくわえ、金無垢きんむくのライターで火をつけた。途端に車内に煙が立ちこめる。偉民は窓を開けた。

「おまえと出会ったころ、おれはこの辺りの土地を買い漁っていたわけだが、実は、短期間でここまで発展するとは思っていなかったな。おかげでボロ儲けだ」

「そうでしょうね」

偉民もラッキーストライクをくわえた。陳文龍の腕が伸びてきて金無垢のライターに火がともった。礼を言っ煙草に火をつける。

「人間の欲というのは恐ろしいものだ。もう、死ぬまで生きていくのに困らない金を稼いだというのに、もっといい車が欲しい、もっといい酒が飲みたい、もっといい女を抱きたいという思いが頭を離れない」

偉民は煙を吐き出しながら苦笑した。陳文龍は相変わらず自分を飾らない。

「おれの行く手を遮ろうとするやつらは、ひとり残らず叩き潰してやる。毎朝、目が覚めるたびにそう思うんだ」

フオードがまた交差点を左折した。

「我ながら欲深い。だが、自分じゃどうすることもできん」

「大哥らしくていいじゃないですか」

「おまえならそう言うと思うたよ」

陳文龍が邪氣のない笑みを浮かべた。

「日本に戻ってきたばかりだというのに、昨日は忙しくしていたみたいだな」

「春菜に会いました。どうして、あのキャバレーのママが彼女だと教えてくれなかったんですか？」

「驚きがあった方がいいだろう。なんでもわかってる人生なんて退屈でたまらん」

「それはそうですが——」

「野上組長にも会ったな。どう思った？」

「貫禄がつきましたね」

陳文龍は窓を開け、まだ十分に吸える煙草を外に投げ捨てた。

「人は変わる。以前は好き勝手にふるまえたが、今は手下たちを養わなきゃならない。昔の野上と同じだと思ったら痛い目を見るぞ」

「肝に銘じておきます」

偉民は答え、煙草を吸った。言われなくてもわかっている。人は変わる。自分の命を、家族の命を狙われ続ける恐怖に耐えかね、変節した同志を数多く見てきた。信念は脆く、たやすく壊れる。人は明日の希望より、今日一日を確実に生き延びる道に足を向ける。

この人間だけは大丈夫。そう心から信じた相手に裏切られたことは数え切れないほどある。

「ぼくも変わりました」

偉民は言った。

「大哥は変わりませんか？」

「どうだろうな。自分のことはよくわからんのだ。金を稼ぐために生きているというところだけは変わっておらんがな」

フオードの速度が落ちた。狭い路地の前で停まる。路地の奥に人が倒れていた。

「おまえの古い友達だ」

路地の奥は薄暗く、男がうつ伏せに倒れていることしかわからなかった。

「情けをかけて、おれのところで働かせたこともあったんだが、たちまちヒロポンに溺れて、まともに仕事ができないようになって

た。今はイカサマ麻雀で素人から金を巻き上げて、その金でヒロポンを打つというその日暮らしをしている。面倒を見てやるのもいいし、捨て置くというならそれでもいい。おまえの老朋友だ。好きにしろ」

陳文龍は路地を暗い目で見つめながら言った。

「まさか……」

「行け。また、連絡する」

偉民は生唾を飲み込み、フォードを降りた。ドアを閉めるのと同時にフォードが走り去っていく。

「克泰か？」

偉民は路地の奥に声をかけた。反応はない。男はうつ伏せに倒れたままぴくりとも動かない。

「本当に克泰なのか？」

おそるおそる路地に足を踏み入れた。路地には饅^すえた匂いが立ちこめていた。それが路地そのものの匂いなのか、倒れている男が放つものなのかは判然としなない。

「おい、克泰」

偉民は腰を落とし、男を仰向けにさせた。頭髮が薄くなり、顔は無精髭^{ぶしひげ}で覆われている。だが、郭克泰^{グオ}に間違いなかった。

「克泰、起きろ。起きるんだ」

偉民は郭克泰を揺さぶった。

「放っておいてくれ」

郭克泰が日本語で言った。

「おれだ。偉民だ」

偉民は台湾語で言った。郭克泰はなにかを口の中で呟^{つぶ}きただけだった。

「克泰^{かつ}、おれだ。民夫^{たみお}だ」

今度は日本語で言った。郭克泰の目がうつすらと開いた。薬学の専門学校で知り合い、新宿と渋谷の闇市で共に露店を営んでいた旧友だ。

「民夫？」

「そうだ。民夫だ。楊偉民だ」

日本語と台湾語を交えて答えた。郭克泰が体を起こした。すぐにまた背中を丸め、胃の中のものを吐いた。ひとしきり吐き終えると腕で口の周りを拭いながら偉民に顔を向けた。ハンカチを手渡す。

「本当に偉民か？」

台湾語で言った。

「そうだ。戻ってきた」

「ちよっと待て」

郭克泰は瞬きを繰り返しながら、両手を顔に伸ばしてきた。両手の指先で偉民の顔をまさぐる。偉民はされるがままだった。

「老けたな」

郭克泰の指が遠のいた。

「おまえに言われたくはない」

偉民は答えた。郭克泰の顔には無数の皺が刻まれ、光の加減に

よって老人のように見える。

「何年ぶりだ？」

「十年だ」

「台湾に戻っていたんだらう？」

「ああ」

「地獄だつて聞いたぞ」

「その通りだよ」

「ここも地獄だ」

「その様子を見ればわかる」

郭克泰は俯うつむいた。

「こんな姿、おまえには見られなくなかったな」

「立てよ。歩けるか？」

「どこに行くんだ？」

「おれの家だ」

偉民は腕を貸し、郭克泰を立たせた。郭克泰はふらつき、右の壁に手をついた。

「ねぐらなんかどうでもいい。クスリがいる。クスリを買つてくれ」

「だめだ」

偉民は冷たい声で言い放った。

「頼む、偉民。クスリがないとおれはだめなんだ」

「おれが一緒だからもう大丈夫だ。おまえはクスリをやめて、真つ当な人間に戻る」

「そんなのできっこない」

「できるさ」

郭克泰の目つきが変わった。ズボンのポケットから錆さびびた折り畳みナイフを取り出すと、刃を開いて握る。

「金を出せ、偉民」

「何を言い出すんだ」

「おれは本気だぞ。金さえ出せば、殺しはしねえ」

「馬鹿な真似はやめろ、克泰」

「うるせえ」

克泰がナイフを振り回した。ナイフの刃先が壁に当たつて克泰の手からこぼれ落ちた。

「こんな狭いところで刃物を振り回すなんて、いかれてるぞ」

偉民は地面に転がったナイフを足の裏で踏みつけた。

郭克泰が膝をつき、顔を覆つて泣きはじめた。

* * *

郭克泰は手先の震えが酷ひどく、なにも持つことができなかった。

偉民は近所から調達してきた金盥かんざらいに水を張り、濡ぬらした手ぬぐいで体を拭いてやった。手ぬぐいも、水もすぐに黒くなる。

「すまないな」

克泰がかすれた声を出した。

「なけなしの金を握つて銭湯に行つても追ひ返されるんだ。浮浪

者はお断わりってな」

「そうだろうな」

偉民はくわえ煙草で煙をふかした。そうしなければ鼻が曲がってしまいそうだった。

台所で水を捨て、盥に新しい水を張る。手ぬぐいもよく洗った。

「偉民、頼むよ。ほんの少しでいいんだ。クスリを——」

「だめだ」

偉民はにべもなく言って、また郭克泰の体を拭いた。克泰はがりに瘦せていた。まるで戦後、あちこちで姿を見かけた戦災孤児のようだ。稼いだ金のほとんどを覚醒剤に注ぎ込んでいるのだろう。

「どうしてヒロポンなんかに手を出したんだ」

偉民は訊いた。

「おまえも國邦イナもいなくなつた。おれも台湾に帰ろうと思つたが、白色恐怖がはじまつたじゃないか」

郭克泰は目をぎよろつかせた。

「仕送りが滞るようになって、復讐した学校もやめざるを得なくなつた。陳文龍が賃仕事をくれたけど……風の噂で親父が投獄されて殺されたって耳にした。何度もお袋に手紙を書こうとしたけど、周りの人間に止められた。手紙は検閲されてるぞってな」

偉民はうなずいた。その通りだったからだ。

「家族のことが心配で、毎晩のように酒を呷あひつた。そのうち、飲んでも飲んでも酔わなくなつた。そんなときに、人にヒロポンを

勧められたんだ。こいつをやれば、嫌なことは全部忘れられるぞってな」

郭克泰は俯き、体を震わせた。目を閉じ、齒を食いしばっている。禁断症状に襲われているのだ。

「偉民、クスリをやらなきゃ、おれは死んじまう」

「死にやしない。ちよつと苦しいだけだ」

「おまえになにがわかる」

偉民は薄汚れた手ぬぐいを床に叩きつけた。郭克泰の髪の毛を乱暴に掴み、顔を上げさせた。

「おれはその白色テロの真つ只中にいた。国民党のやつらを殺しちゃ逃げる。その繰り返しだ。いつ、警察の手が伸びてくるのか、怯えながら暗がりですを潜め、陽が落ちると移動した。毎日が地獄だった。それでも、クスリに逃げようと思つたことはないぞ」

「おまえは強いからだ。だけど、おれは弱い人間なんだよ」

偉民は髪の毛を放した。

「おまえも薬屋の息子だ。覚醒剤の恐ろしさは知っていただろう」

「何度もやめようとはしたんだ。だけど、だめだった」

郭克泰は首を振つた。

「ふたりで力を合わせればなんとかなる」

「どうにもならないって言ってるだろう。おれのこととはもう放っておいてくれ。おれがどこで野垂れ死のうと、おまえには関係ない——」

偉民は左手で郭克泰の口を塞いだ。右手を腰の辺りにさまよわ

せ、台湾にいたときは違い、自分が丸腰であることに気づいた。階下から人の気配が漂ってくる。帰宅したときにしつかりと鍵はかけた。合鍵を持つ者がいるとすれば陳文龍の息のかかった者だけだ。

頭ではそうわかっていても、心臓が早鐘^{はやかね}を打つ。人差し指を自分の唇に押し当て、郭克泰に沈黙^{うたかた}を促した。

立ち上がり、窓が開くかどうかを確認する。いざとなれば、この窓から逃げ出せばいい。

「大哥、おれです。欧惠博です」

聞き覚えのある台湾語が響いた。偉民は肩から力を抜いた。

「勝手に入ってくるな」

「すみません。陳大人が、そろそろだから迎えに行けというもので」

声と共に階段を上ってくる足音がする。

「そろそろ？」

戸が開いた。欧惠博は冷たい目で郭克泰を見下ろした。

「この人を見捨てるのか、手を差し伸べるのか、楊大哥はもう決めただろうって」

偉民は舌打ちした。

やることなすこと見透かされている。腹立たしいが、深い洞察があるからこそ、富を築いてくれたのだ。

「郭克泰を助ける」

偉民は言った。

「大人もそうするだろうっておっしゃってましたよ」

欧惠博が微笑んだ。

偉民はまた舌打ちをした。

* * *

欧惠博の運転するスズライトのセダンが停まったのは、淀橋^{よどばし}浄水場近くのあばら屋だった。家の前で男がふたり、しゃがんで煙草をくゆらしている。

「あのふたりが、克泰さんのクスリが抜けるまで、責任を持って面倒を見ます」

「信用できるのか？」

「大人に大恩があるやつらですし、これまで、何人ものヤク中の面倒を見てきましたよ」

「なら、頼む」

偉民はうなずいた。

「待てよ、偉民。おれをこんなところに置き去りにするつもりか？」

「確かに楽しそうな場所じゃないが、クスリを抜くためだ。堪えろよ」

偉民は後部座席に顔を向けた。郭克泰の目が泳いでいる。

「無理だ。ちよっとだけ、ほんの少しだけクスリを体に入れば、それでおれはしゃんとするんだ。こんなところ、ごめんだぜ」

「クスリをやめなきゃ、死ぬぞ」

「さつきも言ったが、おれがどこで野垂れ死のうとおまえには関係ないだろう」

偉民は欧恵博に向かつてうなずいた。欧恵博は車の窓を開け、指を鳴らした。男たちが煙草を投げ捨て、腰を上げる。

「偉民、頼むからやめてくれ——」

「恨みなければ好きだけおれを恨め。だが、おれは友が自殺するのを黙って見ていられるような人間じゃない」

「死んじまえ、くそつたれ——」

郭克泰は偉民を口汚く罵りはじめた。男たちがやって来てドアを開けた。問答無用で郭克泰を外に引きずり出す。

「偉民、こいつらを止めてくれ。なんでもするから。おまえの言うことはなんでも聞く。だから——」

ドアが閉まった。郭克泰の声が遠のく。

「どうやるんだ？」

偉民は欧恵博に訊いた。

「まず、手足を縛って身動きを取れなくします。最初の二日は水を与えるだけ。なにか食べさせてもどうせ吐いてしまいますしね。最初の山を越えたとあのふたりが判断したら、手の縛めを解いて、少しずつ食事を与えていきます。もう一山も二山もあるんですが、二週間から一月でなんとかクスリは抜けますよ」

「その後は？」

偉民はあばら屋に連れていかれる郭克泰を見つめながら言った。

郭克泰は全身をくねらせて抗おうとしていたが、ふたりに軽々と担がれていく。痩せ衰えているのだ。

「クスリに手を出さないかどうかは、そいつ次第ですね。生き甲斐を見つけられりゃ、クスリなんてなくても生きていける。そうじゃなきゃ、逆戻りです」

郭克泰と男たちがあばら屋の中に消えた。

車が動き出した。

「これで後顧の憂いはなくなりましたね。大人のために、一働きしましょうぜ、大哥」

偉民は答えず、煙草をくわえて火をつけた。

3

欧恵博は偉民を工事現場の裏手にある小さな料理屋に誘った。
「台湾の料理を出す店ですよ。大陸野郎の作った飯より断然美味い」

欧恵博は入口近くのテーブルに腰を下ろした。テーブルの表面は油でべたついている。偉民は向かいの椅子に尻を落とした。左手の壁に、品書きが貼られていた。

昼飯時だからか、店は混み合い、日本語や北京語、台湾語が飛び交っていた。

「麵線」

偉民はすぐに食べる物を決めた。この十年、食堂でゆつくり食

事を摂ることなどなかった。仲間がこっそり持ち込んでくれる弁当で飢えをしのいでいたのだ。

「おれは搾菜肉絲麵にしようかな」

欧恵博が店の人間を呼んで注文を告げた。

「ここは夜になると、台湾の愚連隊が飲み食いしに来るんですよ。やつら、まず金を払わないから、店は大迷惑なんですけどね」

「金を払わない……」

「日本人のやくざや大陸の中国人から守ってやつてるってのがやつらの言い分ですけどね」

痩せてやつれた女が湯飲みをふたつ、運んできた。

「女将さん、こちらは楊偉民さんだ。台湾の人だよ。これから鼯肩ひいにしてくれるから、よろしく頼むよ」

女ははにかんだ笑みを浮かべ、小さく頭を下げた。

「新宿には長いんですか？」

偉民は訊いた。

「いえ。戦前に主人と一緒に日本に来て、長く新橋で食堂をやってたんだけど、戦争で全部焼けちゃったんですよ。それで、七、八年前にこっちに移ってきて」

「台湾人もよく来ると聞きましたけど」

女は困惑したような表情を浮かべた。

「うちは台湾の味をしっかり守ってますから、故郷の味が懐かしいっていうお客さんがよくいらっしやいます」

「張栄健という男は来ませんか？」

「さあ。聞き覚えがないわ。ちょっと主人に訊いてきますね」

女が厨房ちゆうぼうに消えていく。

「大哥、焦りすぎですよ。夜、ここに来る愚連隊は葉の手下たちだから、そいつらをとつちめた方が早い」

「わかってる」

偉民はお茶を啜すった。お湯と変わらないほど薄い茶だった。

女が厨房から顔を出した。

「聞いたことがないそうです」

偉民はうなずき、女に頭を下げた。

「歌舞伎町の状況を教えてください」

煙草をくわえながら欧恵博に訊いた。

「陳大人を中心とした大陸の中国人、おれは台湾人だけここに属しますが、日本のやくざたち。それに葉たち台湾人の三つ巴どえで覇権争いをしてるって感じですかね。朝鮮人もいますが、それほど大きな勢力じゃない」

「野上組は？」

「武闘派で鳴らしてる組ですよ。ステゴロの喧嘩からピストルの撃ち合いまでもなんでもござれ。他の組からも一目置かれてます」

「大哥は野上さんは変わったと言っていたが……」

「野上組長のことですよね。昔がどんなだったかは知らないけど、身内には面倒見がいいが、よそ者には容赦ないですよ。組長の指示で数え切れないぐらいの人間が東京湾に沈められたってまことしやかな噂が流れてます」

偉民はうなずいた。そのような剣呑な雰囲気身をまとつていたからだ。

「歌舞伎町には国内の主立ったやくざの組が進出を狙ってるんですけど、野上組が表に立つて阻止してきたんですよ。もう、歌舞伎町を狙おうってやつらもほとんどいなくなったから、次は既に歌舞伎町に根を張る他の組を追い出そうって動きはじめてるってもつぱらの噂です」

「それが終わったら、今度は台湾人や中国人を追い出すつもりかな」

「そうなるんじゃないですかねえ。だから、大人も忙しく動き回ってます。他の組の幹部たちに野上組の動向をそれとなく伝えて回ったり……」

「大忙しだな」

偉民は皮肉を口にしたが、欧恵博には通じなかった。

「ええ。店子たちを守らなきゃならないし、本当に大変です。愚連隊はもちろん、やくざどもだって、勝手にみかじめ料を取り立てて回るし」

欧恵博が口を閉じた。女が料理を運んできた。湯氣を立てた丼がふたつ、偉民たちの前に置かれる。

偉民が頼んだ麺線は、細く柔らかな麺にとろみのついた汁をかけたものだ。欧恵博の麺には搾菜と細切りの豚肉がのっかっている。どちらも台湾人の朝食や昼食にはおなじみの品だった。

「熱いうちに食べましょう」

欧恵博が箸を手にした。偉民はまず、汁を啜った。舌が火傷しそうなほど熱いが、確かに、台湾で幼い頃食べていたものと変わらない。

「大人のために働くとなると、台湾人とも戦うことになりますよ。平気ですか？」

「陳大哥はおれの恩人だ。だから、大哥のためにできることはする。しかし、おれは大哥の手下じゃない。張栄健を見つけて殺すのがおれにとって一番大事なことだ。それが済んだら、また台湾に戻る」

欧恵博が目を見くした。

「また、白色テロのただ中に戻るんですか？」

「仲間が待ってる」

そうだ。かつての仲間を裏切った張栄健に落とし前をつけさせるといふのなら、今の仲間を見捨てるわけにはいかない。どれほど疲れていたとしても、台湾に戻り、仲間とともに戦い続けるのが筋というものだろう。

偉民は麺を啜った。麺もまた台湾のそれと同じだ。いつか、台湾の同志たちも、こうやって他人の目に怯えることなく腹を満たせる日がやってくるだろうか。台湾から国民党を追い出せる時がくるだろうか。自分はその時がくるまで持ちこたえられるだろうか。あるいは、多くの仲間が迎った死への道を歩くのか。

どうでもいい——頭の奥で意地の悪い声がする。

おまえは情性で生きてるだけだ。おまえの心はあるとき、渋

谷で死んだのだ。おまえはただの脱け殻だ。

張栄健を殺して落とし前をつければ、なにかが変わるのだろうか。

そうは思えない。脱け殻は脱け殻のままで。それをわかっていてはいるが、やはり、張栄健をのさばらせておくわけにはいかない。

「大哥、冷めちまいますよ」

欧恵博の声で我に返った。偉民は麵を頬張り、また汁を啜った。うだうだ考えていても埒はあかない。成すべきことを成し、速やかに現場を離脱する。これまで台湾で繰り返してきたことを、ここ、歌舞伎町でもやるだけだ。

* * *

夜の帳が降りると、歌舞伎町は息を吹き返した。ネオンが灯り、夜の住人たちが通りをうめていく。やがて、歓楽を求める人間たちが駅の方からぞくぞくとやってきて、猥雑な空気が満ちていく。

「ばかでかい闇市みたいだな」

偉民は建設現場のそばで煙草を吸いながら独りごちた。

東京は小綺麗な街に姿を変えていた。焼け跡は林立するビル群れに姿を変え、雨が降れば田んぼのようになった道にはアスファルトが敷かれた。荷車は自動車に変わり、ぼろぼろの服を着て

いた復員兵も、今では背広姿で会社に通っている。

近代的な都会に似合わない薄汚れたものの、猥雑なもの、胡散臭いものは、すべてこの町に押し込まれたのだ。

そう思えるほど、夜の歌舞伎町が放つ空気は異質だった。

偉民は煙草を投げ捨てると、建設現場の裏手に足を向けた。昼間食事を摂った食堂は営業を続けている。外から中の様子をうかがうと、ネクタイを締めたサラリーマン風の男たちが台湾の小皿料理を肴にビールを飲んでるのが見えた。

愚連隊が姿を現すにはまだ時間が早いようだった。

食堂に背を向け、日中、欧恵博に案内された場所を辿って歩いた。どこも台湾人たちがよく顔を出すという店だ。バーにキャバレーに雀荘、パチンコ屋——それらしい顔は見当たらない。

〈フォックステイル〉の入っているビルの近くを歩いていると、正面からこちらに向かってくる春菜と出くわした。

「これから出勤か」

偉民が声をかけると、和服姿の春菜は驚いたように目を見開き、それから愛想笑いを浮かべた。夜の人間の習性だ。

(つづく)



眠

らぬ

The Sleepless King

王

「極夜・第二部」第2回

新興暴力団を率いる、野上修。
台湾人愚連隊を操る、張栄健。
貸しビル王にのし上がった、陳文龍。
新宿の夜に、火花が散る――

画＝ケツソクヒデキ

馳星周

Hase Seisyu

主な登場人物

楊偉民（ヤン・ウェイミン） 元薬学生。闇市の露店経営を契機に華僑総本部の一員に。「渋谷事件」の最中、故郷台北に逃れたが、十年ぶりに新宿の地に戻ってきた。

陳文龍（チェン・ウェンロン） 上海人。国民党軍の元・上校（大佐）にして、現在は新宿の貸しビル王。

野上修（のがみ・おさむ） 新興の野上組組長。幾度か衝突したものの、舎弟として誘うほど、楊を買っていた。

宮下春菜（みやした・はるな） <キャバレー フォックステイル>の女主人。かつてはGHQの特務員だった。

【あらすじ】 華僑総本部による渋谷警察署襲撃、「渋谷事件」。騒擾の最中、陳文龍の手引きで台湾に逃れた楊偉民だったが、総本部長の座にありつつ同胞を裏切った張栄健への復讐のため、昭和三十一年、新宿に帰還。顔を整形した張が葉暁丹と名乗り、台湾人愚連隊を操って、新宿の覇権を狙っていることを知る。再会した陳の庇護の下、歌舞伎町の元薬局を根城に、楊はさらなる情報収集に努める。

3 (承前)

「暇そうね。うちの店に寄っていかない？」

春菜は楊偉民と肩を並べて歩きはじめた。

「暇なわけじゃない」

偉民はぶつぎらぼうに応じた。

「そんな怖い顔しないの。今夜あたり、顔を出すと思うわよ」

「だれのことを話してる？」

「台湾人の常連がいるのよ。羽振りのいいお客さんでね」

偉民は足を止めた。

「張栄健か？」

春菜が呆れたというように首を振った。

「あなたの頭の中はあの男のことではないかね。違うわ。別の男よ。でも、繋がってるはず」

相変わらず春菜の物言いは思わせぶりだった。

「何者だ？」

「お客さんのことを根掘り葉掘り訊いたりはしないのよ。気になるなら、自分で調べればいい。どうする？」

春菜が歩き出した。

「行く」

偉民は春菜の後を追った。

「昔に比べると、ずいぶん研ぎ澄まされた感じね」

春菜は歩きながら偉民の横顔を凝視した。

「あなたはいつも、虐げられる側にいるわよね。ねえ、少しは楽に生きたいと思わないの？ 虐げられる方じゃなくて虐げる方。奪われる側じゃなくて奪う方。そっちに立てば、あなた、けっこううまく立ち回れるんじゃないかと思うわ」

「おれとおれの同胞がどちらに立っているかによる。好き好んで弱い立場に甘んじているわけじゃない」

偉民は答えた。

「なるほど。虐げられてきたのはたまたまというわけね。さ、着いたわ。くつろいでいってね」

春菜の出勤時間を把握しているのか、店の前に白いワイシャツに黒い蝶ネクタイを締めた男が立っていた。店員というより用心棒といった雰囲気醸し出している。

「雅ママ、お疲れ様です」

男は春菜に向かって深々と頭を下げた。

「お客様よ。席にご案内してあげて」

「はい。お客様、こちらへどうぞ」

男は店のドアを開けると、偉民を奥の席へ誘おうとした。

「カウンターで十分だ」

「支払いは陳文龍にまわすから、余計な気は使わなくていいの

よ」

春菜が振り返った。

「氣を使つてゐるわけじゃない。カウンターがいいんだ」

「ドアに近いから、人を見張るにも逃げ出すにも一番の場所つていうわけね。あなたが台湾でどんな暮らしをしていたのか、わかつてきたわ」

春菜は微笑み、カウンターの先にあるドアの向こうに姿を消した。偉民はカウンターの右端に腰を下ろした。春菜と一緒に入店したからだろう、蝶ネクタイにベスト姿のバーテンダーがすつ飛んできた。

「お飲み物はいかがいたしましょう？」

「水でいい」

手招きをした。顔を近づけてきたバーテンダーに耳打ちする。

「台湾人が来たらおれに教えろ」

「台湾人といつても……どの台湾人ですか？」

「だれでもいい。おまえが知つてゐる台湾人が来たら教えるんだ」

「わ、わかりました。本当に水だけでよろしいんです？」

偉民はうなずいた。バーテンダーが遠ざかっていく。煙草をくわえ、火をつけた。煙を吐き出しながら店内に視線を走らせる。客の入りは五分とたったところだった。背広姿の客たちがホステスを待たせ、下心丸出しで飲んでいる。みな堅気のようなのだ。剣呑な雰囲気をもった者はいない。

煙草を吸い終わると、春菜が姿を見せた。あでやかな着物姿で、

客に挨拶して回っていく。

春菜より若かったり、春菜より綺麗なホステスは何人もいたが、春菜ほどの華を持つ女はいなかった。近くを通りかかるだけで、客たちの視線がそちらに吸い寄せられる。毒を持つ花ほど悩ましい芳香を放つのだ。

バーテンダーが持つてきた水に口をつけた。また新しい煙草をくわえた。ほとんどの客と大半のホステスが煙草を吸っている。店内には煙が充満していた。

春菜が店の一番奥のボックス席に腰を下ろした。ホステスのひとりが素早く水割りを作りはじめる。客が煙草をくわえると、春菜は優雅な仕草で火をつけてやった。客が満足そうに目を細めた。

「ママは大人気だな」

偉民はバーテンダーに声をかけた。

「ええ。ママをものにしたくて毎日顔を見せる常連さんもたくさんいます」

「男はいるのか？」

「さあ。ママの私生活は私どもには全然分からないんです」

「そうだろうな」

偉民は煙草を灰皿に押しつけた。

「お客さんはママとは古いんですよね？」

「どうしてそんなことを訊く？」

「ママがこんなふうに客を連れてくるなんて珍しいんです。おまけに、飲み代は陳文龍にまわすなんて言つてたでしょう」

「十年ほど前に、一緒に働いたことがあるだけだ」

バーテンダーが開きかけた口を閉じた。視線が偉民の背後に向けられる。

「台湾人が来ましたよ」

バーテンダーが囁いた。偉民はさりげなく入口に視線を向けた。

濃紺に白い縦縞の入った背広を着た男が店に入ってきたところだった。店員がすぐに男に近づき、揉み手でもしそうな勢いで愛想笑いを浮かべ丁寧にお辞儀をした。

偉民は目を細めて男の顔を観察した。白髪交じりの髪の毛はきちんと七三に分けている。日焼けした顔は細面で、笑い皺が目立った。鼻筋は通っており、唇は薄い。体つきも細く、身長は一七五センチといったところだろうか。

見覚えがある。

男は店員に案内されて偉民の前を通り過ぎていく。

偉民は目を閉じ、記憶を探った。

台湾では人の顔を覚えるのが癖になっていた。敵、味方、敵でも味方でもない者——多くの顔を記憶に植え付けることで生き延びる確率が増していく。脳裏に浮かぶ無数の顔をより分け、目当ての顔を拾い上げるのだ。

思い出した。

新橋の闇市の顔役のひとりだ。闇市のだ真ん中で煙草から食器までなんでも扱う雑貨屋を営み、周りの台湾人たちの相談役を買

って出ていた。

名は李 某 だったはずだ。

李は店のほぼ中央に位置するボックス席に陣取った。すぐに三人のホステスが李を囲むようにして座った。店員がてきぱきと酒を用意していく。

李は背広の内ポケットから金色に光るシガーケースを取り出し、中から抜き出した煙草をくわえた。マッチで火をつけようとするホステスを制し、自分のガスライターで火をつけた。これもまた金無垢のライターだった。

かなり羽振りがいいらしい。

「あの人は確か、李さんといったかな？」

偉民はバーテンダーに顔を向けた。

「いえ。蔡さんですよ。蔡明德さん。金貸しです」

「ずいぶん、羽振りがよさそうだな」

「高利貸しですからね。取り立ても厳しいっていう評判です。台湾人の愚連隊を使って情け容赦なく取り立てるんですよ。苦労してはじめた食い物屋や飲み屋を借金のカタに取り上げられたって話なら、そこらへんにいくらでも転がってます」

こちらも台湾人とは知らず、蔑みまじりにペラペラと話した。

「そうか」

偉民は唇を舐め、コップの水を一気に飲み干した。

「いつもひとりで来るのか？」

「たまに手下みたいなのを連れてくることもあります、たいて

いはひとりですね。ケチで、手下の飲み代を払いたくないらしいですよ」

「住処は？」

「大久保の方に一軒家を構えていると耳にしたことはありますが」

「立ちまわり先は？」

「そこまではわかりませんよ。わたしも仕事があるんで、もう勘弁してください」

バーテンダーは眉をひそめて偉民から遠ざかっていった。

李——蔡明德はホステスの作った水割りきんを口に運んでいる。左手の中指に、ごつい金の指輪がはまっていた。

おそらく、二十四金きんだろう。中国人や台湾人は昔から銀行を信用せず、稼ぎを金に替える習慣がある。

偉民は煙草も吸わず、ただひたすらに蔡明德を観察した。

蔡明德は偽名だ。新橋の顔役だった李に間違いない。

春菜が席を立ち、こちらに向かってきた。途中、蔡明德に声をかけられたが笑顔を向けただけだった。

「あら、水なんか飲んでるわけ？」

春菜は偉民の隣に座った。

「こんなところで油を売ってていいのか？ みんな、おまえと飲みたがってるようじゃないか」

「あの手の男たちは焦らせば焦らすほどお金を使ってくれるのよ」

春菜はバーテンダーに目配せをした。すぐに、ビールの入ったグラスとジタンとライターが用意された。春菜はビールに口をつ

け、ジタンを吸った。

「蔡明德というのは偽名だ」

偉民は言った。

「そうでしょうね」

春菜はさりと答えた。

「歌舞伎町で後ろめたいことをして金を稼いでいる外国人はたいてい偽名を使っているわ」

「新橋の闇市の顔役だった」

「そうなの？」

「ここを出た後はどこへ行く？」

「わたしに訊かれても困るわ」

春菜は乱暴に煙草を消し、ビールを一息に飲み干した。

「ついてきて」

そう言うと、偉民の返事も待たずに腰を上げた。偉民は一瞬躊躇ためちった。唇を噛み、春菜の後を追った。

「蔡さん、いらっしやいませ。今日は紹介したい人がいるの」

ホステスたちが移動して、春菜は蔡明德の左隣に座った。

「この人、楊偉民ようゐんさん。昔、新宿や渋谷の闇市でお店をやったのよ。一度、台湾に帰ったんだけど、また新宿に戻ってきてくれたの」

「楊偉民？」

蔡明德が偉民を見上げた。

「知らんな」

「昔、新橋の闇市で蔡先生を見かけたことがありますよ」

偉民は台湾語で言った。蔡明德の顔色が変わった。

「見間違いだらう。おれは東京に来る前は名古屋で仕事をしていったんだ。東京に来たのは二年前だ。新橋の闇市など、足を運んだこともない」

「そうですか」

「お国の言葉で話されたらちんぷんかんぷんだわ。ふたりとも上手なんだから日本語で喋ってくださいな」

「人違いでしたか」

偉民は日本語で言った。

「そうだ」

蔡明德も日本語で応じた。

「失礼しました」

「台湾から戻ったばかりなのか？」

「ええ」

「向こうは大変だったらう」

「生き地獄ですよ」

「もし金に困ってるなら、仕事のひとつやふたつは用意できるが」

「お言葉だけ頂いておきます。陳文龍先生にお世話になってますから。お邪魔しました。失礼します」

偉民は頭を下げ、蔡明德に背中を向けた。そのまま、歩いて店を出る。背後でドアが閉まるまで、蔡明德の視線を痛いほどに感じていた。

* * *

台湾人の愚連隊がよく顔を出すという店を虱潰しに当たってみたが、どこも空振りだった。

空腹を覚え、欧恵博に教えてもらったコマ劇場工事現場裏のレストランに足を向けた。昼間とは違い、ネオンが煌々と輝き、店名が目をつける。

〈西門飯店〉

台北の西門町から取った店名だろう。店内は八分ほどの入りだった。あちこちで台湾語が飛び交っているが愚連隊らしき風体は見当たらない。

偉民は店の左端の席に座り、排骨飯を頼んだ。注文を取りに来た女に愚連隊は顔を見せたかと訊ねたが、女は首を振るだけだった。

十分ほど待っていると排骨飯が運ばれてきた。豚の筋肉を香ばしく揚げたものを白飯の上に載せただけの食事だ。アサリを使った汁物と大根の漬物がついていた。漬物は八角の香りが染みており、汁はあっさりしているが味わい深い。排骨も肉に弾力があり、噛めば噛むほど味が染み出てくる。

もうすぐ食べ終わるという頃、ふたりの男が店に入ってきた。ふたりとも陰のある顔つきで、服装も崩れている。最初に店に入ってきた男はよく日焼けしていたが、もうひとりの男は色白だった。

た。

ふたりはざっと店内を見渡し、偉民のいる席に目を留めた。無遠慮な足取りで近づいてくる。

「楊偉民か？」

日焼けした方が口を開いた。日本語だった。偉民はそれには答えず、食事を続けた。

「楊偉民かと訊いてるんだ」

日焼けした男の目が吊り上がっていく。色白の方は冷静だった。

「おまえはだれだ？」

偉民は訊き、汁を啜った。

「用がある。面を貸せ」

「見てわからないのか？ 食事中だ。出直せ」

偉民の言葉が終わった途端、日焼けした男がテーブルの上の食器を右腕で薙ぎ払った。食べかけの料理が宙を舞い、食器が床に落ちて割れた。他の客たちは固唾を呑んで成り行きを見守っている。

偉民はわざとらしく舌打ちをしてみせた。

「おまえ、おれたちを舐めてるのか？ 調子に乗ってると痛い目に遭うぞ」

日焼けした男が目を剥き、偉民に顔を突き出してきた。無防備な喉元に拳を叩きつける。男が倒れ、喉を両手で押さえてのたうち回った。

「うるさいやつだな」

偉民は立ち上がり、日焼けした男の顔面に踵を叩きつけた。男は気絶して動かなくなった。

偉民は色白の男に顔を向けた。

「まあ、落ち着いてくれよ、兄貴」

男が言った。目の前で仲間が叩きのめされたというのに涼しい顔をしている。

「こいつは血の気が多くていけねえ。代わりに謝るよ。だから、勘弁してくれ」

「せっかくの晩飯が台無しだ」

「この飯代はおれが払う。だから、機嫌を直してくれよ」

「この店に迷惑もかけた。迷惑料も払ってくれなきゃ困るぜ」

男が眉をひそめた。その一瞬、涼しげな目の奥で剣呑な光が揺らめいた。それがこの男の本性なのだ。

「わかった。迷惑料も出す。だから、ちよっと付き合ってくれ。あんたに会いたいっていう人がいるんだ」

「だれだ？」

「それは会ってからの楽しみさ。いいだろう？」

男はズボンのポケットからくしゃくしゃになった紙幣を取り出し、幾枚かテーブルの上に置いた。

「これぐらいあれば十分だろう。さ、行こうぜ」

「こいつはどうするんだ？」

偉民は足もとに転がっている男を見下ろした。

「ガキじゃないんだ。目が覚めりゃ、自分の足で立って帰るだろ」

うさ」

「仲間なのに冷たいな」

「馬鹿は嫌いなんだ」

男が嗤った。

「おまえの名前は？」

「阿祥」

男は台湾風に発音した。名前の一文字に阿をつけるのは中国社会では一般的な呼び名だ。

「名字は？」

「そんなものはない。生まれたときからひとりなんだ。親父やお袋の顔も知らない。ましてや名字なんて……」

男——阿祥は太々しい笑みを浮かべた。

「みんな、おれのことを阿祥と呼ぶ。だから、おれは阿祥だ」

「わかった、阿祥。それで、おれたちはどこに行くんだ？」

「ついてくればわかるさ」

阿祥は偉民に背を向けて歩き出した。偉民がついてくると信じて疑っていないようだ。

蔡明德に会った途端、なにかが動きはじめた。

阿祥は蔡明德の手下なのか。それとも、張栄健に繋がっているのか。

「どうしたんだ？」

阿祥が入口で立ち止まり、振り返った。

「行くよ」

偉民は気絶した男をまたいだ。

「迷惑をかけたね」

厨房に声をかけ、周りの客に頭を下げる。

「律儀な人だな」

* * *

阿祥は明治通りから一本東に入った路地を代々木方面に歩いていく。ネオンの輝きも喧噪も遠くに消え去り、闇と静寂が歩くたびに濃くなっていく。

偉民は煙草を吸いながら阿祥の背中を見つめていた。気負いも焦りもない。淡々と歩いている。肝が据わっているのだ。

「どこまで行くつもりだ？」

偉民は背中に声をかけた。

「歌舞伎町じゃ目立つちまうから。もう少しだよ。ほら、見えてきた」

阿祥が前方を指さした。明かりが見える。偉民は目をすがめた。赤提灯のようだ。人通りもほとんどない路地の片隅に屋台が出ている。

匂いからすると、おでんの屋台のようだ。

「おでんか……懐かしいな」

偉民は呟いた。最後におでんを食べたのは戦中のことだ。戦争が進むにつれ、ジャガイモしか手に入らなくなり、やがて、だ

れも作らなくなった。

屋台に客はひとりしかいなかった。蔡明德ツァイミンデと名乗っている男だ。おでんをつまみながら、コップの中の酒を呷あおっている。

「老板ラオバン、連れてきました」

屋台に近づくと、阿祥は蔡明德に拱手きようしゆした。蔡明德はコップを置くと、首を巡らせた偉民を見た。

「本当に楊偉民なんだな？」

偉民が阿祥と肩を並べると、蔡明德は感慨深そうに呟いた。

「そうだ。さっきはつれなかったじゃないか」

「座らないか」

蔡明德は自分の右側の椅子を叩いた。手製の粗末な椅子だった。屋台の主人が自ら造ったのだらう。

偉民は阿祥を見た。

「座ったからって、取って食われたりはしねえよ」

阿祥はそう言つて肩をすくめた。偉民は蔡明德の隣に座った。

「なにを飲む？」

「酒はいらない。が、おでんは食べたいな。十年以上、口にしていない」

「好きなものを頼むといい」

おでん鍋の向こうにいるのは禿頭とくとうの初老の男だった。薄汚れたシャツを着て、頭にはハチマキを巻いている。

「大根とがんも、それに竹輪を」

偉民が注文すると、男は嬉しそうにうなずいた。こんなところ

で屋台を引いて、客がそう来るはずもない。

「本当は歌舞伎町やその周りで屋台を出したいんだが、シヨバ代を取られる。この親父にはそれがきついんだ」

蔡明德は酒を嚙りながら言つた。

「口が利けないのをいいことに、やくざたちが入れ替わり立ち替わりたかりに来るんだ」

偉民は横目で男を見た。確かに、口をつぐんだままだ。

ところどころが欠けた皿に盛られたおでんが目の前に置かれた。注文していない茹ゆで玉子も入っている。偉民が口を開きかけると男が微笑みながら首を横に振つた。

「なにも言わずに食べるといい。耳は聞こえるんだ。おまえが、おでんを食べるのは十年ぶりだと言つたから、サービスのつもりなんだよ」

「ありがとう」

偉民は男に言い、大根に箸をつけた。たつぷり辛からしをつけて口に運ぶ。見た目とは違い、関西風の上品な味だった。

「直接言葉を交わしたことはなかったな。だが、林昌明リンチャウミンからよくおまえのことは聞かされていた」

蔡明德は日本語から台湾語に変えた。

「大哥ダーグイを知っていたんですか」

「ああ。よく一緒に飲んだものだ。五分ゴブの兄弟分だった」

蔡明德はまた酒を呷あおった。空になったコップに、男が酒を注ぐ。白く濁った酒だ。密造酒だらう。

「新しい弟分は頭もいいし腕も立つ。凄いやつだった話を聞かされてな。そのうち、会わせてもらうって約束までしてた。おれの弟だから、おまえにとっても弟だ。もしもの時は面倒を見てくれと言ったが……実際に、おまえに会わせてもらうまえに、あの事件が起きて、昌明はあっけなく死んじまった」

蔡明德は忌々しげに唾を足もとに吐き捨てた。

「昌明の仇を取ってやる。そう誓ったんだ」

「警察に喧嘩を売るつもりですか」

偉民は玉子を頬張った。黄身にまでちゃんと味が染みていた。

「昌明を殺したのは渋谷警察署の警官たちだが、本当の悪は別にある」

「だれですか？」

偉民はわざと訊いた。

「張栄健だ。おまえだって知ってるだろう。あいつが裏切った。渋谷警察署がおまえたち台湾人の動きを把握していたのはそのせいだ。それで昌明や徐勝雄は死ぬ羽目になった」

「あんたは愚連隊を使って借金取りをやらせていると聞いた。歌舞伎町の台湾人の愚連隊は張栄健が続べているんじゃないんですか？」

蔡明德は自嘲めいた笑みを浮かべた。

「あそこで生きていくにはあいつには逆らえない。だから、今のところは頭を下げている」

「いずれは、大哥の仇を討つつもりということですか？」

「手を貸してくれないか」

蔡明德は改まった口調に変えた。

「陳文龍の世話になっていと言っただろう？ あの上海人が力を貸してくれば、張栄健を倒せる」

「その後は、あんたが歌舞伎町の台湾人を束ねるのか？」

「先のことは知らん。おれはただ、兄弟の無念を晴らしたいだけだ」

偉民は箸を置き、煙草をくわえた。マツチで火をつける。煙を蔡明德の顔に吹きかけた。蔡明德は瞬きひとつしなかった。

「おれは大哥からあんたの話を聞かされた覚えはない。大哥と兄弟分だったという話をどう信じたらしい？」

蔡明德が笑った。

「もったもな言い分だな」

蔡明德はシャツの襟の間から紐を引っ張り出した。紐の先端には翡翠の指輪がついていた。首から紐を外し、偉民に手渡した。

偉民は指輪を見つめながら生唾を飲み込んだ。

「見覚えはないか」

偉民は指輪から蔡明德に視線を移した。

「大哥も似たような指輪に紐を通して首からぶら下げていた」

「戦後、少しは稼げるようになったとき、ふたりで横浜の中華街で買ったんだ。ふたりとも酒に酔ってたから、勢いだな。男同士同じ指輪を指にはめるのもなんだからといって、紐を通して首からぶら下げることにしたんだ」

蔡明德は偉民が返した指輪をまた首から下げた。

「結構な値段でな。ふたりとも、指輪を買ったらすつからかんになった。馬鹿だったよ」

「失礼しました」

偉民は頭を下げた。

「気にするな。疑いたくなるのもよくわかる。あそこは——」

蔡明德は歌舞伎町の方向に目を向けた。

「魑魅魍魎ちみりりょうのうごめく街だ。さつきまで味方だった者が、次の瞬間には敵になっている」

「張栄健のことを教えてください」

偉民は煙草を消した。

「あの事件の後、あいつは姿をくらました。警察に仲間を売ったこととでいろいろと便宜をはかってもらえたらしい。名古屋にいたとか、大阪にいたとか言われているが、詳しいことはわからん。法律で禁止になったヒロポンを闇で売って大儲けしたんだって噂もある。とにかく——」

蔡明德は言葉切り、酒で喉を湿らせた。

「ある日突然、あいつは歌舞伎町に現れた。葉曉丹イェウシャウタンと名乗り、二十人ぐらいの子分を従えてな。それぞれ滅法喧嘩が強く、歌舞伎町で商売をしていた台湾人はみんなやられたよ。毎日ぶん殴られて商売の邪魔をされるか、それが嫌ならみかじめを払えって寸法だ。東京のすつとばけたやくざとは違う、大阪の武闘派のやくざたちと渡り合ってたからみんな強いんだろって言うやつも

いるぐらいだ」

「蔡さんもやられた口なんですか？」

「いいや。自分からやつのところへ行っただ。名前や顔を変えたところで、あいつが張栄健だつてことはすぐにわかった。兄弟の仇だ。とりあえず、やつ周辺を探ろうと思ってな。あいつもおれのことを覚えていた。笑いながら手下にしてやろうと言いがった」

蔡明德は顔を歪めた。

「周りのやつらの言葉をかき集めると、やつはやっぱり大阪にいたようだ。そこで地元やくざの組と揉め事が起きて東京に舞い戻ってきたらしい。今は、歌舞伎町を我がものにしようとしてる。陳文龍は元より、中国人、台湾人、朝鮮人を配下に置いて甘い汁を独り占めしようというのさ」

「あいつの居場所は？」

蔡明德が首を横に振った。

「用心深いやつで、ねぐらを転々としている。不意を襲って殺すのは難しい。いつも用心棒を侍らせているしな」

偉民は腕を組んだ。張栄健を見つけ、殺す。根気があれば難しくないと思っていたのだが、そう簡単にはいかないようだ。

「最近、日本のやくざとも手を組んでいる節がある。台湾からシャブを密輸して売ろうと企んでいるんだ。最近ヒロポンも滅多に手に入らなくなったからな」

克泰クタイのやつれた顔が脳裏に浮かんだ。克泰はどこからクスリを

手に入れていたのだろう。売人から張栄健の居場所を探っていくことは可能だろうか。

「野上組が台湾人の愚連隊を襲ったらしいんですが……」

偉民は呟くように言った。

「ああ、あそこは右翼の大物とも繋がりが深く、外国人を目の敵にしているんだ。張栄健の天敵だよ。いつも揉めている」

「右翼……」

「組長の野上が大物に可愛がられているって話だ。だから、新興の組なのに怖いものなしなのさ」

蔡明德が突然、右の眉を吊り上げた。

「野上組に知り合いでもいるのか？」

「組長とちょっとした因縁がありまして、可愛がってもらってます」

「陳文龍に林昌明に野上修か……面白い男だな」

「組長とは兄弟分というわけじゃありませんが」

偉民は残りのおでんを平らげ、新しい煙草に火をつけた。

「ちょうどいいというわけじゃないが、陳文龍と野上組を使って張栄健を潰せないかと考えていたんだ」

蔡明德はコップの酒を飲み干した。

「張栄健の動きはおれが調べる。おまえは、陳文龍と野上組を動かしてくれないか」

「陳大哥は最初からそのつもりですよ。ただ、野上組は、ぼくが頼んだからといって動いてくれるとは思いません」

偉民は語尾を濁した。

「策が必要ってことだな……なんとか考えよう。本当に飲まないのか？」

「台湾では、酒に逃げた仲間が大勢捕まりました」

「ここは日本だ。知り合ったばかりで、いきなり兄弟の盃（さかずき）というわけにはいかないだろうが、乾杯ぐらいできないかと思つてな」

「いいでしょう」

偉民はうなずいた。

「おい——」

蔡明德が屋台の男に声をかける。

「おまえさんが造ったどぶろくじゃなく、ちゃんとした酒を出してくれ」

男は屋台の下の方から日本酒の一升瓶を引っ張り出した。剣菱（けんびし）だ。新しいコップふたつに酒を注ぐ。

偉民は受け取ったコップを顔の前に掲げた。

「昌明の魂に」

蔡明德が言った。

「あの時死んだすべての同胞の魂に」

偉民は言い、蔡明德のコップに自分のコップを軽くぶつけた。

蔡明德が一息に酒を飲み干す。偉民もそれに倣（なま）った。

蔡明德は上着のポケットから名刺を取り出し、偉民に渡した。

名刺には〈東方金融〉という会社名が印刷されていた。蔡明德は同社の代表取締役という肩書きだった。

「なにかあったら、そこに電話をくれ。おれが留守でも話は通じ
るようにしておく。緊急の場合は、阿祥に言ってくれ。阿祥は昼
間は、明治通り沿いにあるスマートボールの店で働いている」

「スマートボールですか。パチンコは廃れたんですか？」

「連発式ってやつが出て一時は大流行だったんだが、それが禁止
されてな。パチンコ屋がなくなったわけじゃないが、スマートボ
ールに客が流れてるんだ」

「なるほど」

偉民は背後の暗闇に目をやった。阿祥は電柱のそばで煙草をふ
かしていた。

「必ず、昌明の仇を討つぞ」

蔡明德が言った。

「落とし前をつけさせましょう」

偉民は応じた。

* * *

蔡明德たちと別れた足で、陳文龍の事務所を訪ねた。陳文龍は
相変わらず次から次へと煙草に火をつけながら電話をかけまくっ
ている。口から出る言葉は日本語と北京語が半々だった。

「待たせたな」

陳文龍は柔らかな笑みを浮かべた。電話で話している間は鬼神
のような形相だったのだ。

「蔡明德と会って話をしました」

偉民は言った。

「あの高利貸しか」

「新橋の闇市にいた李某（なにかし）ですよ。どうして回りくどいことを
させるんですか？ 大哥は張栄健のことも蔡明德のことも知って
るんでしょ？ 自分で片をつければいいじゃないですか」

「おれは堅気ってことで通ってるんだ。新宿で不動産業を営む陳
文龍。愛想がよくて付き合ってもよくて金払いもいい、気さくな親
父だ。そこらのケチな悪党まがいの中国人とは一線を画す」

陳文龍は悪戯小僧（いんぎようせう）のような笑みを浮かべていた。

「国会議員の先生たちも、おれのところに金の無心に来る。ああ
いう輩は大切にしないと。悪い噂がつきまとうようになると、
やつらだって用心しておれには近づいてこなくなる」

「それにしたって——」

偉民が口を開くと、陳文龍の顔から笑みが消えた。

「おまえに汚れ仕事をやらせようというつもりもないんだ。ただ、
張栄健が相手なら話は別だろう？ 今の歌舞伎町の情勢を知って
おまえがどう動くのか……つまり、おまえの判断に委ねようと思
ったんだよ。そのままにもせずにおれのもとで働こうというなら
それによし。張栄健に落とし前をつけさせるといふならそれによ
し。決めるのはおまえだ」

「ずるいですよ、大哥」

「ずるい？」

「おれがどちらを選ぶかなんて、はじめからわかってたでしよう？」

陳文龍が破顔した。

「おまえもおれのことがよくわかってるじゃないか」

陳文龍はくわえ煙草で偉民に近寄ってきて、肩を抱いた。

「だが、これだけは信じてくれ。おまえを日本に呼び戻すかどうかは本当に悩んだんだ」

「信じます」

偉民は言った。台湾では他人を信じるのは自殺行為だった。相手を疑い、裏切りの兆候を探す毎日だった。常に疑心暗鬼の状態にいるというのは心を疲弊させる。せめて、日本にいる間だけでもだれかを信じていたかった。

「おれは平気で人を騙す^{だま}し、裏切る。だが、おまえにだけはそんなことはしない。この世界でただひとり、心をゆるせる弟だから」

「ありがとうございます」

「おまえもおれのことをそう思ってくれているといいんだが」

「思ってますよ」

「近いうち、飯を食いに行こう。おれとおまえだけでだれに気兼ねすることもなく飯を食い、酒を飲み、男の話をする。どうだ？」

「是非」

偉民は答えた。

「蔡明德はなんと言っていた？ 大方、おれを使って張榮健を追

い詰めるとかそういうったことか？」

「大哥と野上組の双方を使えないかと」

「野上組か……目の付け所がいいな」

「蔡明德は信用できますか？」

「おれはおまえ以外の人間は信用しない。あの高利貸しを信じるかどうか、決めるのはおまえだ」

「わかりましたよ。そろそろ帰ります」

「ちょっと待て」

陳文龍は自分の作業机のところに戻り、書類を掻き分けてなかを探しはじめた。

「あつた。これだ」

なにかを書き記した紙切れをつまみ上げる。

「昼間、あの薬屋に電話を設置させたんだ。これが電話番号だ」

偉民は紙切れを受け取った。

「昔は電話なんて滅多^{めった}になくて、それが普通だったんだが、今は電話がないと不便でたまらん。人間というのはあつという間に墮落する生き物だな」

「この電話のことは、しばらくの間、ぼくと大哥の間だけの話にしておいてもらえますか」

台湾では電話は盗聴されていると考えるのが普通だった。日本では事情が違ふということはわかっているが、できるだけ使いたくはなかった。

「いいだろう。電話のことを知っているのは恵博だけだ。口止め

しておく」

「よろしくお願いします」

偉民は電話番号を記した紙切れにマッチで火をつけた。燃え上がる紙切れを陳文龍の灰皿に捨てた。

「いいのか？」

「番号はもう覚えましたから。それじゃ、今夜は失礼します」

頭を下げ、事務所を後にする。ビルを出てしばらくすると、尾行者の気配を感じた。さりげなく背後を探る。阿祥の姿を確認した。

蔡明德に命じられて、偉民のねぐらでも見つけようというのだらう。

偉民はあてもなく歌舞伎町をうろつき回り、薄暗い路地を見つけてそこに足を踏み入れた。路地に入って数歩のところで立ち止まり、振り返って息を殺す。

小走りになった阿祥が路地に入ってきた。偉民を見て足を止める。

「なんの真似だ？」

偉民は阿祥に詰め寄った。

「おれの後をつけていただらう。ねぐらを探れと命じられたか？」

阿祥が微笑んでみせた。しらばっくれるのは無理だと判断したのだらう。

「まあそうなんだけど、それだけでもねえんだよ」

「なんだ？」

「葉曉丹が現れた」

「どこだ？」

「知ってるだろ？ 〈国土無双〉」

偉民は阿祥を押ししのけ、路地から出た。〈国土無双〉という名の雀荘に向かう。

「置いてゆくなよ」

阿祥が追いかけてきた。

「いきなり、雀荘に乗り込むつもりじゃねえだらうな？ 手下どもがうろろろしてるぜ」

「様子を見るだけだ」

偉民はぶっきらぼうに答えた。

「信じられねえな。殺気が立ちのぼってる」

「こんなものは殺気とは言わない」

多分、自分から溢れ出ているのは怒りと憎悪だ。抑えようとしても抑えきれないものが腹の奥からこみ上げてくる。

「大哥！」

右手から声が飛んできた。欧恵博がこちらに駆けてくる。

「弟分にした覚えはないぞ」

「いいじゃないですか、こっちが好きで呼んでるんですから。こいつは何者ですか？」

欧恵博は偉民と肩を並べて歩きながら阿祥を睨んだ。

「おまえこそ誰だよ？」

阿祥が肩を怒らせた。

「見覚えがあるぞ。おまえ、高利貸しのところの手下だろう」

「おまえこそ、不動産屋の下っ端だろうが」

「なんだと？」

「いい加減にしろ」

偉民は怒声をあげた。

「すみません」

偉民の剣幕に欧恵博がたじろいだ。阿祥は首をすくめてみせる。

「喧嘩ならよそでやれ」

「喧嘩なんてとんでもない。それより、報告があつてきたんです。

葉曉丹が例の雀荘にいますよ」

「今ごろ知つたのかよ」

阿祥が鼻で笑つた。

「てめえ——」

偉民は欧恵博を睨んだ。欧恵博が口をつぐんだ。

「黙つていられないなら、おれがおまえたちの口を塞ぐぞ」

欧恵博は怯えたようにうなずいた。

「その調子なら葉曉丹もイチコロだぜ」

阿祥に、そうからかわれた。そこから先は、三人で黙々と歩いた。

「国士無双」が入っている雑居ビルの周辺には人相の悪い男たちが数人、入口を塞ぐように立っていた。

偉民は物陰に移動した。

「あれじゃ、近づくのもやばいですね」

欧恵博が言つた。

「おれもあいつらには顔が割れてるんです」

「おれが見てくるよ」

阿祥が言つた。

「一応、あいつらの仲間つてことになつてから」

「中の様子を探つてくれるか？」

「ああ」

阿祥は偉民たちのそばを離れ、雑居ビルに向かつていった。入口近くの男たちに手を挙げて挨拶を交わし、中に入つていく。

「偉そうに」

欧恵博が足もとに唾を吐いた。

「おれのねぐらを探ろうとしていた」

偉民はビルを見つめながら言つた。あそこに張栄健がいるのだと思うだけで血が滾つていく。気がつけば強く拳を握つていて、爪が掌に食い込んでいた。

「ありそうなことですね。相手のことを根掘り葉掘り調べて、いざというときに備えておくつてのがあいつらのやり方ですから」
偉民は煙草をくわえた。欧恵博が持つていたマッチを擦つて火を近づけてくる。

「ありがとう」

「目つきが変わりましたね、大哥」

「なんのことだ？」

「あそこに葉曉丹がいるからですか？ 触つたら火傷しそうですね」

らい熱いものを感じますよ」

「気のせいだ」

偉民は煙を吐き出した。

欧恵博は偉民から目を逸らした。偉民は肩をすくめた。

(つづく)

眠

らぬ

The Sleepless King

「極夜・第二部」第3回

台湾人愚連隊への

襲撃を始めた、楊偉民。

抗争は、思いもかけない方向に

発展してゆく。

画|| ケツソクヒデキ

馳星周

Hase Seisyu

主な登場人物

楊偉民（ヤン・ウェイミン）「渋谷事件」の最中、故郷台湾へ逃れる。新宿に十年ぶりに戻り、陳文龍の庇護の下、同胞を裏切った張栄健への復讐の機会をうかがう。

陳文龍（チェン・ウェンロン） 上海人。国民党軍の元・上校（大佐）にして、現在は新宿の貸しビル王。

野上修（のがみ・おさむ） 新興の野上組組長。幾度か衝突したものの、舎弟として誘うほど楊を買っていた。

宮下春菜（みやした・はるな） <キャバレー フォックステイル>の女主人。かつてはGHQの特務員だった。

【あらすじ】 台湾人愚連隊の暴力を武器に、新宿の覇権を握ろうとしている、張栄健。楊偉民は、張に従いつつその命を狙う台湾人、蔡明德と<フォックステイル>で出会う。蔡は、陳文龍と野上組双方の力を使い、張を倒さないかと提案してきた。蔡の配下である謎めいた男、阿祥から、現在は葉曉丹と名乗っている張栄健が現れたと聞き、楊は、欧恵博と三人で、雀荘<国士無双>に向かった――。

3 (承前)

* * *

阿祥^{アセイ}が建物から出てきたのは三十分後だった。楊偉民^{ヤンウエイミン}たちが身を潜めている暗がりには目もくれず、煙草^{タバコ}に火をつけながら建物から離れていく。

「なんだよ、あの野郎」

欧恵博^{オウエイボク}が眉を吊り上げた。

「聞こえちまうぞ。静かにしろ」

偉民は欧恵博を一喝^{いっかつ}した。欧恵博が口を閉じた次の瞬間、建物からがさつな声が聞こえてきた。十人ほどの一団が姿を現した。白髪の中年男を囲むようにして歩いている。

偉民は白髪の男に目を凝らした。記憶にある顔とは目元が違う。鼻は大きく、唇は厚い。だが、耳の形は変わっていないかった。

張栄健^{チャンレンジン}だ。間違いない。

そう確信した瞬間、血が沸騰^{ふつとう}した。頬が火照^{ほて}り、筋肉が痙攣^{けいれん}する。拳^{こぶし}を握った掌に爪が食い込んだ。

待て——頭の奥で響く冷徹な声が偉民を引き留めた。

この声に従ってきたおかげでこれまで生き延びてこられたのだ。不意を突いて襲いかかったところで多勢に無勢だ。連中の腕前がどれほどのものかもわからず、たとえ全員が雑魚^{ざぎょ}だったとしても、制圧するのには時間がかかる。その間に張栄健はやすやすと逃げてしまおうだろう。そして、さらにガードを固めるようになるのだ。

今は動かず、機会を待て——頭の奥の声はそう告げている。

「やつらの後をつけろ」

偉民は言った。

「了解です」

「気づかれるなよ」

「任せといてください。こういうのは慣れっこなんです。陳大^{チェンダイ}人は人使いが荒いですからね」

欧恵博は軽口を叩くと、偉民のそばを離れていった。

偉民は煙草をくわえ、火をつけた。煙を吐き出すごとに、林^{リン}昌明^{チャウミン}と徐勝雄^{シヨウセンゴン}の顔が交互に脳裏に浮かぶ。

(待っててください、大哥^{ダイア}。仇は必ず討ちます)

足音が聞こえ、口を閉じた。火をつけたばかりの煙草を投げ捨て、足音の方に振り返る。

薄笑いを浮かべた阿祥がこちらに向かってくるころだった。

「あいづら、突然、河岸^{かし}を変えなんて言い出しやがって。焦ったよ」

阿祥は焦った様子など欠片も見せずに近づいてきた。上着のポケットから煙草の箱を取り出し、偉民に一本差し出す。

「先に声をかければよかったかな。火をつけたばかりの煙草だったのにもつたいないことをさせた」

偉民は煙草を受け取りながら苦笑した。こちらの様子を探りながら戻ってきたのだ。阿祥に隙を見せてはならない。

「あいつらの様子はどうだった？」

阿祥がつけたマッチにくわえた煙草を近づけながら訊いた。

「あの雀荘、奥に個室があるんだ。やつらはそこにいたから、様子まではちよっとね」

阿祥は偉民の煙草に火をつけたマッチで、自分がくわえた煙草にも火をつけた。

「葉曉丹の取り巻きたちがやけに機嫌のよさそうな声を出して
イェンヤオダン
たから、儲け話でもしてたんじゃないかな」

阿祥は勢いよく煙を吐き出す。

「なんとか部屋の中の話を聞けないかと頭を捻^{ひね}ってたら、連中、河岸を変えろと言いながら部屋から出てきて……慌てておれも雀荘から出たってわけさ」

「次はどこへ行く？」

「さてね」

阿祥は首を傾げ、連中が歩き去っていった方角に目を向けた。

「あっちってことは、女のいる店かな。人数が多いから、キャバレーってところだろう」

「その後は？」

「質問が多いな。おれにわかるわけがないだろう」

そう言いながら、頭を掻いた。

「葉曉丹のねぐらを探りたい」

偉民は食い下がった。

「それがわかれば苦労はしない。いつも転々としてるんだと言われなかったかい？」

「それでも突き止めなければならないんだ」

阿祥が鼻から息を漏らした。

「あのお調子者に頼みなよ」

「あんたの方が仕事ができそうだ」

「よくわかってるじゃないか。だけど、おれにもおれの仕事ってものがあるんでね。今夜はこれでおさらばさせてもらおうよ」

「おれは元々薬屋だったところに寝泊まりしている」

偉民は言った。

「陳文龍^{チェンゴン}がおれのために用意してくれた」

「空いた薬屋っていうと……あそこのことか」

阿祥は目星がついたという顔でうなずいた。

「だから、もうおれの後をつける必要はない」

「助かるよ。老板^{ラオバ}に報告できる」

阿祥は偉民に背中を向けると、右手を振りながら立ち去った。

* * *

ねぐらの薬屋に戻り、暗闇の中で煙草をくゆらせていると電話が鳴った。受話器に伸ばす手が震える。

台湾でかかってきた電話は「すぐにそこから逃げろ」というものが大半だった。相手は用件を口にするとすぐに電話を切ったものだ。おかげで呼び出し音を聞くと、反射的に汗を掻き、身体が震えるようになった。

意志の力で震えを抑えこみ、電話に出た。

「大哥？」

欧恵博の声が響いた。

「ああ」

「あの後、やつらは二手に分かれまして、若い連中はアオセンに繰り出したみたいですが、葉曉丹たちは別の雀荘に乗り込んで行きました」

「アオセン？」

偉民は眉を吊り上げた。

「ああ、大哥は戻ったばかりだから知らないんですね。アオセン——青線アオセンっていうのはもぐりの売春地区のことですよ。警察が認可しているところは赤線アカセンっていうんですが」

「なるほど。それで、葉たちがいる雀荘はどこだ？」

「説明しづらいんで、人を迎えに行かれますよ」

背中ががちりちりと音を立てて粟あわだつていく。

「信用できる男なのか？」

欧恵博が苦笑するのが聞こえた。

「女ですけど、だいじょうぶです。おれが保証しますから」

欧恵博の保証など、まったく信用できない。温和な笑顔の裏で保身のみを望み、平気で他人を裏切るやつらを台湾で嫌というほど見てきた。

ここは日本だ——何度も自分に言い聞かせ、気持ちを落ち着けた。

「趙美蓮チウメイレンという女です。別嬪べっぴんですよ」

「何者だ？」

「陳大人の妻めかけです。たまたま出くわしたんで、お使いを頼みました」

「大哥の……そんなことを頼んで平気なのか」

「気のいい女なんです。それじゃ、おれは見張りを続けますんで」電話が切れた。偉民は受話器を置き、煙草を消した。暗闇の、息を殺してその女とやらがやって来るのを待つ。

五分ほどすると、軽快な足音が聞こえてきた。足音は薬屋の前で途絶えた。

「ごめんください」

流暢な日本語が聞こえた。若い女の声だ。偉民は神経を研ぎ澄まし、外の気配を探った。女しかいないようだった。

「だれだ？」

偉民は訊いた。

「恵博からあなたを案内するように頼まれたんだけど」

声が苛立ちを孕んだ。偉民は明かりを点けずに家の中を進み、戸を開けた。背の高い女と目が合った。

「あなたが楊偉民？」

女が口を開いた。肩までの長さの髪がゆるく波打っている。目が大きく、鼻と口が小さかった。化粧は控えめだが、唇がはつとすほど赤い。白地に花柄のブラウスをまとい、紺色のスカートをはいっている。足もとハイヒールだった。

「そうだ」

「わたしは趙美蓮よ。あなたの話はあの人からよく聞かされているわ」

趙美蓮が右手を差し出してきたが、偉民はそれに気づかない振りをした。

「案内してくれ」

外に出て、戸に鍵をかける。趙美蓮は腕組みをして偉民を見つめていた。

「愛想がないのね」

日本語同様、訛りのない綺麗な北京語だった。

「どっちだ？」

偉民も北京語で返した。

「ついてきて」

趙美蓮は北に向かって歩き出した。背筋をぴんと伸ばし、胸を張って歩く姿は自信に満ちあふれている。怖いものなどなにひとつないかのようだ。

「大哥とはどこで知り合った？」

偉民は後を追いつながら趙美蓮の背中に質問を放った。

「大哥？」

趙美蓮が怪訝そうに振り返った。陳文龍を大哥と呼ぶ人間は他にはいないのだろう。

「陳大人のことだ」

「ああ、あなたのことを弟と呼ぶものね、あなたにとってはお兄さんよね」

趙美蓮はうなずいた。

「あの人と母が幼馴染みの。父が死んで、母があの人を頼ろうって家族で日本に来たのよ。すぐに見初められて、一生家族の面倒を見てやるからおれの女になれって。娘ぐらい年が離れてるのに、男ってろくでもないわね」

「日本語が上手すぎるな」

偉民は言った。

「父が日本人だからよ。特務機関員だったんですって。戦争が終わっても、日本へは帰らず、母と暮らすことを選んだの。中国人になりすましてね。スパイだから、言葉も完璧。だれにも疑われなかったわ。長女のわたしにだけ、日本語を覚えておいても損はないと教えてくれたの」

「よく中国を出られたな」

「あの人がいよいよ手を回してくれたからよ。あのまま上海にいたら、母も長生きできなかったと思う。恩を感じてるから、あ

の人の女になったのよ」

趙美蓮は路地をいくつか縫い、大きな通りに出ると足を止めて左右に視線を走らせた。

「今日も結構な人出ね」

そう呟くと、大腿で歩き出す。確かに、通りは酔客だらけだった。

「大哥と一緒に住んでるのか？」

「まさか。あの人が買ってくれた家に家族と住んでいるわ。呼び出しがあったときだけ、あの人のところに向くのよ。最近はまだ呼ばれないわ。飽きられてるのかしら」

趙美蓮は自嘲した。

「今度、あの人に聞いておいて。もし飽きたんなら、願ったり叶ったり。手切れ金、たくさんもらってさよならするわ」

あっけらかんとした話し方だった。

「情はないのか？」

趙美蓮が笑った。

「父と年が変わらないのよ。情なんて、持ちたくたって持てないわ。わたしたちを日本に呼んでくれたし、豊かな暮らしも与えてくれる。そのことに感謝してるだけ——確か、ここを曲がるの」

趙美蓮は左手に伸びる路地に足を向けた。

「いたわ」

歩く速度を緩め、声をひそめる。

暗がりに、赤い光が見えた。だれかが煙草を吸っている。目を

凝らすと、欧恵博だということがわかった。

「じゃあ、わたしはここで」

趙美蓮が振り返り、来た方向へ軽やかに去っていった。

「大哥」

欧恵博が煙草を投げ捨て、偉民に手招きする。偉民が近づく、はす向かいのビルに目を向けた。

「このビルに入ってる雀荘です——」

欧恵博が口を閉じた。ビルの中から怒声が聞こえた。なにかが倒れる物音と麻雀牌が転がる音が続く。

「みかじめを寄越せと迫ってるんですよ。大人が目をかけてる台湾人の店なんですけどね。ふざけやがって」

欧恵博は足もとに唾を吐いた。

「陳大哥は指をくわえて見てるだけなのか？」

「まさか。仲間を呼びました。ここでカタをつけてやる」

欧恵博は懐から匕首を取り出した。

「大哥も加勢してくれませんか？」

偉民はうなずいた。乱闘が起こつて張栄健を殺す機会が巡ってくるなら儲けものだ。

怒声はまだ続いている。ビルから数人の男たちが逃げるように出てきた。雀荘にいた客だろう。

「二度と来るか」

捨て台詞を吐いて路地から消えていく。

偉民は大きな通りに目をやった。違和感を覚えたのだ。いつの

間にか喧噪がやんでゐる。

「ここで待っている」

通りに出て辺りを見回した。あれほどいた酔客が影も形もないかわりに、ひとかたまりの集団がこちらに向かつてくるのが見えた。

十人弱の一団で、手に手に角材や野球のバットを握っている。刃物をぶら下げてゐる者もいるようだった。

偉民は目を凝らした。見覚えのある顔がたくさんある。張栄健——葉曉丹と一緒に最初の雀荘から出てきた男たちだ。青線へ向かったというのはこちらを油断させるための策略だったのだ。

偉民は身を翻した。路地に飛び込み、叫ぶ。

「逃げろ、罨だ」

欧恵博に向かつて駆けながら叫んだ。欧恵博が間の抜けた顔を見つけてきた。欧恵博の周りには数人の男たちが集っていた。

「罨？」

「いいから逃げるんだ」

欧恵博の肩をどやしつけ、その脇を駆け抜ける。

「どういふことですか？」

欧恵博と仲間たちが追いかけてくる。

「やつらの仲間が来る。みんな得物を手にしてるぞ。最初からここでおまえや仲間たちを襲うつもりだったんだ」

欧恵博が駆けながら振り返った。路地に、葉曉丹の手下たちが雪崩れ込んでくる。

「やべえぞ」

欧恵博の顔から血の気が引いた。

「散れ。ひとかたまりで逃げると一網打尽にされるぞ」

偉民は叫んだ。欧恵博の仲間たちが散り散りになっていく。目についた路地に飛び込んだ。土地勘はないが、あまたの死地を潜り抜けてきた己の感覚には自信があった。

世界のどこへ行こうとも生き延びることができる。

自分はそういう存在になったのだ。

欧恵博の息づかいが背後で聞こえた。走り続ける。偉民についているのは欧恵博だけだ。

「おまえは運がいいな」

偉民は言った。欧恵博の返事はなかった。ただ、徐々に激しさを増す息づかいが続くだけだった。

* * *

「偉民のおかげで九死に一生を得たというわけか」

陳文龍は苛立たしげに煙草を消した。

「すみません、大人。油断しました」

欧恵博はしよげ返っている。

「おまえを呼んだわけがわかるだろう。おれの手下どもはこんな体たらくだ」

陳文龍は新しい煙草をくわえ、火をつけた。

「もう行け」

冷たい言葉を欧恵博に投げつける。欧恵博は背中を丸めて出ていった。

「よく畏だと気づいたな」

偉民は陳文龍の言葉に肩をすくめた。

「台湾に比べれば、日本は生温い。すぐにわかりますよ」

「それでこそおれの弟だ」

陳文龍の表情がやっと和らいだ。

「いつもこうなんですか？」

偉民は部屋の中を見回した。神楽坂町——今は神楽坂と呼ばれる街の一角にある一軒家の書斎だった。陳文龍の持ち家ということだった。陳文龍は新宿区内に数件の家を持ち、転々としながら暮らしているとのことだ。どうにか逃げおおせた後、欧恵博がここに連れてきたのだ。欧恵博は陳文龍の居所を逐一把握しているらしい。

「最近、やつらは図に乗っている。なんとかしないと、こっちは押される一方だ」

「大哥の手下はどれぐらいいるんですか？」

「いつでも動けるのは欧恵博を含めて数人だ。後の連中は自分の仕事があるから、おれが助っ人を頼んだときにしか来やせん」

「大哥は堅気ですからね」

偉民は言った。陳文龍は顔をしかめた。

「あつちは愚連隊だ。世間体を取り繕う必要がないからな」

「ぼくに考えがあります」

「名案があるというんだな？」

「名案かどうかはわかりませんが……いつでも動ける大哥の手下をぼくに預けてくれませんか」

「いいぞ。好きにしろ」

「それから、以前、いただいた仕込み杖はどうなりました？」

「大切に取つてある」

「それをまたぼくに預けてください」

「おまえがまたあの仕込み杖を手にするのか」

陳文龍は感慨深げに煙を吐いた。

「それで、どうするつもりだ？」

「葉曉丹の手下たちをひとりずつ、潰していきます。全面的な戦いになれば、こっちの分が悪いです。が、ひとりずつ相手にしていく分には不利もくでもない」

「わかった。この件はおまえに一任する。仕込み杖は明日にでも届けさせる」

「お願いします。じゃあ、ぼくはこれで」

「そう急がなくてもいいだろう。一杯飲んでいけ。イギリスから取り寄せたスカッチがあるんだ。飲んでいけよ」

「じゃあ、一杯だけ」

「相変わず、付き合いが悪いな」

陳文龍は机の一番下の抽斗から見慣れない名前の記された瓶とコップをふたつ、取り出した。煙草を口にくわえたままコップに

酒を注いでいく。

「今夜、美蓮に会ったそうだな」

「ええ」

「どう思った？」

「あっけらかんとした、いい女性ですね」

偉民はコップを受け取り、中の酒を舐めた。ビロードのように滑らかな口当たりで、香^{かうば}しい匂いが鼻にまとわりつく。極上のウイスキーなのだ。

「そうなんだ。楚^そ々としたところがまったくくない。そこが気に入ってるんだがな」

陳文龍の鼻の下が伸びた。趙美蓮は飽きられているらしいと言っていたが、どうやら陳文龍はいまだにぞっこんらしい。

「他にも女はたくさんいるんでしょう？」

「いや」

陳文龍は首を振り、酒を飲んだ。

「あいつを妾^{めかけ}にしてからは、他の女たちとは手を切った。もちろん、たっぷり金を渡して別れたんだがな」

「惚^ほれてるんですね」

「年^{とし}甲^が斐^いもなくな」

陳文龍は否定するどころかあつさりと肯定した。

「幼馴染みの娘さんだと聞きましたが」

「そうだ。本当ならおれの娘と言ってもいい存在だが、人間の気持ちというのはどうにもならんな」

陳文龍はコップの中身を一息に飲み干し、また酒を注いだ。

「お代わりは？」

「この一杯で十分です。こんな酒をしこたま飲んだら、他の安酒が飲めなくなる」

「可愛いことを言うじゃないか。おれがどんな酒でも飲ませてやるから安心しろ」

「自分の飲む酒ぐらい、自分でなんとかしますよ」

「おまえらしいな」

陳文龍はまた酒を呷^{あお}った。

「美蓮のことを気にかけてくれ。ずっと年下だが、おれの女だから姐^{あね}御^ごだ」

「わかりましたよ」

偉民はうなずいた。

「おまえが戻ってくれて、こんなに心強いことはない」

陳文龍がコップを掲^かげた。偉民もそれに倣^{なら}い、残っていた酒を飲み干した。

4

人の気配に目が覚めた。しばらくすると、戸を叩く音が響いた。偉民は寢床から抜け出し階^{かい}下に降りた。

「だれだ？」

外に声をかける。

「わたしよ」

趙美蓮の声が返ってきた。気配は一つしかない。偉民は肩の力を抜き、戸を開けた。仕込み杖を手にした趙美蓮がずかずか中に入ってくる。

「なんなの、この杖。嫌になるくらい重いわ。くたびれちゃった」

趙美蓮は杖を偉民に押しつけると勝手に靴を脱ぎ、奥の部屋へ上がっていく。偉民は止めようとしたが、思い直した。元々ここは陳文龍の持ち物なのだ。陳の女がどう振る舞おうが咎める理由はない。

「喉が渴いたからお茶でもと思ったけど、なにもなさそうね」

趙美蓮は腰に手を当て、首を横に振った。

「水でよければ」

偉民は言った。

「出かけましょう」

「どこへ？」

「お茶の飲めるところよ。決まってるでしょう」

趙美蓮はまた靴を履き、外に出ていく。偉民は苦笑した。自分の気分を最優先させる女なのだ。

仕込み杖を持ち直した。懐かしい重みを感じると、かつての記憶が次々によみがえってきた。

「なにをしているの？ 早くしなさいよ」

外から叱咤する声が飛んできた。偉民は回想を断ち切り、外に出た。

「その杖を持ち歩くの？ あんなに重いのに」

「そのために持ってきてもらったんだ」

「物好きな人ね。こっちよ」

趙美蓮は偉民に背を向け、東に向かって歩き出した。

「お茶の飲めるところというのはどこだ？」

「黙ってついてくればいいの」

偉民は口を閉じた。

趙美蓮は少し広い通りを渡り、入り組んだ路地に入っていく。

「ここから先は青線よ。花園町って言うんだけど」

「若い女が足を踏み入れるべきところじゃなさそうだな」

「あら、若い女が働く場所よ。まあ、若くない女もたくさんいるけど」

路地を抜けると、長屋のような建物が並ぶ区画に出た。趙美蓮は一番手前の長屋の、一番手前のドアを叩いた。

「お婆ちゃん、おはよう。お茶を飲みに来たわよ」

声を張り上げる。しばらくするとドアが開き、皺だらけの小柄

な老婆が顔を出した。

「おはよう、蓮々。おや、男連れかい。めずらしいね」

老婆が口にしたのは南方訛りの強い北京語だった。

「あの人の弟分よ。お婆ちゃんの美味しいお茶を飲ませてあげたいの」

「中に入ってお待ち」

「ありがとう」

趙美蓮に促され、偉民は中に入った。鰻の寢床のような細長い間取りで、五人ほどが座れるカウンターがあった。奥に階段がある。

老婆はカウンターの内側に移動し、お茶を淹れる支度をはじめた。

「ここでお酒を飲んで、二階で買った女と寝るのよ」

趙美蓮が言った。

「なるほど」

「あんたの顔に見覚えがあるよ」

老婆が言った。

「闇市で小商いやってただろ」

「ええ」

「あんたの仲間の二人は礼儀知らずだったけど、あんたは年寄りだろうがなんだろうが分け隔てなかったね」

「おれの店で買物をしたことがあるんですね」

「あの頃は、そうするしかなかったからね。しばらく顔を見なかったけど、どこかへ行ってたのかい」

「故郷に戻っていました」

「そのまま故郷に骨を埋めればよかったものを……突っ立ってないで座りなよ」

老婆に言われ、偉民は趙美蓮の隣に腰を下ろした。すぐに、老婆が小さな湯飲みを偉民たちの前に置いた。白い陶器の湯飲みの中で、淡く色づいた茶が揺れている。

「台湾の烏龍茶だよ。あんたも台湾の生まれだろう？」

「ええ」

偉民は茶を啜った。茶に詳しいわけではないが、とても美味しい茶だということだけはすぐにわかった。

「飲んだらとっと帰っておくれ。わたしはまだ眠いんだよ」

老婆は趙美蓮に目を向けた。

「ごめんなさい。でも、どうしてもお婆ちゃんのお茶を飲みたかったの」

「まあね。これ以上のお茶が飲めるところなんて、東京じゃ他にないよ」

「わかってるわよ。だから来たんじゃない」

趙美蓮は両手で湯飲みを持ち、優雅な仕草でお茶を飲んだ。

「ほんとに美味しい。ここのお茶を飲んだと、まだ上海にいるような気分になるわ」

「わたしは寝るからね。飲み終わったら勝手に帰っておくれ」

老婆はそう言うと、階段をのぼっていった。天井が軋み、埃が落ちてくる。偉民は湯飲みに手をかざした。

「冷めないうちに飲んでしまつて」

趙美蓮の湯飲みはもう空になっていた。偉民は残りの茶を飲み干した。

「じゃあ、行きましょう」

趙美蓮は肩からぶら下げたバッグから無造作に紙幣をつかみ出し、カウンターのの上に置いた。

「ずいぶん高い茶だな」

偉民は言った。

「気持ちの問題よ。どうせ、あの人のお金だし」

趙美蓮は偉民には目もくれずに外へ出ていった。偉民は後を追った。

「その杖、刀かなにかなんでしよう？」

趙美蓮が振り返り、偉民が手にした杖を睨んだ。

「それで人を殺すの？」

偉民はうなずいた。

「あの人のために？」

偉民は首を振った。

「男って、本当にどうしようもない馬鹿ばかりね」

「反論のしようがないな」

偉民は苦笑した。

「じゃあ、わたしは行くわ」

趙美蓮はにこりともせず歩み去っていった。

* * *

偉民の目の前には更地さらちが広がっており、建築資材が無造作に積み上げられていた。陳文龍ちんぶんりゅうがまた新しいビルを建てるのだという。積み上げられた角材の端っこに腰を下ろし、煙草を吸っていると欧恵博がやって来た。

欧恵博は三人の男を従えている。

「おはようございます、大哥」

欧恵博が声を上げると、他の三人も挨拶の言葉を口にした。

「おれはおまえたちを弟分にした覚えはない」

偉民は冷たく言い放った。

「そうだ。大哥の弟分はおれだけだ。おまえたちは大哥を楊老師せんせと呼べよ」

「偉民さんでいい」

偉民は偉そうに男たちを睥睨へいげいする欧恵博の向こう脛すねを杖の先で叩いた。欧恵博は顔をしかめ、腰を落として向こう脛をかばった。

「痛い。いきなりなにするんですか、大哥」

「集まったのはこれだけか？」

「おれたちみたいな稼業かせぎの人間にはまだ早すぎるんですよ。もう少しと遅い時間にならないと、人数も集まりません——」

偉民は今度は欧恵博の右手を杖で叩いた。

「痛っ」

「痛っ」

欧恵博は左手で右手を押さえた。

「勘弁してくださいよ、大哥」

「おれの呼び出しは陳大哥の呼び出しと同じだ。どんな時間だろうと集められるだけの人間を集めろ」

「はい……」

「来なかったやつは、おれ自身で制裁を加えに行く」

偉民はひとりひとりの眼を見て言った。男たちの背筋が伸びる。

「行くぞ」

偉民は欧恵博を促した。

「は、はい、大哥。西大久保にある連中のヤサをひとつ、突き止めました」

「なんていう名前のどういう男だ？」

「林田^{はやしだ}っていう日本名を名乗ってますけど、間違いなく台湾人です。下っ端^{したば}ですけどね」

「殺すなよ。叩きのめすだけだ」

偉民は背後の男たちに向かって言い、歩きはじめた。西大久保は薬剤師学校への通学の途中にあり、昔は毎日のように歩いていた。町並みが変わってしまったとはいえ、土地勘はまだしつかり残っている。

「さすが、陳大人が見込んだ男ですね、大哥は」

欧恵博が偉民と肩を並べ、囁いた。

「さっきの一喝で、みんな背中に筋が一本通ったみたいになりましたよ。ビビってたやつもいたと思いますけど、大哥がいるなら安心だって気持ちになったんじゃないかな」

偉民は欧恵博の言葉を聞き流した。右手の杖を握り直す。初めてこの杖を手にしたときより軽く感じるのは、この手で多くの命を奪ったからだろうか。

あの頃は、自分が人を殺すようになるとは思ってもしなかった。偉民が黙っているせいとか、欧恵博も口を閉じ、黙々と歩いていた。いつもより横顔が強張^{こわば}っている。

歌舞伎町を抜けると、宅地が広がった。まだ真新しい家もあるが、戦前の佇まい^{たたず}のままの家もある。みすばらしいバラックも散見できた。

「あれです。あのバラック小屋です」

欧恵博が前方を指さした。相当地に粗末な家で、建物自体が傾いていた。手前の四つ辻に荷車が停まっており、男がひとり、煙草を吹かしていた。

「恵博」

男が欧恵博に気づき、手招きをした。

「遅かったじゃないか」

「そんなに待たせたわけじゃないだろう」

欧恵博は男を乱暴に押しのけ、荷車を覆っていた布を取り払った。荷車には野球のバットや角材が積まれていた。男たちが荷車を取り囲み、思い思いの得物を手にした。

「中にいるのはひとりだけか？」

偉民は欧恵博に訊いた。欧恵博は荷車の男に目を向けた。

「明け方、酔っ払って帰ってきてそれっきりだよ。他の人間の出入りはない」

男が答えた。

「わかった」

偉民はバラックに足を向けた。

「大哥、待ってくださいよ。まだ準備が——」

欧恵博が駆け寄ってくる。

「素早く襲撃し、素早く撤退する。頭に叩きこんでおけ」

「はい。おまえら、急げ」

欧恵博の声を聞きながらバラックの前に出た。玄関の引き戸にはめられた窓はあちこちがひび割れ、穴だらけだった。新聞紙を貼って風の侵入を防いでいる。

扉が聞こえた。

偉民は引き戸を蹴破った。扉が途絶えた。上がり框のすぐ先が畳の部屋になっており、左手に襖がある。扉はその奥辺りから聞こえていた。

土足のまま畳の部屋に駆け上がり、襖を開けた。下着一枚の男が煎餅布団から這いずり出て、床の間に置いてある短刀に手をかけようとしていた。

偉民は男の背中に飛び乗った。男は蛙の鳴き声のような声を発して背中をのけぞらせた。

「押さえつけろ」

後からやって来た欧恵博たちに命じる。欧恵博たちは男にのしかかった。

「腕を伸ばせ。右腕だ」

偉民は言った。

「てめえら、何者だ？ おれをだれだと思ってる」

男が喚いた。訛りのない日本語だ。来日して長いのか、日本で生まれたかだろう。

欧恵博が男の右腕を強引に伸ばし、手首を膝で押さえつけた。

偉民は仕込み杖を両手で握った。鞘を抜かず、杖を男の上腕に叩きつける。鈍い音がして骨が砕けた。男が悲鳴を上げた。

「新宿から消えろ。さもなきゃ、次は命がないぞ」

偉民は押し殺した声で言った。男は悲鳴を上げ続けるだけだった。

「行くぞ」

欧恵博たちはうなずき、家を後にする。

「大哥、格好いい。痺れましたよ」

走る偉民に追いつきながら、欧恵博が感極まったというような声を出した。

* * *

郭克泰は顔色がよくなっていた。げっそりと痩せていた体にもわずかに張りが戻っている。

「だいぶ人間らしくなってきたな」

偉民は畳の上であぐらを掻いた。克泰の目の前に、抱えてきた風呂敷包みを置いた。

〈西門飯店〉で買ってきた粽だ。

「冷めてしまったが、食ってみろ。故郷を思い出すぞ」

克泰は風呂敷包みを一瞥しただけで首を振った。

「腹は減ってない。なあ、偉民、ほんの少しでいいんだ。クスリを持ってきてくれないか」

偉民はそれには答えず、煙草をくわえて火を点けた。

「なあ、偉民。頼むよ」

「おまえはこれからの人生、クスリとは縁を切って生きていくんだ」

煙を克泰の顔に吹きかけた。克泰は顔をしかめた。

「つれないこと言うなよ」

克泰が目を細めた。今にも泣き出しそうな顔つきだ。クスリへの欲求が切実なのだろう。まだ時間がかかりそうだった。

「気が狂いそうなんだ」

「そんなことにはならない」

偉民は突き放すように言った。

「おまえにはわからないんだよ。クスリが打てないことが、どれだけ辛いかわかるか、苦しいか」

「ああ、わからん。だが、その辛さ、苦しさを乗り越えれば昔のおまえに戻ることはわかっている」

「昔になんか戻りたくねえよ」

克泰は風呂敷包みに手をかけ、投げ飛ばした。

「おれは知ってるんだぞ、偉民」

血走った目が偉民を睨めつけた。

「なにをだ？」

「國邦を殺したんだろう？ おれも殺すつもりか？」

偉民は煙草をふかした。この手で斬殺した呉國邦の死に顔が脳裏によみがえる。恨めしげな顔だった。國邦を殺したあの時から、

戻れない道を歩きはじめてしまったような気がする。

「おまえには生きていてもらいたいんだ。昔のように屈託なく笑うおまえを見たい。そのためなら、おれはどんなことでもする」

「無理だよ」

克泰は首を振った。

「無理なんだ。おれはおまえと違って弱い人間なんだ。頼むから、クスリを持ってきてくれよ」

「だめだ」

偉民は煙草を灰皿に押しつけた。

「クスリを持ってきてくれないなら、國邦みたいにおれを殺してくれ」

克泰がにじり寄ってきた。偉民は腰を上げた。

「また来る」

「待てよ、偉民。待てくれ」

克泰が偉民を追おうと腰を上げた。隣の部屋で待機していた男たちが出てきて、克泰を羽交い締めにして動きを止めた。

「放せ。放せよ、馬鹿野郎」

克泰の怒声が響いた。偉民は唇を噛み、家を出た。克泰の怒声はまだ続いている。その声は痛切な響きを伴っていた。

胃が重い。胸が押し潰されそうだった。

國邦と三人で、くだらない馬鹿話に興じながら薬学の学校に通っていた頃のことを思い出される。

戦争の暗い影が日本中を覆っていた。それでも、偉民たちの前

途は開けていた。資格を取り、故郷へ戻って家業を継ぐ。結婚して子供を授かり、堅実に月日を重ね、やがて子供に家業を譲り、引退して妻と悠々自適に暮らす。

あの頃見ていた夢には現実には似た重みがあった。今は夢を見ることすらゆるされない。

なにもかもが変わってしまった。だれに文句を言っても仕方がない。自分で選んだ道を、自分の足で歩いてきたのだ。

足を止め、振り返る。

家からは、まだ克泰の叫ぶ声が聞こえてきた。

5

青線の例の老婆の店で茶を啜っていると、だれかが様子をうかがいに来た。偉民は溜息を漏らした。

張栄健の手下を半殺しの目に遭わせ、欧恵博たちと別れたばかりだ。滾る血を鎮めようと茶を飲みに来たのだ。

張栄健の手下を襲撃したのは、これで三人目だった。やつらも用心深くなっており、簡単には隙を見せないようになってい

「楊偉民さんかい？」

外からこちらの様子をうかがっていた男が声をかけてきた。口調は丁寧だが、言葉の奥に研ぎ澄まされた刃物のような殺気が潜んでいる。

やくざ者だ。ということは野上の手下に決まっていた。

「野上さんがおれになんの用かな」

偉民が返事をする、外の男がたじろぐのがわかった。

「どうしてうちの親父だど？」

「おれに用があるやくざは野上さんしか思いつかないからさ」

返事の代わりに舌打ちが聞こえた。

「親父から、あんたを連れてくるように言いつかっているんだが」

「断るわけにはいかないだろうな」

「こつちが下手に出ているうちに頼みますよ」

「まあいい。たまには野上さんの顔を見るのもいいだろう」

偉民は茶を飲み干し、腰を上げた。金を渡そうとしたが、老婆は受け取らなかった。

「あなたの分は、あの娘からもらってるよ」

趙美蓮の顔が脳裏に浮かんだ。

「そういうわけにはいかない」

「あんたから金を取るなど釘を刺されてるんだ。お茶だけじゃなく、女を買いにきたときもね」

老婆の言葉遣いは頑なだった。偉民は金を渡すのを諦め、外に出た。黒いダボシャツに黒いズボン、雪駄履きの男が夕日を浴びていた。ダボシャツの上にはラクダ色の腹巻き。少し変わった膨らみから、刃物を吞んでいることがうかがえた。背は偉民よりわずかに低いが、肩幅は男の方がある。

「この前、事務所であつたんだが、あんたの方はこつちを覚えちゃいねえだろうな」

男が言った。うなずいてみせたが、その顔ははつきり覚えていた。

「新田^{にんた}っていうんだ。よろしくな」

「野上さんはどこに？」

「すぐ近くの赤提灯^{あかちょうどん}だ。おまえさんと一杯やりたいんだそうだ」

「まだ明るい」

「親父はそういうことは気にしないんだよ」

新田は笑い、偉民がついてくるのを確認しようともせず歩き出した。偉民はまたひとつ、溜息を漏らしてその後を追った。

新田が案内したのは偉民がねぐらにしている薬屋のすぐ近くの店だった。十人も座ればいっぱいになるカウンターだけの店で、カウンターのすぐ内側で炭火で鶏肉を焼いている。

「おう、来たか、楊君」

野上はカウンターの一番奥に座っていた。他に客はいない。まだ時間が早いからなのか、野上の威圧感が人を寄せつけないからなのかはわからない。野上に頭を下げると、新田は店を出て行った。

「こっちに来て座れよ」

野上は偉民に手招きしながら酒を呷った。偉民は一礼して店内に入り、野上の隣に座った。

「なにを飲む？」

「野上さんと同じものを」

「大将、焼酎をふたつだ」

野上が張り上げた声に、店主は静かにうなずいた。ヤクザの来訪を迷惑がっているのは明らかだったが、その感情を顔に出さないように努めている。

「楊君と初めて会った頃は、街中に出回ってる酒はカストリだのバクダンだの、命懸けじゃなきゃ飲めない酒ばかりだったが、今じゃこの通り。時代は変わったな」

野上は目の前に置かれたコップを手にとって掲げた。偉民もそれに倣った。コップを軽くぶつけ合い、口をつける。

「あの頃でも、闇市には真つ当な酒がありましたよ」

「そんな酒、買えるのは一部の人間だけだったろうが」

「それはそうだが」

「アメちゃんのサックの入った残飯シチューだの、色がついてるだけで味がしねえ味噌汁だの、そんなもんで空^すきつ腹をごまかしてたのが、今じゃ肉も魚も食い放題だ。たった十年でこんなに変わるなんて思いもつかなかった」

「そうですね」

偉民はコップを置いた。野上に付き合って一口だけ啜るつもりだったのだ。

「渡世^{よせ}の稼業も、昔とはいろいろ変わっちまってな。〃子供〃を抱えるおれとしては大変だ」

偉民は静かに野上の横顔を見据えた。

「話があるんですよね？」

「そうだ。ろくでもねえ昔話を長々としちまって、悪かったな」

野上は煙草をくわえた。偉民はマッチを擦り、火を点けてやった。

「最近、暴れまくってるそうじゃねえか」

野上はゆっくりと煙を吐き出した。

「そんなことはありませんよ」

「台湾人を半殺しにして回ってるだろうがよ。ちゃんとお見通しなんだぜ、こっちは」

「暴れ回っているという意識はないんです」

「台湾人といえば楊君の同胞だろうが。どうして同胞を血まみれにしなきゃならん？ 昔は、同胞を守るために必死だったじゃないか」

「あいつらは……葉村は同胞なんかじゃない」

偉民は言った。葉村と発する時、口の中に砂利を押し込まれたような嫌な感覚があった。

「まあいい。いろいろと事情があるんだろう。で、事情といえば、こっちにもあるんだ」

野上は口を閉じ、煙草の穂先をじっと見つめた。

「葉村はな——」

野上はおもむろに口を開いた。

「坂田一家つてところと手を結んでるんだ。で、おれはこの坂田親分に借りがある。自分の組を興すときに、なにかと世話になつたんだ」

偉民は頬を掻いた。話の行き着く先が見えてきた。

「葉村にちよつかいをかけてくるチンピラどもをなんとかしろと言われちまつてさ。おれと楊君の仲を承知なのさ」

「野上さんは葉村一派と抗争していたじゃないですか。葉村を見つけたら、使いを出してやるって」

野上は以前から外国人を目の敵にしていた。楊はその中では例外と言われていたのだ。

「おいおい、古い話をするんじゃないよ。楊君、この町の事情は刻々と変わるんだ」

野上は思わせぶりに煙草を吸い、酒を啜った。

「おれの顔を立てると思って、少しの間、静かにしてちゃくれねえか」

「申し訳ありませんが、それはできません」

偉民は間を置かずに答えた。野上の顔に苦笑いが浮かんだ。

「そう答えるだろうとは思ってたが、少しは逡巡してくれよ」

「すみません」

「場合によっちゃ、おれと事を構えることになるぞ」

「野上さんの立場は承知しました」

「だが、忬度はしてくれねえってわけか」

「すみません」

「謝ってばかりだな」

「他に言葉が見つからなくて」

偉民は酒に口をつけた。喉が渴いてしかたがない。

「まあいい。最初から楊君の答えはわかってたんだ。本当なら問

答無用で叩き潰すところなんだが……」

「話が終わったなら、ぼくはこれで帰ります」

偉民はコップに残っていた酒を飲み干した。

「最後にひとつだけ——」

野上が腰を浮かしかけた偉民を制した。

「さつき、昔とはいろんなことが変わっちまったといっただろう。

それはなにも、やくざの世界だけじゃねえ」

偉民は椅子に座り直した。

「おまえの兄貴分だって、昔とは違う人間になつてるかもしれないぞ」

思わず、笑った。

「なにがおかしい？」

野上の右の眉が持ち上がった。

「ぼくも、昔のぼくとは変わりましたから」

「確かな……生真面目なのは相変わらずだが、いささか血を浴びすぎたように見えるぜ」

「ご馳走様でした」

偉民は腰を上げた。今度は野上も止めようとはしなかった。野

上に一礼し、踵を返す。

「あの頃が懐かしいな」

店を出る直前、背中に野上の声が飛んできた。

* * *

〈フォックステイル〉は今夜も盛況だった。偉民はカウンターの端に座り、煙草を吸った。煙を吐きながら店の様子を探る。

春菜は蝶のように席から席へと移動し続けた。金という

名の蜜を吸い、吸い終われば別の花のところへ飛んでいつてまた蜜を吸うのだ。

「何を飲まれますか？」

見慣れぬバーテンダーが偉民の前に移動してきた。いつもの男は休みなのだろう。

「サイダーかなにかはあるか？」

「コカ・コーラならありますが」

「それをくれ」

バーテンダーが丁寧に入らずき、去っていった。偉民は煙草をくゆらせながら目頭を指で揉んだ。

疲労が溜まっている。眠りが浅いせいだ。台湾とは違ってここは安心だと自分に言い聞かせても、長い年月の間に身についた習慣は変わらない。熟睡するということは命を失うということと同義だったのだ。

「お待たせいたしました」

バーテンダーがコーラの入ったコップを運んできた。アイスピックで削った氷がたっぷり入っている。

コーラの成分ときつい炭酸が、一時、体の疲れを忘れさせてくれた。

春菜がそばを通りかかった黒服の店員を呼び止めて耳打ちをした。黒服はうなずき、偉民の方に向かつてきた。

「楊さん、ママがもう少ししたらこちらに参りますので、お帰りにならないで欲しいと申しています」

「わかった」

偉民はうなずき、煙草を消した。黒服がまた仕事に戻っていく。

「ママとはどんなご関係なんですか？」

バーテンダーが訊いてきた。

「失礼ですけど、コーラを飲むだけのお客様なんて、ママは相手にしないんですよ」

「聞いてないか？ 古い付き合いなんだ。闇市華やかなりし頃だね」

「闇市。それは古いや」

若い男が目を丸くした。

「それにしてもママは目敏いな。こっちに顔を向けたわけでもないのに、おれがいるのに気づいた」

「ママは店中に目を配られてますから。例えば、店の端っこで店員がマドラーを落としても、ママはそれちゃんと見ていて、後で店員を叱るんです」

「だれも気を抜けないってわけだ」

「ええ。でも、おかげで他の店に比べてここは店員の躰が行き届いてるって評判で客足が衰えないんです」

偉民はうなずいただけで口は開かなかった。それが合図だと察

したバーテンダーは偉民の側から移動していった。確かに、躰は行き届いている。

煙草を二本、灰にし、コーラを飲み干すと、それを見計らっていたというように春菜がこちらに向かつてきた。胸元の開いた赤いドレスがやけに似合っている。

「ハイボールをちょうだい」

春菜は偉民の左隣に腰を下ろすと、バーテンダーに命じた。煙草をくわえ、偉民に顔を向ける。

「マッチは持っていないの？」

「これは気づかなくて申し訳ありませんでした、ママ」

偉民はマッチを取り出して擦った。

「嫌みはやめてよ」

春菜はマッチに顔を近づけ、煙草に火を点けた。

「今夜はなんの用？」

「陳文龍について教えて欲しい」

春菜の顔に薄笑いが広がった。

「弟分のあなたの方がよっぽど詳しいんじゃないの？」

「おれがいなかった間の話を聞きたいんだ」

「わたし、仕事中のよ」

「なら、仕事が終わるまで待っている」

「真夜中までコーラ一杯で粘るつもり？ 勘弁してよ。カウンタ―だって、客がくればお金を稼げるんだから」

「一旦帰る。店がはねる頃合いを見て戻ってくる」

春菜は溜息と共に煙を吐き出した。

「書くもの貸して」

バーテンダーにボールペンを借り、真新しいコースターの裏になにかを書きした。

偉民はそのコースターを受け取った。

〈カサブランカ〉という名前と電話番号が記されている。

「六本木にあるバーよ。午前一時頃には行けると思うから、そこで待ってて」

「わかった」

偉民はコースターを上着のポケットに収め、財布を取り出した。

「コーラのお金なんていらないわよ。お金を払いたいなら、今度こそ、お酒を飲んでいって」

春菜はびしゃりと言くと、乱暴に煙草を消した。もう、偉民には目もくれず、自分の仕事へと舞い戻っていった。

「ごちそうさん」

偉民はバーテンダーに声をかけ、店を後にした。ビルを出る前に足を止め、外の様子をうかがう。

偉民は路上に立ちこめる不穏な空気を嗅いだ。

「なるほど」

偉民は財布から五十円のニッケル硬貨を取り出し、左右の手に握り込んだ。こうすれば、拳が硬くなる。

口笛を吹きながら外に出た。千鳥足を装いつつ靖国通りへと足を向ける。

追ってくる者の気配が濃密になった。気配は三つ。殺気を隠されてはいない。気が逸りすぎている。

偉民は数十メートルほど歩いたところで人通りのない路地に入った。

饅⁺えた匂いのする古びた建物の壁に背中を押しつけ、拳を握る。

殺気が近づいてきた。ネオンの光を反射する刃物の先端がまず見えた。ついで、刃物を構える男の姿。

偉民は右の拳を男の顔に叩きつけた。男は声もなく倒れた。刃物が路上を転がっていく。

男がふたり、同時に路地に飛び込んできた。暗くて顔は見えない。ふたりとも、ドスを腹の前で構えていた。

男たちが慌てて足を止めた。仲間が倒れているのに気づいたのだ。

偉民は男たちの隙を見逃さなかった。壁から離れ、男たちの間に割って入る。左右の拳で男たちのドスを握る手を打った。

勢いを殺さず、手前の男に体をぶつけ、反対側の壁に押しつけてから股間に膝蹴りを食らわせた。

「てめえ、このっ」

最後の男が怒声をあげながら飛びかかってきた。偉民は振り返り、追ってくる男の顔に額をぶつけた。男が両手で顔を押さえ、うずくまる。

偉民は男の顔を容赦なく蹴り上げた。

気絶したようだった。二番目の男が股間を押さえて呻^{うな}いている。

偉民は息をつき、呻く男の後頭部に足を振り下ろした。こちらの男も氣を失った。よく見ると、偉民を迎えに來た新田という男だった。

「さすがにやるのが早いな」

偉民は唇を舐めた。

* * *

仕込み杖を取りに薬屋に戻った。常時持ち歩くこともあるまいと置いて出かけたのだが、先ほどのようなことがたびたび起こる可能性は高い。たまたま不意打ちが功を奏したが、いつも上手くいくとは限らない。

歌舞伎町を回遊し、尾行がないと確信してからタクシーに乗った。四谷見附で乗り換え、溜池で降りる。公衆電話で店の場所を確認してから徒歩で六本木に向かった。

変わったのは新宿だけではなかった。六本木界限も大きく変貌している。アルファベットのネオンが多いのは、進駐軍の兵士たちがこの街を遊び場に使っていた名残だろうか。歌舞伎町の泥臭さとは無縁の歓楽街だ。

道に迷い、街のあちこちをさまよった挙げ句、やっと「カサブリランカ」の入っている雑居ビルを見つけた。

時間はすでに午前零時近かった。

「しらっしやいませ」

店に入ると、落ち着いた声が偉民を迎えた。ぴかぴかに磨き上げられたバーカウンターの内側に白いワイシャツに黒いベスト、黒い蝶ネクタイの男が立っている。薄くなった頭髪をびたりと撫でつけ、鼻の下に髭を伸ばしている。年齢は五十代半ばといったところだろうか。背筋がぴんと伸びた立ち姿は武道の達人を思わせた。

偉民は店内を見渡した。カウンターにスツールは十脚。四人掛けのテーブル席が三つ。それだけの店で、客はひとりもないかった。壁のスピーカーからアメリカのジャズが流れている。

「歌舞伎町の〈フォックスステイル〉のママとここで待ち合わせしてるんですが」

偉民は言った。

「ああ、さっき電話をくれた方ですね。ずいぶん時間がかかりましたが、道に迷われましたか？」

「六本木は久しぶりなので」

偉民は曖昧な笑みを浮かべてカウンターの左端に腰を下ろした。

「そんな端に座らないで、こちらへどうぞ」

男が真ん中の席を勧めてきた。

「遠慮しなくて、客は減多に來ませんから」

「そうなんですか」

「進駐軍がいなくなつてからは客は減るばかりですよ。アメリカ人好みのバーなんでね、日本人は敬遠するんです」

偉民は男の表情をうかがった。裏はなさそうだった。男が勧め

るままに、中央の席に移った。

「なにをお飲みになりますか？」

「アルコールの入っていないものならなんでも」

煙草をくわえ、火を点けた。

「バーに来て酒を飲まない」

「下戸なんです。申し訳ない」

「それならしかたがないですね。いいでしょう。きつと、雅ママがあなたの分も飲んでくれる。炭酸にレモン汁を少し垂らしたのはどうです？ 酒の飲めない米兵には好評でしたよ」

「それをお願いします」

「かしこまりました」

男はにこやかに言った。スピーカーから流れてくる音が止まった。男は振り返り、プレイヤーに載っていたレコードを持ち上げた。

「なにか、好きな音楽はありますか？ 演歌以外ならリクエストにお応えしますが」

「ジャズでかまいませんよ」

レコードが取り換えられた。華やかなサックスの音色が流れ出す。

偉民は仕込み杖をカウンターに立てかけ、煙を吐き出した。男がコップを白い布で磨き、アイスピックで氷を割る姿を見つめた。

なにをするにも仕草が優雅だった。ピアニストを彷彿とさせる長く細い指先が偉民の記憶を刺激した。

この指を見たことがある。

「六本木は久しぶりだとおっしゃいましたが、どちらからいらしたんですか？」

男はアイスピックで角氷を砕きながら訊いてきた。

「台湾からです」

偉民はそう答えた。男の反応を見たかったからだ。

男の手から氷が滑り落ちた。アイスピックの先端が震えている。男が偉民を見た。

「あんた、もしかすると、楊偉民か」

男が言葉を発した。台湾語だった。

「日本語が上手だな」

偉民も台湾語に切り替えた。

「子供の頃、親に連れられて日本に来た。台湾の言葉より、日本語に馴染んでいる」

「どうしておれが楊偉民だと？」

「雅ママが、最近酔っ払うとあんたの話をするんだ。おれは、新橋の闇市で洋酒を売りさばっていた。覚えていないか？」

偉民はうなずいた。やっと思い出した。新橋の闇市の西の外れで、米兵が持ち込むウイスキーを売っていた男だ。酒瓶を扱う指先が妙に綺麗だった。あの時代、真っ白な指先は珍しかったのだ。だれもかれもが薄汚れ、爪には土や垢を溜めていた。

「名前は？」

偉民は訊いた。

「日本の国籍を持っている。中村なかつむらというんだ」

「闇市にいたときの名前を訊いている」

「任志傑レンジエツ」

初めて聞く名前だった。新橋でたまに見かけたというだけの男なのだ。張栄健とは無関係だろう。

「葉曉丹という男を知っていますか？」

偉民は言葉遣いをあらためた。任志傑がうなずいた。

「愚連隊の親玉だ。同胞から金をむしる虫けらのようなやつだ」

「なにか知っていることは？」

任志傑が首を振った。

「縄張りじゃないとはいえ、できれば近づきにはなりたくないからね。こっちは必死で稼いだ金で店を出して真面目にやってるんだ」

「そうですか……」

任志傑は床に落とした水の塊を拾い上げ、水道で丁寧に洗った。

「どうして台湾から戻ってきた？ 渋谷にいた仲間の弔とむらい合戦

でもするつもりか？」

「張栄健のことで少しでも知っていることはありませんか？」

「昔の仲間とはとくに縁を切った。今は、日本人として生きている。あんたも、おれが台湾人だつてことは吹聴しないでくれ」

「もちろん、しませんよ」

偉民は短くなった煙草を消し、また新しい煙草に火を点けた。

任志傑はそれきり口を閉ざし、割った氷をコップに詰め、炭酸

を注いで最後に切ったレモンの果肉を絞った。

「お待たせしました」

日本語で言い、偉民の前にコップを置く。

「台湾は酷ひどい有り様なんだろう？」

任志傑が言った。偉民はうなずき、炭酸に口をつけた。

「どうなってしまうのかね？」

「あなたには関係ないだろう。もう日本人なんだから」

偉民は口をつぐんだ。ドアが開き、春菜が入ってきた。店で着ていた赤いドレスの上に、毛皮のコートを羽織はっている。

「しけた客ばかりだから、早めに上がってきたわ」

春菜は偉民のそばまで来て背を向けた。偉民は苦笑して腰を上げた。コートを脱がせ、丁寧に畳んで右のスツールの上に置いた。「ありがとう。スカッチのハイボールをお願い。それから、悪いんだけど、煙草を買ってきてくれる」

「いつものやつですか？」

春菜がうなずいた。

「では、飲み物をお作りしてから買ってきます」

任志傑はまた氷を割りはじめた。

「なにを飲んでの？」

「レモン入りの炭酸水だ」

春菜が鼻で笑った。

「あなたは飲み屋の天敵ね」

「長い間飲んでなかったから、体が酒を受けつけなくなってるん

だ」

「死地にいたから？」

偉民はうなずいた。

「台湾に比べたら、日本は平和よ。ずっと日本にいればいいのに」

「おまえの知ったことか。それより、陳文龍の話を聞かせてくれ」

「突然、どうしたのよ？ 兄貴、兄貴って犬みたいに尻尾を振ってたくせに」

答える代わりに煙草をふかした。

「お待たせいたしました」

任志傑が春菜の前に酒の入ったコップを置いた。

「では、煙草を買いに行ってきます」

上着も羽織らず、そのまま店を出ていく。

「あいつ、GHQのスパイだったのよ」

ドアが閉まると春菜が言った。

「オコナーが雇ったの。新橋の闇市や台湾人の動向を探らせるためにね。GHQからもらった金でこの店を出したの。わたしたちとは同じ穴の貉^{むしか}ね」

偉民は煙草を消した。目の前にいるのが楊偉民だと知って動揺したのは、偉民が復讐に來たと勘違いしたからだろう。

「どんな話をしたかは知らないけど、今でも情報通よ。うまく利用すれば、いい話が聞けるかもしれないわね」

「陳文龍の話だ」

「相変わらず愛想なしね。たくさんの男がわたしを店の外に誘い

出したくて湯水のように金を使ってるのよ。なのに、あなたはただ。笑顔を見せてくれてもいいのに」

「話を聞かせてくれたら、そうしてやるさ」

春菜は肩をすくめた。

「なにが知りたいの？」

「おれがいなかった間、なにをしていたのか」

「あなたも知ってるように、新宿の土地を買い漁り^{あさ}続けてたわ。

そのうち、あそこに歌舞伎座を作ろうって話を持ち上がった地価が急上昇したの。一部を売っただけでボロ儲けよ。さすが、先見の明があるわね。陳文龍は売却益と貸しビルで儲けた金を、与野党問わず政治家にばらまいた。今でも選挙が近くなると、当選ラインすれすれの議員たちが金をねだるために陳文龍の家に列を作るほどよ」

偉民は春菜の言葉に耳を傾けながら炭酸水を啜った。

「陳文龍は政治家にも守られて、歌舞伎町の王様みたいになっていった。歌舞伎座計画が頓挫^{とんざ}した後も、繁華街としては発展し続けてるしね。でも、急激に発展しすぎたのよ。盛り場には毎晩信じられないような金落ちる。歌舞伎町に落ちる金を目当てに、ハイエナのようなやつらが集まりだした。元々、あの辺りを縄張り^{なづ}にしていたやくざたちも、陳文龍に対抗して右翼の大物を引っ張り出してきて、議員のご加護があるといえども、以前みたいに好き勝手にはできなくなってきたの」

任志傑が戻ってきた。手にしているのはフランス製のゴロワー

ズだった。

「ありがとう」

春菜はゴロワーズを受け取り、封を切った。偉民は春菜がくわえた煙草に火を点けてやった。煙は独特の強い香りを伴っている。

「臭いって嫌がる人がいるから、店では喫^すえないのよ、この煙草」

春菜は煙草を右手の人差し指と中指の間に挟み、左手で頬杖をついた。

(つづく)

「極夜・第二部」第4回

旧友・郭克泰が薬物中毒から脱した。
その喜びも束の間――、
楊偉民は新たな襲撃を受ける。

眠

らぬ

王

The Sleepless King

画||ケツソクヒデキ

馳星周

Hase Seisyu

主な登場人物

楊偉民（ヤン・ウェイミン）「渋谷事件」の最中、故郷台湾へ逃れる。新宿に十年ぶりに戻り、陳文龍の庇護の下、同朋を裏切った張栄健への復讐の機会をうかがう。

陳文龍（チェン・ウェンロン） 国民党軍の元・上校（大佐）にして新宿の貸しビル王。楊を義弟として遇する。

野上修（のがみ・おさむ） 新興の野上組組長。幾度か衝突したものの以前は舎弟として誘うほど楊を買っていた。

宮下春菜（みやした・はるな） <キャバレー フォックステイル>の女主人。GHQの特務員を務めた過去がある。

【あらすじ】 新宿で男を目の当たりにした。整形を施しているものの、張栄健に間違いない。楊偉民はその手下を痛めつけて力を削ぐ戦術を立て、実行に移す。張一派との抗争を収めた野上修からの「襲撃を控えてくれ」との提案を拒絶したことで、野上組とも敵対関係に。「おまえの兄貴分だって、昔とは違う人間になってるかもしれねえぞ」。野上が放った一言が、楊の心にわだかまっている。

5 (承前)

「そんなときに、野上^{のがみ}が自分の組を興したのよ。歌舞伎町は暴力団が乱立してて、新興のやくざが付け入る隙はそんなにない。だから、野上は陳文龍^{ちんぶんりゅう}に目をつけて、その縄張りを少しずつ食い荒らしはじめたのね。他の組の縄張りを荒らしたら大変なことになるけど、相手が中国人なら、目くらまを立てるやくざはいないわ」

宮下春菜^{みやしたはるな}は煙を吐いた。任志傑^{れんじけつ}がカウンターの内側に戻って布でグラスを拭きはじめた。聞き耳を立てているのは明白だった。

「もちろん、やくざにだっていろんな立場があつて、陳文龍に手を貸してる連中もいる。毎晩、どこかで人が殴られたり殺されたりしてるし、ピストルの音もよく聞くわ。真つ当な商売をしている身としては、歌舞伎町は物騒だなんて噂、とつとと消えて欲しいのにな」

春菜が煙草^{たばこ}を消した。独特の匂いはしばらく経っても消えなかった。

「陳文龍は人殺しにも手を染めているのか？」

「殺してないとも思った？ 人にやらせてるのよ。自分は決し

て表には出ないで。ほら、やくざって体面を異常に気にするじゃない？ 状況的にだれそれがやったに違いないってわかってても、表沙汰にならない限りはわからないふりをするのよね。馬鹿みたい。だけど……」

春菜は思わせぶりの笑みを浮かべて酒に口をつけた。

「野上はそんな体面、気にしない。やったのはあいつだって決めたら徹底的にやり返す」

「そうだろうな」

楊偉民^{ヤンクワイミン}はうなずいた。

「陳文龍は用心棒を何人も雇っていたのよ。中国から呼び寄せた元人民解放軍の兵隊とかもいた。でも、ひとり、またひとりって野上組に殺されていったわ。残った用心棒も恐れをなして逃げちゃったのよ。野上に手を焼いているところに、葉曉丹^{ようぎょうたん}も現れて、それであなたを呼び戻したんじゃないかしら」

「そういうことか」

偉民は残っていた炭酸水で喉を潤した。

「事業家ぶってるけど、陳文龍のやつてることはやくざと変わらないわよ」

「葉曉丹の話を聞かせてくれ」

偉民はカウンターのの上に置かれたままの春菜のゴロウズに手を伸ばした。ことわりもなく一本、抜き取り、火を点ける。

「これぐらいで勘弁して。わたしは帰るわ。外に車を待たせているの。明日も仕事だしね」

春菜はハンドバッグから財布を取り出し、数枚の紙幣を無造作にカウンターに置いた。

「この人の分も」

「あんたに奢^{おご}ってもらう義理はない」

偉民は言った。

「相変わらずね。いいわ。じゃあ、わたしの分も払っておいてね」

春菜は紙幣を財布に戻すと腰を上げた。

「それじゃ、おやすみなさい。話の続きはあの男に聞くといいわ」

春菜は偉民の耳元で囁^{ささや}くとこれ見よがしに腰を振り、姿を消した。

「いい女だけど、取りつく島がないんですね、ママは」

任志傑が言った。

「葉曉丹^{イエシヤオダン}のことを聞かせてくれ」

偉民はゴロワーズの煙を任志傑に吐きかけた。

「聞かせてくれと言われても、わたしはなにも知りませんよ」

短くなったゴロワーズを指先で弾いた。煙草は任志傑の顔に当たって火花を散らす。

「なにをするんですか」

任志傑は右手で顔を押さえた。

「GHQには恨みがある。オコナーという男に利用されて捨てられた」

偉民は任志傑を睨^{にら}んだ。

「それだけじゃない。オコナーのせいで多くの同胞が死んだ。お

まえ、オコナーの犬だったそうじゃないか。さぞかし多くの同胞を売ったんだろうな」

任志傑は顔をしかめた。

「あのアマ……」

台湾語で春菜を罵^{のの}った。偉民も台湾語に切り替えた。

「今ここでおまえを叩きのめしてもいい。あるいは、古い知り合いに、おまえがあの時同胞を売ったスパイだと教えてやってもいい」

「勘弁してくださいよ」

任志傑が腰を屈め、床に落ちた吸い殻を拾い上げる素振りを見せると、偉民は素早くカウンターを乗り越えた。任志傑がガスコンロの下に右手を伸ばそうとしていた。コンロの下には抽斗^{ひた}がある。その腕を蹴飛ばし、抽斗を開けた。中にピストルが入っていた。

「やっぱり持ってたやがった」

米軍が使うコルト・ガヴァメントだ。米兵から譲り受けでもしたのだろう。

偉民はスライドを滑らせ、葉室に弾丸を送り込んだ。銃口を任志傑に向ける。

「よせ」

任志傑が後ずさった。

「おれはあの夜、渋谷にいた。仲間が次々と死んでいくのをこの目で見た」

「あんなことになるとは知らなかったんだ。本当だ。誓つてもいい」

「同胞を売った金でこの店をはじめたそうじゃないか」

「おれだって生きるのに必死だったんだ。あんたもわかるだろう？ 終戦後はだれだってそうだ。売れるものはなんでも売って、その日の食い扶持にしていたじゃないか」

「おれは、仲間を売ったことはない」

偉民は引き金に指をかけた。

「ゆるしてくれ。頼む」

懇願する任志傑の額に銃口を押し当てる。

「葉曉丹の話をしろ」

「は、話せと言われても……なにを知りたいんだ？」

「おまえの知っているすべてだ」

「たいしたことは知らない。歌舞伎町にはほとんど足を向けていないんだ。おれの耳に入ってくる情報にも限りがある」

「話すのか、話さないのか？」

偉民は冷えた目で任志傑を睨み続けた。

「四谷に女がいるという話だ」

「四谷？」

「ああ。歌舞伎町で働いていた女だ。店を辞めさせて、囲っているらしい」

「四谷のどこだ？」

「そこまでは知らない」

偉民は銃を握る手に力を込めた。任志傑が震えだした。

「本当だ。本当に知らないんだ」

「なら、調べろ」

「わかった。わかったから、ピストルを下ろしてくれ。そいつはとんでもない代物なんだ。暴発なんかしたら、おれは一瞬でお陀仏だ」

偉民は撃鉄に親指をかけ、ゆっくりと引き金をひいた。親指で撃鉄を降ろすと、弾倉を抜き、すべての弾丸を取り外して上着のポケットに押し込んだ。葉室に装填されていた弾丸も抜き出した。弾倉を元に戻し、ピストルをカウンターに置いた。

「あいつに関するありとあらゆることを調べろ。また来る」

任志傑がうなずいた。その目は二度と顔を見せるなど訴えていく。

「逃げても無駄だぞ。地の果てまでも追いかけて、おまえがしたことのをさせる」

「おれにはこの店しかないんだ。逃げたりなんかするものか」

偉民は任志傑を一瞥すると、再びカウンターを乗り越え、店を出た。

* * *

六本木からは徒歩で戻ることにした。興奮した頭を冷やしたかったのだ。

台湾では多くの命を奪ってきた。自分が生き延びるためだったとはいえ、殺しは殺した。殺伐とした状況に長く身を置いているうちに、胸の奥で暴力への渴望が頻繁に沸き起こるようになった。怒りのためか、あるいは抑圧された逃亡生活のためか。いずれにせよ暴力への衝動に一旦火がついてしまうと、自分で制御することは難しい。

任志傑に対しても、暴走してしまふところだった。銃を目にした瞬間、凶暴な獣が偉民の内部で蠢いたのだ。獣の手綱を握りなんとかなだめたが、任志傑がしらばつくれようとしたらどうなっていたかは自分でもよくわからない。

「四谷か……」

偉民は煙草に火を点けながら呟いた。

春葉が三嶋裕子は四谷に越したと言っていた。

「帰る途中だ」

偉民は煙を吐き出し、四谷方面に足を向けた。明確な目的があったわけではない。四谷の変わり様を把握し、もし、見つけることができるのなら、裕子が嫁いだという酒屋の様子を確認しようと思ったただだ。

「店はどうに閉まつてるだろうが……」

歌舞伎町に限らず、東京の町並みは偉民が暮らしていた頃とは大きく変わっていた。終戦後は焼け野原だった場所に道路が通り、ビルが建ち、住宅街には焼け残った古い日本家屋の間に真新しい家々が点在している。

町並みの変化と歩調を合わせるように、日本人はあの戦争を忘れようとしている。戦時中は口にすることも憚られた英語起源の言葉が街中に溢れ返り、だれもがアメリカ人のような暮らしを夢見ている。

戦争を主導した政治家たちも、GHQが去るのと同時に続々と政界復帰を果たしているらしい。

多くの命が戦地で散り、銃後の暮らしでも密告がまかり通っていたのはたった十数年前なのだ。

「よく、こうも簡単に忘れられるものだ」

台湾を戦争に巻き込んだことも覚えてはいないだろう。偉民は煙草を投げ捨てた。もうすぐ四谷だ。裕子がどの辺りに住んでいるのかは見当もつかない。周辺の様子を確認しながら街中を突っ切り、そのまま歌舞伎町に向かおうと決めた。

幹線道路から狭い道に入っていく。住宅街ではほとんどの家の明かりが消えていた。堅気衆はどうに惰眠を貪っているのだ。

しばらく歩いていると、前方に窓から明かりが漏れている家が見えた。夜の闇に浮かび上がる影は他家よりふたまわりは大きかった。

歩きながら耳を澄ませた。明かりのついた家から声も漏れてくる。女の金切り声と、男の怒鳴り声だ。

偉民は足を速めた。胸の奥でなにかが鎌首をもたげている。女の声に聞き覚えがあるような気がしたのだ。

近づくにつれ、明かりの漏れてくる家が普通の民家ではないこ

とがわかつてきた。建坪が広く、二階の面積も広い。どうやら、一階が店舗になっているらしい。建物の脇に置かれていた自転車の後部には、手製の荷車がくくりつけられている。

偉民は家の前で足を止めた。一階店舗のガラス張りの出入口の向こうは暗がりでもなにも見えない。出入口の上に看板が出ていた。〈大竹酒店〉

偉民は吐息を漏らし、次いで苦笑した。

やはり、金切り声は裕子のものであった。こうも簡単に裕子の家が見つかるとは。

甘酸っぱい思い出が脳裏によみがえった。あの頃の偉民は闇市でわずかなスリルを楽しむ薬学生だった。穢^{けが}れていなかった。今、その手は血に塗れ、裕子もまた不幸な結婚生活を経て、かつての裕子ではなくなっているだろう。

酒屋の前を離れようとしたとき、二階からなにかが割れる音が響いた。ガラスか瀬戸物が割れた音だった。

「あなた、そのお金を持っていくのだけはやめて！」

裕子の悲痛な声が聞こえた。

「やかましい。おれが稼いだ金をおれが使つてなにが悪い」

男のだみ声として、すぐに人が人を殴打する音が続いた。男が裕子を殴ったのだ。

すすり泣きが耳^{みみ}朶^だをくすぐった。乱暴に階段を降りてくる音がすすり泣きをかき消した。

偉民は酒屋の向かいの家と家の間の狭い路地に身を潜めた。

店の脇の通用口から中年男が出てきた。角刈りで肌の浅黒い男だ。皺^{しわ}の寄つた開襟^{かいきん}シャツに、よれよれの木綿のズボンをはいている。足もとはサンダルだった。

「後家^{ごけ}をもらつてやつただけでもありがたく思えつてんだ」

男は足もとに唾を吐いた。尻のポケットに、無造作に紙幣を押し込んでいた。

賭場^{とば}か女が買える場所にも行くのだろう。

男は自転車に跨がると、口笛ででたらめな旋律を奏でながらベダルを漕ぎはじめた。

偉民は距離を置いて男の後を追った。荷車を引いているせい、か自転車^{自転車}の速度は上がらない。

収ま^こま^まったはずの暴力への餓えがよみがえっていた。裕子を痛めつける男への憎悪が胸の奥で燃え盛っている。

男は大きな通りへ出ると、新宿方面へと向かつていった。遅い速度とはいえ、偉民との距離はどんどん広がっていく。

偉民は男を追うのを諦め、足を止めた。

ズボンのポケットに両手を押し込み、拳^{こぶし}を握る。

あの男を滅多打ちにしてやりたい。その衝動はいつまで経っても消えなかった。

6

花園町の老婆の店で茶を啜^{すす}っていると趙美蓮^{チョウメイリン}がやって来た。

「あら、ここが気に入ったみたいね」

趙美蓮は鼻にかかった声で言い、偉民の左隣に腰を下ろした。

「いい香り。どこのお茶かしら？」

「さあ。美味しい茶だということしかわからん」

偉民は言った。

「広東の茶だよ」

店の奥で編み物をしていた老婆が口を開いた。

「鳳凰單叢フエンフワンダンソウというのさ。とても香りがいいだよ」

「わたしにもそれをちょうだい」

趙美蓮が言い、老婆が面倒くさそうに腰を上げた。

偉民は茶の香りを嗅いだ。果物のような爽やかで甘い香りが鼻腔びをくすぐる。かなり高い茶葉だろうが、老婆はどういうルートで仕入れているのか。

老婆は茶さじで器に茶葉を入れ、熱湯を注いだ。器に蓋ふたをして、隙間から別の茶器に茶を注ぐ。一連の所作には一切の無駄がなく、美しかった。

茶器に茶を注ぎ終わると、一回り小さな別の茶碗に茶を注ぎ、趙美蓮の前に置く。趙美蓮は茶の香りを嗅ぎ、感嘆の声を上げた。

「こんないい香りのお茶、はじめて。広東って言ったわよね？
どうやって仕入れているの？」

「あなたの男が大陸からものを運ぶときについてに頼んでいるのさ」

「あら、あの人、お茶なんか飲まないわよ」

「興味はなくても、金さえ払えばなんでもやってくれるのさ」

「でも、こういうお茶に高いお金を払う人って、この界限かぎりにはほとんどいないでしょう？」

「これはわたしの趣味だよ。金は、女の子たちが体を張って稼かせぐのを掠め取るんだよ」

老婆が笑った。趙美蓮が茶を啜すすった。すぐに吐息を漏らす。

「香りもいいけど、味もいいわ。嫌なことを全部洗い流してくれるみたい」

「そんなに嫌なことはかりなのか？」

偉民は訊いた。

「わたしは妾めかけよ。嫌なことはかりに決まってるじゃない」

「それでもあなたは幸せな方なんだよ。ここで働いてる娘たちを知ってるだろう」

老婆は腰を叩きながら店の奥に戻り、編み物を再開した。

「そりゃそうだけど……。ねえ、偉民、今日は暇？ よかったら、一緒に映画を観に行かない？ 『裏窓』っていうアメリカ映画なんだけど。ひとりで見に行ってもなんだかつまらないし」

「予定が入ってる」

偉民は嘘をついた。

「そうなのね。仕方がないわ」

趙美蓮は落胆の表情を浮かべた。

「おはようございます」

機会を待っていたというように欧恵博オウエイボクが店に入ってきた。

「お、姐あねさんもここでしたか」

欧恵博は趙美蓮に愛想笑いを向けた。

「急にお茶がまぶくなつたわ」

趙美蓮は露骨に顔をしかめ、茶を飲み干した。

「じゃあ、わたしは行くわね」

老婆に声をかけ、腰を上げた。

「映画は今度。約束よ」

趙美蓮は店を出ていった。

「相変わらず愛想のない女だぜ」

欧恵博が嘆息した。

「あの女と映画に行くんですか？ 気をつけた方がいいですよ。

なにを考へてるかわからないし、陳大人は嫉妬深いですからね」

「なんの用だ？」

偉民はぶっきらぼうな声を出した。

「ああ、大哥の大切な友達の件なんですがね」

欧恵博は煙草をくわえ、火を点けた。

「面倒を見てるやつらから連絡が来て、だいぶ具合がよくなったから、そろそろ娑婆に戻してもいいんじゃないかって言うんですよ。様子を見に行きたいんじゃないかなと思って」

「行こう」

偉民は問髪入れずに答えた。

「だが、その前にひとつ、頼みがある」

「なんですか？」

「歌舞伎町の賭場に詳しいか？」

「花札からサイコロまで、なんでも訊いてください」

「四谷の大竹酒店ってところの主人がよく出入りする賭場を知りたいんだ」

「四谷の酒屋ですか？ そいつがなにか？」

「個人的なことだ。調べはつくか？」

「ちよつと時間にかかるかもしれませんが、任せといてください」

「恩に着る」

偉民は欧恵博の肩を叩いた。

「なにを言ってるんですか。おれは大哥の弟分です。なんだって言いつけてくださいよ」

欧恵博は相好を崩した。尻尾がついていれば、盛大に振っていいところだろう。

「じゃあ、克泰に会いに行こう」

偉民は茶を飲み干し、金をカウンターに置いた。

「彼女の分も払っておく。これで足りるかな？」

老婆に声をかけた。

「それで十分だよ」

老婆の声にうなずき、欧恵博を従えて店を出た。

* * *

郭克泰の顔色はすこぶるよかった。顔の皮膚は茹で玉子のようにつるんとして、頬にうっすらと朱が差している。ぼさぼさだつ

た髪の毛も短く刈り込まれ、糊の利いた白いシャツにベージュのズボン姿は映画俳優といつても通じそうなほど垢抜けている。

「見違えたな」

偉民は克泰をまじまじと見つめた。

「そうだろう。おれも生まれ変わったような気分だ。クスリがすっかり抜けるっていうのはこういうことなんだな」

「おれの知ってる克泰だ」

克泰は偉民の言葉にはにかなだ笑みを浮かべた。

「なんであんなものに執着してたんだろうな」

「それがクスリの怖さだ」

偉民は克泰の肩に腕を回した。久々に晴れ晴れとした気分になつていた。

「こんなところはさっさと出て、飯を食いに行こう。なんでも奢つてやるぞ。なにが食いたい？」

「肉だ」

克泰が言った。

「脂身たっぷりの豚肉。鶏肉に牛肉。とにかく、肉をたらふく食べたい」

「いいだろう」

偉民は克泰を促して練馬のあばら屋を出た。克泰が目丸くした。フォードのセダンが停まっている。運転席に座っているのは欧恵博だ。陳文龍に無理を言つて借りてきた車だった。

「自動車で迎えか」

「苦勞をかけたからな。せめて、自動車で迎えに行こうと思つたんだ」

「まるで刑務所から出所したみたいな気分だぞ」

「似たようなものじゃないか」

克泰を促し、フォードの後部座席に乗った。

「お疲れ様です」

欧恵博が克泰に声をかけ、フォードが動き出した。

「短いようで長かつたな」

偉民は言った。

「ああ、長いようで短くもあつた」

克泰が応じた。

「いろいろと手伝つてもらうぞ。おまえが一緒なら、百人力だ」

「なにを言いやがる。おれは昔からおまえの足手まといだったじゃないか」

「一緒にいてくれるだけでいいんだ」

偉民は笑つた。心の底から笑えるのはいつ以来だろう。それだけ、旧友の回復が嬉しかった。

「なんだありや？」

欧恵博が素つ頓狂な声を上げた。フォードの速度が落ちる。

偉民は前方に目を向けた。畑の中を走る道路を、斜めに停まつたトラックが塞いでいる。トラックの前には五人ほどの男たちが立つていた。見るからにやくざ者という風情だ。

「恵博、逃げろ。野上組の連中だ」

欧恵博がハンドルを切った。フォードが畑に乗り上げた。

銃声が轟いた。男たちが一斉にピストルを撃ってくる。街中と違って遠慮をする必要がないのだ。

「なんだよ、いきなり撃ってくるなんて」

欧恵博が悲鳴に似た声を張り上げた。偉民は克泰の頭を押さえた。

「伏せろ。頭を上げるんじゃない」

偉民自身も頭を下げた。鋭い音がして偉民の側の窓ガラスが割れた。ガラスの破片が頭上に降りかかり、風が吹き込んでくる。

弾丸が車体を扶る音が何度も響いた。

「なにしゃがる。大人から借りた車なんだぞ」

欧恵博が叫んだ。フォードは右へ左へ、ジグザグに走っていた。

銃声はやむことなく続いている。

「くそ。尾けられていたな」

偉民は両手で頭をかばいながら言った。陳文龍の事務所が見張られていたに違いない。野上組や葉曉丹たちの目が自分に注がれていることを頭に入れておくべきだった。

日本に来て、緊張がゆるんでいる。これが台湾なら、とうの昔に捕まっていただろう。

フォードの車輪が巻き上げた畑の土が車内に飛び込んでくる。

今度は別の方角から銃声が聞こえてきた。偉民は心持ち、頭の位置を持ち上げた。あばら屋から男がふたり出てきて、野上組の連中に向けて発砲していた。野上組の連中が怯み、トラックの後

ろに下がっていく。

「今のうちに逃げるぞ」

偉民は欧恵博に向かって怒鳴った。

「わかってます。だけど、畑の土にハンドルが取られて——」

欧恵博はしがみつこうにしてハンドルを操っていた。

銃弾が車体に当たる音が途絶えた。野上組の連中はあばら屋の男たちに応戦している。

「逃げ」

偉民は欧恵博を急かした。

「わかってますってば」

車が激しく上下する。時に後輪が滑り、ドアに体を打ちつけられる。偉民は歯を噛みしめた。下手をすれば舌を噛んでしまう。

克泰は座席の下で体を丸め、震えていた。

畑の先に道が見えた。砂利道だ。農耕車が使う道だろう。フォードのエンジンが唸り、速度が上がった。道に乗り上げると、欧恵博がハンドルを右に切った。横滑りする感覚が消えた。フォードの車輪はしっかりと地面を捉え、加速していく。

「助かった！」

欧恵博が叫んだ。偉民は座席の背もたれに体を預けた。銃声はまだ続いているが、散発的で遠ざかっていく。

「もう大丈夫だぞ」

偉民は克泰の肩を叩いた。克泰はしばらく座席の下でうずくまっていたまま震え続けていた。

「せっかく生まれ変わったのに、死ぬかと思っただぞ」

克泰は叫ぶように言い、また酒を飲んだ。

新橋の老舗中華料理屋の個室だった。歌舞伎町に戻すわけにはいかないということで、陳文龍^{カミンロウ}が店を予約してくれた。陳文龍の息のかかった男たちが店の外で見張りをしている。

卓には料理の皿が所狭しと並んでいた。豚肉の四川風炒め、北京ダック、青椒肉絲^{チンジョウニシ}、アワビの蒸し煮に川魚の姿焼き。克泰はそれぞれの皿に手を伸ばし、浴びるように酒を飲んでいく。

「確かに肝が冷えたな」

偉民はアワビを口に運んだ。

「肝が冷えた？ それだけか？ 台湾で、どんな生活を送っていたんだ？ おれたちは殺されかけたんだぞ」

「台湾じゃ、おれを殺しに来るのはもっと腕利きだ」

克泰が手にしていたコップを卓に置いた。溜息を漏らす。

「おれがクスリにうつつを抜かしている間、おまえは地獄巡りをしてたんだな」

「自分で選んだ道だ。食えよ、克泰。おまえのためにおれの大哥が用意してくれたんだぞ」

「もう腹一杯だよ。おまえこそほとんど食べてないじゃないか」

「おれはいいんだ」

偉民は料理に箸を伸ばす代わりに煙草をくわえた。満腹になれば気がゆるみ、眠くなる。寝込みを襲われて捕まった仲間を大勢見てきた。食べ物への誘惑に負けてはいけなさと自分に言い聞かせるうちに、気づけばほんの少し食べただけで満足する体になっていた。

その話を聞いたある男は、まるで野生の獣だと言って笑った。獣にならなければ生き延びることができなかったのだ。

「大哥はほんとに小食なんですよ。大哥のかわりに、克泰さんがどんどん食べてください」

欧恵博が克泰のコップに酒を注ぎ足した。欧恵博の顔も赤い。銃弾で抉られ、穴だらけになった愛車に目をやった陳文龍が舌打ちしたただだったのが肩の荷を軽くしたらしい。

「いやあ、鉛の弾が車にめり込むたびに寿命が縮む思いがしましたよ」

欧恵博は酒を飲み、煙草をふかした。

「フォードのセダンなんて、いったいいくらするんですかね？」

「よく知らんが、おまえが二十年働いたって足りないだろう」

偉民は言った。

「さあ、いつまでも飲んでないで、おれが頼んだことを調べに行け」

「今からですか？」

欧恵博は不服そうに唇を尖らせた。偉民はきつい目を欧恵博に向けた。

「わかりました。行きますよ。まったく、人使いが荒いんだから」

欧恵博は乱暴に煙草を消すと、コップに残った酒を飲み干して個室から出ていった。

「あいつ、あんまり酒癖さくせがよくないな」

克泰が言った。

「一緒に酒を飲んだのはこれが初めてなんだ。今日は特別だ。一緒に死線をかいくぐったんだからな」

克泰が鴨の皮に甜麵醬テンメンジャンをつけて口に放り込んだ。

「おれに手を貸して欲しいって言ってたけど、なにをすればいいんだ」

「張榮健チャンロウジヤンが東京に戻ってきた。今は葉曉丹と名乗って、台湾人の愚連隊を率いている」

「ああ。療養中に聞いたよ」

克泰は暗い目つきで酒を啜った。

「渋谷の仲間たちの仇を討つ」

「やつぱり、そうか……おまえが台湾に帰ったって聞いたときは、二度と日本に戻ってくるつもりはないんだろうと思ってた。もし帰ってくるとしたら、昌明チャンミンさんの復讐をしてくるぐらいだろうって」

「おれは、この手で國邦グキバンを殺した」

偉民は自分の右手を見つめた。

「ああ……」

「仲間を裏切ったからと、親友だった男を殺したんだ。なのに、

張榮健をそのままにしておくというのは筋が通らない」

克泰の顔に苦笑いが浮かんだ。

「おまえらしいものの考え方だよな」

「陳大哥が便宜をはかってくれてるが、恵博たちを頭から信用することはできないんだ。おれにはこの命を預けることのできる人間が必要だ。それがおまえだ、克泰。力を貸してくれ」

「おれなんか、足手まといになるだけだって。喧嘩けんかが強いわけでもないし、度胸があるわけでもない。弱虫の意気地なしだ」

「一緒にいてくれるだけでいいんだ」

克泰が苦笑した。

「それは女にいう台詞せりふだろう」

「渋谷の闇市にいた仲間の消息を知らないか？ 東京に残ってる者がいるなら、呼び集めたい」

「知らないわけじゃないが、みんな、もう昔とは違うぜ。所帯を持ったり、商売をはじめたり、切った張ったとは無縁の世界で生きてる」

「それでも、なにがしかの思いを胸の奥に抱えているやつはいるはずだ」

「わかった。おれの知ってる範囲で声をかけてみるよ」

「頼む」

偉民は自分と郭克泰のコップに酒を注いだ。アルコールの強い白酒バイチウだ。

「もう一度、兄弟の契りを交わそう」

「今さら、なんだよ」

「覚えてるだろう。昔、國邦と三人で兄弟分の盃を交わした」

「あれは若氣の至りだよ」

三人で盃を交わしたのは戦争の真っ只中だった。日に日に町の
雰囲気重苦しくなっていき、密告が相次いだ。だれもが疑心暗
鬼になり、外人だと知られるとリンチを受ける恐れすらあった。

こんな時だからこそ、お互いを信じ、共に異国の地で生き抜こ
うと國邦が言い出し、克泰がどこから調達してきたまづい焼酎
で盃を交わしたのだ。

兄弟分になろうと最初に言い出した國邦が仲間と偉民を裏切っ
た。

もう、あんな目に遭うのはごめんだ。

克泰のことは必ず守る。國邦と同じ道を歩むことのないよう常
に目を配るのだ。

「もういちど、兄弟の絆を確かめ合おう。兄も弟もない。おれ
たちは同等の兄弟だ」

「わかったよ」

克泰がコップを手を取った。同時にコップを掲げ、縁を合わせ
る。

偉民はコップの中身を一息に飲み干した。克泰はちびちびと飲
んでいく。もう、相当飲んでいるのだ。目を閉じてコップを傾け
る横顔が苦しそうだつた。

「全部飲む必要はないぞ」

偉民は言った。しかし、克泰は酒を飲み続け、時間をかけて飲
み干した。

「おまえとの盃だ。飲み残していいはずがない」

「時間はたつぷりある。ゆっくり飲んで、ゆっくり食おう」

陳文龍が近くの旅館に部屋を取ってくれている。今夜はそこで
寝るのだ。

明日からも、血なまぐさい日々が続くだろう。

クスリの呪縛から解かれた克泰とこんなふうに屈託なく笑える
夜がそうたびたび訪れるとは思えない。

今を思う存分楽しめ——偉民は自分に言い聞かせ、空になった
コップに酒を注いだ。

7

タクシーを降りると、克泰に肩を貸しながら周囲に目を走らせ
た。

まだ朝の早い時間で、通りを歩く人間もまばらだった。懐に
剣呑なものをしのばせた目つきの悪い男たちもいない。

二日酔いで苦しむ克泰をなだめながら、ねぐらである薬屋に戻
った。二階に上がって布団を敷き、克泰を横たわらせる。

「おれは出かけてくる。鍵はしっかりとかけていくからな。もし、
出かけるときは見張られていないかどうか、繰り返し確認しろ」

偉民は言った。克泰は唸りながら寝返りを打った。

「後で、恵博にピストルを持ってこさせる。自衛用だ」

克泰の肩を叩き、偉民は電話に手を伸ばした。

欧恵博に聞いた番号に電話をかける。

「おはようございます、大哥」

欠伸^{あくび}混じりの声が電話に出た。

「調べはついたか？」

「ええ。ばっちりです」

「すぐに会おう」

「今からですか？ おれ、さっきねぐらに戻ってきたばかりなんです」

「今すぐだ」

偉民はきつい口調で言った。野上組や台湾人の愚連隊が動き出す前にやれることはやっておきたかった。

溜息が聞こえた。

「どこへ行けばいい？」

「〈西門飯店〉^{シモンファンデーション}はどうですか？ 朝飯も食わせてくれるんです」

「わかった。すぐに向かう」

「まったく、大哥は人使いが荒い。大人とそっくりだ」

偉民は欧恵博の愚痴を最後まで聞かずに電話を切った。

* * *

るんです」

欧恵博は粥^{かゆ}を啜りながら言った。干しエビや干し貝柱で出汁を取った粥だ。偉民たちの他にも二組の客が粥を食べている。

偉民は粥は注文せず、代わりにお茶を頼んでいた。まだ、昨夜の料理が胃に残っている。あんなに食べたのは久しぶりだった。

「大竹って名前かどうかまではわかりませんでしたけど、四谷の酒屋がよく出入りしてるって話を小耳に挟みました。だいたい負けが込んでるようで、そのうち、借金のカタに店を取られるんじゃないかって」

「その賭場は毎晩開いてるのか？」

欧恵博が首を振った。

「月水金と土曜です。夜の八時から明け方まで」

偉民はうなずいた。昨日は水曜だった。

「一見^{いちけん}の客は入れない賭場です。出入りしたいなら、だれかの紹介がないと」

「野上組の親分の紹介ならどうだ？」

欧恵博が目丸くした。

「冗談はやめてくださいよ。野上組は大哥を狙ってるんですよ」

「言ってみただけだ」

欧恵博はレンジから手を離れた。

「勘弁してください」

「食べ終わったら、その賭場がある場所へ案内してくれ」

「花園神社のすぐ近くに、松岡組ってところがやってる賭場があ

「ピストルを一丁用意して、克泰に届けてくれ。身を守るために必要だ」

「そうですね。昨日のことといい、本当に物騒なことになったま
つてる……大哥、歌舞伎町じゃないところにねぐらを移した方が
よくありませんか？ 大人に言えば、いくらでも家を見つけてく
れますよ」

「おれもそう思ってたところだ」

厨房から女が出てきた。前掛けで手を拭いながら偉民たちの
席に向かってくる。

「なにかしでかしたんですか？」

女が口を開いた。

「なんのことだ？」

「昨日、やくざみたいな連中が来て、あなたが来たことはないか
つて訊いていったんですよ。名前と人相風体を言つて」

「なんと答えた？」

「知らないと言っておきましたけど……もし、面倒なことになつ
てるなら、しばらくここには来ないでもらえると助かるんですけ
ど」

「おい——」

欧恵博が気色ばんだ。偉民は欧恵博の肩を押さえた。

「そうするよ。迷惑をかけたいわけじゃない。早く食え。行くぞ」
偉民は欧恵博に言つて、ズボンのポケットから無造作に金をつ
かみ出した。粥の代金に色をつけ、テーブルに置く。欧恵博は残

っていた粥を慌てて頬張っていた。

「本当はこんなこと言いたくないんだけど、うちも客商売なもの
で」

「わかっている。気にしないでくれ」

偉民は腰を上げた。外の様子をうかがう。怪しい気配は感じら
れなかった。

「邪魔したな」

欧恵博が粥を食べ終えるのを待つて、店を出た。

「あのアマ、ふざけたこと抜かしやがつて」

「葉一派の動きは？」

偉民は歩きながら訊いた。

「おれたちの襲撃に恐れをなしたのか、なりを潜めてますね。み
んな、ヤサを変えて、姿を消してます」

偉民は腕を組んだ。いづれこうなるのはわかっていた。連中は
反撃の機をうかがっているはずだ。黙つてやられたままにいるよ
うな男たちではない。

偉民は顔を上げた。劇場の工事現場から数人の男たちが出てき
たのだ。まだ工事がはじまるには早い時間帯だった。

背後で重々しい音が響く。猛スピードで近づいてくるトラック
のエンジン音だ。

頭の奥で警報器が鳴った。体を反転させる。

トラックが行く手を塞いで停まった。荷台に乗っていた男たち
が飛び降りてくる。みな、バットや角材を手にしていた。

「大哥！」

欧惠博が悲鳴に似た声を上げた。工事現場から出てきた男たちもこちらに向かって突進してくる。

あの店に出入りすることを突き止められていたのだろう。気配を殺して偉民たちが現れるのを待っていたのだ。

「くそっ」

偉民はトラックから降りてきた男たちのただ中に飛び込んだ。

「恵博、おまえは逃げろ。大人のところへ行くんだ」

欧惠博に殴りかかろうとしていた男を後ろから羽交い締めにして振り回す。他の男たちがたたらを踏んだ。

「行け」

偉民が叫ぶと、欧惠博はトラックの下に潜り込んだ。匍匐前進しながら反対側に抜け、立ち上がって駆けていく。

「逃がすな」

数人の男たちが欧惠博を追おうとした。偉民は羽交い締めにしていた男を放し、駆け出そうとしていた男のひとりに体当たりを食らわせた。別の男の腰にしがみつく。

背中に強烈な痛みが走った。

「ぶっ殺せ」

だれかの叫びと共に、二度、三度と打撃を受けた。偉民は男から離れ、地面に転がった。体を丸め、両手で頭を守る。角材やバットだけではなく、蹴りも飛んできた。体中に激しい痛みが走った。

目の前にあった足に両手を伸ばし、抱きかかえた。足の持ち主が倒れ込んだ。その男に覆い被さり、首に両腕を回した。

ここで殺されるにしてもひとりでは死なない。できるだけ多くの人間を道連れにしてやる。

歯を食いしばり、雨あられのように襲いかかってくる打撃に耐えながら男の首を絞め続けた。

「とんでもねえ野郎だ」

冷めた声が耳に飛び込んできた次の瞬間、後頭部に強い衝撃を受けて、偉民は気を失った。

* * *

全身をさいなむ痛みに耐えかねて目が覚めた。目が開かない。

偉民は恐怖に襲われて両手で目をこすった。

固まった血で瞼がくっついていて、執拗に目の周りをこすっているうちに、目が開くようになった。

殺風景な部屋にいた。

広さは十二畳ほどで、床には木の板が敷かれていた。部屋の真ん中にベッドがあり、偉民はそのベッドの上にあった。上半身は裸だった。目に見える範囲のあらゆる部分が擦り傷や打撲の痕で覆われている。

体をほんの少し動かすだけで口から呻きが漏れた。痛みがもつとも激しいのは後頭部だ。触らなくても腫れているのがわかる。

体のわずかな動きもその腫れに伝わって強い痛みを訴えるのだ。

喉がからからに渴いていた。だが、部屋にはベッドしかない。

偉民はベッドから降り、よろめきながらドアに向かった。重そうな木製のドアで、ドアノブがついている。ノブを回してみたが、ドアは開かなかつた。

部屋を見回す。元はなにかの倉庫だったようだ。

偉民はドアを叩いた。

「水をくれ。喉が渴いて死にそうだ」

顔をしかめ、その場にしゃがみ込んだ。大声を出すだけでも後頭部の傷に響く。

痛みに耐えていると鍵を開ける音がした。ドアが開き、右手にピストルをかまえた男が姿を現した。男はピストルの銃身をしゃくった。

偉民は呻きながらベッドに戻った。

男と一緒に小柄な男も姿を現した。小柄な男は右手にコップ、左手に黒いシャツを持っていた。コップには透明な液体が入っている。

「下手な真似はするなよ」

ピストルを持った男が台湾語で言った。小柄な男が近寄ってきて、コップとシャツを偉民に渡した。偉民はシャツをベッドの上に投げ捨て、コップを両手で掴んで味見もせずに液体を飲んだ。

水だった。

一息に飲み下すと、渴きはいくぶんましになった。

「そのシャツを着て待ってろ」

ピストルを持った男が言った。

「薬をくれ。頭が割れそうに痛い」

偉民は言った。男が嗤った。

「自業自得だろうが。おまえに首を絞められた男は喉が潰れて喋れなくなっちゃったぞ」

「それこそ、自業自得だ」

「いつまで偉そうにしていられるか、見物だな」

小柄な男が姿を消した。ピストルを持った男も後ずさりしながら部屋から出ていく。ドアがしまり、鍵をかける音が続いた。

「くそ……」

偉民は空になったコップを床に置き、シャツを着た。横になりたいが、痛みに襲われることを考えると躊躇われた。ベッドの端に腰掛け、ズボンのポケットをまさぐった。

潰れた煙草とマッチの箱が入っていた。煙草のほとんどは途中で折れてしまっていたが、二本だけ、なんとか吸えそうなものが残っていた。一本を口にくわえ、マッチで火を点ける。火の消えたマッチをコップの中に放り込んだ。

いつになく煙草を苦く感じた。癒えたはずの喉の渴きがよみがえってくる。

偉民は点けたばかりの煙草をコップに落とし込んだ。残っていた水滴に穂先が浸かり、じゅつと音を立てた。

また鍵を開ける音がした。ドアが開く。さつきと同じ男がピス

トルを手にして入ってきた。一言も口を利かず、壁際に立つと銃口をまっすぐ向けてきた。

間を置かず、もうひとりの男が部屋に入ってきた。葉曉丹——張栄健だった。

偉民は唇を囁んだ。痛みが消え、抑えきれない怒りの感情が沸き起こってくる。

張栄健は偉民から一メートルほど離れたところで足を止め、腕を組んだ。

黒いズボンに白い開襟シャツ姿だった。なにも知らない者の目には教師か銀行員に見えるだろう。

「よくおれの前に顔を出せたな」

偉民は腰を浮かせた。ピストルの男が大袈裟なジェスチャーで銃身を振って見せた。偉民は腰を落とした。

「わたしだということがどうしてわかった？」

耳なじみのある声でそう言った。

「どれだけ顔を変えようが、耳の形は変わらないぞ」

「耳か……」

張栄健は右の耳をさすった。

「だれにも気づかれなかったが、君だけは別というわけだ。君とは二度と会うことはないと思っていたんだがな」

張栄健は煙草をくわえ、オイルライターで火を点けた。

「あんたを殺すために地獄から舞い戻ったんだよ」

「台湾の実情は聞いている。わたしも、渋谷のほとぼりが冷めた

ら台湾に戻るつもりだった。国共内戦で負けた国民党が台湾に逃げ込んだと知って、やめたがね。敗残兵がどんなに酷いことをするかはよくわかっていた。案じていたとおりになってしまった」

「おれも敗残兵だ。渋谷のな。どんな酷いことをあんたにしてやろうかと考えていたところだ」

張栄健は煙を吐き出しながら微笑んだ。

「ご期待には添えなそうだ。しかし、君はなんのためにわたしがあのようなことをしたとと思っているのかな」

「金のためだろ。仲間を売って、G H Q から薄汚い金をせしめたんだ」

「それだけだと、正解とは言えないな。実のところ、わたしはG H Q とはなんの繋がりもなかった」

「でたらめを言うな」

「わたしは君の生殺与奪の権利を手に行っているんだよ。嘘をつく理由がどこにある？」

「嘘つきは、嘘のために嘘をつく。理由なんていらないんだ。そんなやつらを嫌になるほど見てきた」

「なるほど。相変わらず、賢しら気なことを言う」

張栄健は煙草をくゆらせた。偉民とのやりとりを楽しんでいるようだ。

「おれをどうするつもりだ？」

「さてね。こちらにも思案しているところだよ」

「殺せ。さもないや、後悔するぞ」

「過去的一切を水に流して、わたしと手を組むつもりはないかな」
「笑わせるな」

偉民は張栄健の足もとに唾^{つば}を吐いた。壁際に立つ男の顔色が変わった。ピストルを握る手に力がこもっていく。

「改めて考えてみたまえ」

張栄健が男に目配せした。男が肩の力を抜いた。

「君を殺せと命じるのは簡単だ。仲間が散々な目に遭わされているからな。彼らに任せれば、君は徹底的に翻^{ひる}られた末に命を失うだろう。そうなりたいのか？」

「自分のやってきたことはわかつている。元より、安らかに死ぬるとも天国に行けるとも思っちゃいない」

「そういう考えの人間は実に危険だが、味方につけると実に頼もしい。殺すのは惜しいと思ってるんだよ。わたしに対する考えを変えてはくれないかな」

「永遠に変わらないさ」

偉民は言った。

「わたしは歌舞伎町を日本にいる同胞たちの新たな故郷にしたいと思ってるんだ。そのためには、やくざたちや、陳文龍のような不良大陸人を追い出す必要がある」

「渋谷の時と同じ理屈か。そして、最後には仲間を裏切るんだろう」

張栄健は短くなった煙草を足もとに投げ捨て、靴で踏みにじつた。

「あの時とは状況が違う」

「嘘つきはどんな時でも嘘をつく。それが習い性^{しょう}だからだ」
張栄健は偉民の言葉に何度もうなずいた。

「少し時間をやろう。それでも考えが改まらないようなら、望み通り、死んでもらう」

張栄健は偉民に背中を向けた。飛びかかりたいという衝動に襲われたが、壁際の男には隙がなかった。

どうせ死ぬにしてもせめて一矢^{いっし}は報いたい。

偉民は衝動をなんとか抑えこんだ。

張栄健の姿が消えた。ピストルの男が上着のポケットからくしやくしやになつた紙袋を取り出し、床に放り投げた。

「薬だ」

男は偉民に銃口を向けたまま、後ずさりするようにして部屋を出ていった。

偉民は時間をかけて紙袋を拾った。二種類の錠剤が入っていた。痛み止めだ。水はない。偉民は錠剤を二粒ずつ口に放り込み、ばりばりと音を立てて嚙^かんだ。

何度も噎^ひせながら薬を飲み下した。

死ぬ前に、一度ぐらいいは機会が訪れるだろう。それを逃さず、張栄健を追連れにするのだ。

偉民はベッドに横たわり、目を閉じた。

今は体力の回復に努めるべきだ。

痛みのせいでなかなか眠気は訪れなかった。だが、しばらくす

ると少しずつ痛みが和らいでいく。

薬が効きはじめたのだ——そう思った次の瞬間、楊偉民は深い眠りに落ちていった。

* * *

人の近づいてくる気配に目が覚めた。敵だろうが味方だろうが寝ている最中に忍び寄ってくる者がいれば即座に覚醒する。それが第二の本能のようになっていた。

鍵を開ける音がして、ドアが開いた。ドアを開けた者は息を殺している。部屋の中は真っ暗だった。

「楊さん。楊さん」

男が押し殺した声を出した。

偉民は寝ているふりをした。

「楊さん」

ドアの近くで小さな明かりが点^{とも}った。男がマッチを擦ったのだ。闇の中に男の輪郭が浮かび上がる。小柄な男だった。

「楊さん、起きてください」

小さな炎が近づいてくる。偉民は十分に引きつけて、ベッドから跳ね起き、マッチを持つ男に襲いかかった。顔に頭突^づきを食らわせ、怯んだところに足払いをかける。マッチが床に落ち、炎が消えた。部屋は闇に覆われたが、偉民は倒れた男にのしかかった。首に両手をかける。

「ま、待ってください。おれは仲間です」

男が北京語で言った。

「なんだと？」

「陳大人の命令で、愚連隊に紛れ込んでたんですよ。大人が楊さんを救い出させて」

偉民は男から離れた。自分のマッチを擦る。炎を倒れたままの男に近づけた。

先ほど、水とシャツを持ってきた男だった。男は右手で顔を押しさえ、左手を首に当てていた。

「ひでえな。いきなり、襲いかかってくるなんて」

男が顔を押しさえたまま立ち上がった。

「おれは仲間なんですよ」

男は繰り返した。目尻に涙がにじんでいた。容赦のない頭突きだったのだ。

「本当に大哥の手の者か？」

「閔文哲^{ミン・ウン・ジャ}です」

男が言った。

「早く逃げましょう。ぐずぐずしていると交代の見張りが来る」

偉民は躊躇^{ちゅうちゆ}した。男が嘘をついている可能性が捨てきれない。

「おれのことを疑うのはしょうがないけど、ここにいたって殺されるだけです」

「そうだな」

「どこに行ったかな？」

男はまたマツチを擦った。鼻血が流れているが気に留めていないようだった。

「あつた」

男が屈んだ。床に靴が転がっていた。

「裸足じゃ逃げるのも大変だろうと思って。サイズが合うかどうかは保証できないけど」

偉民は靴を履いた。一回り大きいのが、裸足よりはましだ。

「行こう」

関文哲を促し、部屋を出た。偉民が閉じ込められていたのはやはり倉庫だった。月明かりが辺りを照らしている。倉庫が建っているのは住宅街の外れだった。

「ここはどこだ？」

「高田馬場です。すぐ近くにやつらのアジトがあるんです。急がないと気づかれる。行きましょう」

関文哲が歩き出した。後を追おうとして、偉民は顔をしかめた。緊張状態にある間は感じなかった痛みがぶり返している。特に右の脇腹の痛みが激しい。肋骨の二、三本は折れているのかもしれない。

「どうしたんですか？」

関文哲が振り返った。

「なんでもない」

偉民は唇を噛みしめ、歩きはじめた。

「怪我が酷いでもんね。もう少し我慢してください。明治通り

に出りや、タクシーが捕まりますから」

「いつからあの愚連隊に潜り込んでいるんだ？」

偉民は気を紛らわせるために訊いた。

「もう三ヶ月ほどになりますかね。母親が台湾の出身なんで、台湾訛りの北京語も、台湾語も話せるんです。それで、台湾人だつて嘘をついて」

「出身は？」

「広東です」

「今まで、疑われたことはなかったのか？」

「大半は喧嘩が得意なだけの馬鹿ですから」

関文哲は嘲るように唇をねじ曲げた。

「やばいのは葉曉丹と、おれと一緒にあの倉庫に入っていった黄坤宇だけです」

「ピストルを持っていた男か？」

「ええ。葉の右腕ですよ。腕も立つし、頭も切れる」

住宅街の路地を左右に折れながら進むと、やがて大きな通りに出た。

「やつぱり、ここらじゃ流しのタクシーはいないな。明治通りに出なきゃ」

関文哲が左右に視線を走らせながら言った。

「おれは大丈夫だ。歩こう」

「辛かったら肩を貸しますよ」

「大丈夫だ」

「じゃあ、急ぎましょう」

関文哲が再び歩き出した。偉民は口で浅い呼吸を繰り返しながらそれに続いた。深く息を吸うと脇腹の痛みが強くなる。歩いてる内に頭痛も堪えがなくなっていた。

「今回の楊さんを襲う件も、計画を立てたのは黄のやつです。幸い、恵博が逃げ出せたから、楊さんが捕まったことが大人に伝わって、それで、おれに楊さんを助け出させて指令が来たんですよ」

「待て」

偉民は足を止めた。

「どうしました？」

「あの近くに連中のアジトがあると言っていたな？ おれと恵博はやつらのねぐらを突き止めようと探っていた。おまえがいるなら、苦勞することはなかったじゃないか」

「あそこをアジトにするようになったのはつい最近なんです。それまでは、歌舞伎町のあっちこちにそれぞれねぐらを構えてた。けど、楊さんたちがそのねぐらを襲うようになって、黄がアジトを用意したんです。みんなで寝起きしてれば、また襲われたとしても対処できるって」

「なるほど」

偉民はうなずき、足を踏み出した。

「葉はおれを殺すつもりだったのか？」

「どうなんでしょう？ 大事なことは、おれたち下っ端しんには話してくれませんか——おれの肩につかまってください。本当に酷

い顔色ですよ。背は小さいけど、力には自信があるんで」

「すまん」

偉民は関文哲の肩に腕を回した。関文哲が偉民の腰に腕を回して支えてくれたおかげで、だいぶ楽になった。

「しかし、またすぐにアジトを変えるだろうな」

「ええ、今夜のことでおれがスパイだったってことはばれちゃいますからね」

「せっかく苦勞して潜り込んだのに、すまんな」

「しよがないですよ。大人の大事な弟分の命の方がずっと重要ですから——お、ちよつと待ってください。空車かな？」

一台の車が前方からこちらに向かってくる。タクシーだったが、空車かどうかは確認できなかった。

関文哲が車に向けて手を振った。車の速度が落ちた。一旦、偉民たちの立っている場所を通り過ぎてからＵターンして戻ってくる。トヨペットの新車である。

「よかった。空車だ」

関文哲が黄ばんだ歯を見せて笑った。

「荒木町へ行ってくれ」

タクシーに乗り込むと、関文哲が運転手に行き先を告げた。

「荒木町？」

「大人の妾の家があるんです。とりあえずそこにお連れしろと言われてるんで」

趙美蓮の顔が脳裏に浮かんだ。きつと不機嫌な顔つきで怪我だ

らけの偉民を受け入れるのだろう。

「もう大丈夫ですよ」

関文哲が言った。偉民は背もたれに体を預け、目を閉じた。

薬はベッドの枕元に置いたままにしていた。持ってくればよかった——心の底から後悔の念が沸き起こってくる。

それほど痛みは激しかった。

* * *

荒木町の日本家屋の前でタクシーが停まった。関文哲が支払いを済ませ、偉民は助けを借りて車から降りた。

家の戸が開いた。趙美蓮が腕組みをして偉民たちを睨んだ。

「まったく、はた迷惑なんだから。ここには母も一緒にいるのよ」

「陳大人がここにお連れしろと」

「聞いたわよ。近所迷惑だからさっさと入って」

関文哲の肩を借りて家に入った。家の中は薬草のような匂いが充満していた。

「こっちよ」

趙美蓮が廊下をずんずんと進んでいく。突き当たりの右手にある障子しょうじを開けると偉民たちに向き直ってまた腕を組んだ。

「入って」

部屋に入る。六畳ほどの和室だった。真ん中に布団が敷いてある。布団の脇に木桶きづくが置かれ、その横に数枚の手ぬぐいが畳んで

積まれていた。木桶の中には泥のようなものが入っていた。

「服を脱いで横になって」

「なにをするつもりだ？」

偉民は訊いた。

「母が薬を作ってくれたのよ。打ち身によく効く我が家の秘伝の薬なんですって。怪我をしたところに塗ってあげるわ」

「そこまでしてもらおう謂いわわれはない。今夜は休ませてもらって、明日には出ていくよ」

「あの人に面倒を見ろって言われてるのよ。子供みたいに駄々をこねてないで、早く言われたとおりにして」

「言うことを聞いておいた方がいいですよ。めちゃくちゃ気の強い女なんですから」

関文哲が囁いた。

「ああ」

偉民は苦勞して服とズボンを脱ぎ、下着一枚になって布団にうつ伏せになった。

「痣あざだらけじゃないの。それに擦り傷もたくさんあるわ。こんな目に遭ってまでやらなきゃならないことってなんなの？ 男って本当に馬鹿なんだから」

頭上に趙美蓮の罵声が降り注いでくる。偉民は目を閉じた。

「それじゃ、おれはこれで。大人に報告に行かなきゃならないんで」

関文哲が去っていく気配が伝わってきた。

「まったくもう……」

趙美蓮は偉民の右側に腰を下ろしたようだった。

「染みるわよ」

趙美蓮の手が脇腹にぬるつとした感触のものを塗っていく。歯を食いしばったが呻き声が出た。

「戦争中、母はよくこの薬を作って民間人や兵隊やら、怪我人に塗ってあげてたわ。葉草を使った膏薬なの」

趙美蓮は傷を負った箇所^{うちう}に膏薬を塗りおえると、手ぬぐいを押しつけた。膏薬の粘り気で手ぬぐいはそこに貼りついたままになる。

「新しい傷だけじゃなく、古い傷もたくさんあるわね」

趙美蓮は手を動かしながら言った。

「どんな人生を送ったら、親からもらった大切な体をこんなふう^うに粗末に使えるの？」

偉民は趙美蓮の小言を聞き流した。

「無視するつもり？」

背中に太い針で刺されたような激痛が走った。趙美蓮が腫れている箇所をつねり上げたのだ。

「なにをするんだ？」

偉民は趙美蓮を睨んだ。

「それだけ怒る気力があるなら大丈夫ね」

趙美蓮は微笑み、また新たな手ぬぐいを偉民の背中に押しつけた。

「匂いは強いけど、よく効く薬よ。母とわたしに感謝しなさい」

「お母さんはどこだ？ 後で礼を言いたい」

「結構よ。あの人の関わりのある人と母を会わせたくないの。わかるでしょう？」

趙美蓮は妾なのだ。陳文龍からもらう金で母を養っている。体売る娘と、娘に体売らせるしかない母。触れて欲しくないという気持ちには十分に理解できた。

「足も酷いことになってるわね。大勢でよってたかっていたぶられたの？」

「そうだ」

「脇腹の腫れ方からすると、骨が折れてるかもしれないわよ。骨折は薬じゃ治せないから、明日にでも病院に行った方がいいわ」

「病院には行かない。明日になったら、ここを出ていくよ」

「馬鹿を言わないで。こんな体じゃ、しばらく動けないわよ。さ、今度は仰向けになって」

偉民は歯を食いしばりながら寝返りを打った。

「こっちも酷い。本当に男は馬鹿ね」

趙美蓮が心底呆れたというように首を振った。

「戦争はとつくの昔に終わったのよ。あなたひとりだけ戦争を続けてるつもり？」

「戦争は本当に終わったのか？」

偉民は言った。

台湾はまだ戦時下のようだし、アメリカとソビエトは史上最大

級の睨み合いを続けている。世界のそこかしこで紛争が起こり、人が死に続けている。

人類は戦争をし続けてきたのだ。人類がいる限り、戦争が終わることもない。

「屁理屈が好きなのも馬鹿な男の特徴だわ」

趙美蓮に一刀両断にされて、偉民は苦笑した。

「大戦直後のことを思い出さない。その日を生きるのに精一杯だったでしょ？ 平和になるとみんなろくでもないこと考えはじめて酷い目に遭うのよ」

膏藥を塗る手に力が入って、偉民はまた呻いた。

「あら、ごめんなさい」

趙美蓮はすまし顔でいい、力を緩めた。以降は無駄口は叩かず、ときばきと膏藥を塗っては手ぬぐいを押しつけていく。やがて、偉民の全身は手ぬぐいで覆われた。

「薬の効能で今夜は体が火照^{ほて}って眠れないかもしれないわ。でも、起き上がったらしちゃだめよ」

趙美蓮は立ち上がって偉民の体に布団を掛けた。

「お母さんにありがとうと伝えてくれ」

偉民は言った。最初に膏藥を塗られた背中はずで火照って熱いほどだった。

「やくざも泣いて逃げるほど怖い男だって言っているから、あなたと出くわしたりしたら腰を抜かすわ。絶対にこの部屋から出ないで。欲しいものはある？」

「水をくれ。たっぷりだ」

「わかったわ」

趙美蓮が木桶を手にして部屋を出ていった。偉民は目を閉じた。膏藥の匂いの中に、ほんのりと石けんの香りが混じっている。趙美蓮の体から漂ってきた匂いだ。

偉民は布団から足を出した。火照りが全身に広がっている。汗が噴き出てきた。

障子が開いて、趙美蓮が戻って来た。お盆に陶器の水差しと吸い飲みを載せている。

「自分で飲める？」

お盆を枕元に置きながら趙美蓮が訊いてきた。偉民は吸い飲みに腕を伸ばそうとして諦めた。

「腕が重い。骨の代わりに鉛^{なまり}が入ってるみたいだ」

「薬が効いてきたのよ。最初は辛いけど、それを超えれば楽になるわ」

趙美蓮は吸い飲みを手に取り、飲み口を偉民の口の中に差し入れた。吸い飲みが傾くと、水が流れてくる。

偉民は水を飲んだ。飲んだそばから水が汗になって体の外に流れていくような錯覚を覚える。

吸い飲みの水がなくなったが、渴きは癒えなかった。

「まだ飲むの？」

趙美蓮が言った。病気の子供に付き添う母親のような表情を浮かべている。

偉民はうなずいた。

趙美蓮が水差しの水を吸い飲みに移し、また飲ませてくれた。その水を飲みきると、やっと渇きが癒えた。

偉民は荒い息を吐きながらまた目を閉じる。額に冷たい感触を覚えた。趙美蓮が手を当てている。

「熱も出てきてるわ。火照りが収まったら、今度は寒気を覚えるわよ。毛布を用意しておくから、寒くなったら使って」

趙美蓮が押し入れからなにかを持ち出す気配を感じる。眠いの体の火照りで眠れない。痛みで寝返りを打つこともできず、まるで身動きを封じられた状態で地獄の炎に炙^{あぶ}られているかのような苦しさだった。

「尿^び瓶^{びん}を置いておくから、用を足したくなったら使って。おやすみなさい」

趙美蓮の声がした。偉民は返事をする代わりに呻いた。障子の閉まる音がする。趙美蓮の足音が遠ざかっていく。

偉民は苦しさと共に寂しさを味わい、唇を嚙^{くは}んで双方に耐えた。

8

夜の間に火照りは収まり、明け方には発熱と凍えそうなほどの悪寒^{おんかん}に苦しんだ。

趙美蓮が朝と夕に薬を塗ってくれた。二日目の夜には体を起こすことができるようになり、趙美蓮の母が作ったという粥を少し

だけ啜^{すす}った。

三日目にはなんとか立ち上がれるようになり、歩いて便所へ行き、用を足した。

昼過ぎにスーツ姿の陳文龍^{チェン・ウェン・ロン}がやって来た。

「小蓮^{シャウ・リン}から、動けるようになったと連絡があつてな。弟よ、飛んできたぞ」

陳文龍は起き上がりとする偉民を手で制して、布団の脇であぐらを掻^かいた。

「ご迷惑をおかけして申し訳ありません」

「なにを言う。おれのために動いてくれたからこんな目に遭^あつたんじゃないか。しかし、匂うな」

陳文龍は顔をしかめた。

「小蓮の母親の作る膏^{コウ}葉^{ハツ}は万病に効くと言われてな、上海^{シャンハイ}でも有名だったんだ」

「本当によく効きますよ。美蓮さんも、よくしてくれました」

「口は悪いが情に篤^{あつ}い、いい女なんだ」

陳文龍はてらいもなく言った。

「そろそろ、ここを出ていかなくては」

「小蓮はもう少しここにいた方がいいと言っているぞ」

「これ以上、迷惑はかけられません」

陳文龍は溜息を漏らし、煙草をくわえた。

「まったく、大怪我を負っているときぐらい、人に甘えてみたらどうなんだ」

「性分はそう簡単には変わりませんよ」

陳文龍は左右に視線を走らせた。灰皿がないと知ると、背広のポケットからちり紙を取り出し、その上に灰を捨てた。

「その水差し、中身は空だから使ってもいいですよ」

「こういうのを灰皿代わりにすると、小蓮の機嫌が悪くなるんだ」
「頭が上がらないんですね」

偉民は笑った。

「神田神保町におまえのねぐらを用意させておいた」

陳文龍が真顔になった。

戦前、神田神保町には中国からの留学生が集まり、中華街のような様相を呈していたことがある。戦争が終わると多くの留学生が故郷へ戻っていったが、そのまま日本に居着いた者もいた。

「あそこなら、おまえやおれの手の者たちが動き回っても目立たない。新宿からもそう離れてないしな」

「あの町はいいですね」

偉民はうなずき、布団から抜け出た。

「早速、行きましょう」

「おい、その匂いのままおれの車に乗るつもりか？」

陳文龍が顔をしかめた。

「まず、風呂に浸かって匂いを落とせ。動くのはそれからだ。小蓮、おい、小蓮」

陳文龍は部屋の外に声をかけた。

「風呂の用意をしてくれ」

乱暴な足音が近づいてきた。障子が勢いよく開いた。

「また煙草を吸ってる。家では吸わないでって言ってるでしょう。母さんは喘息持ちなのよ」

趙美蓮は柳眉を逆立てて陳文龍を詰めた。

「すまん。つい、いつもの癖で——」

陳文龍は煙草をちり紙で包み、手で押し潰した。焦げ臭い匂いが部屋に漂う。

「もう、本当に腹が立つ」

趙美蓮は憎々しげに言うのと、踵を返して部屋を出ていった。

「欧恵博たちが今のは見ていたら口をあぐりと開けてますね」

偉民は言った。

「やかましい。早く風呂を浴びてこい」

陳文龍は忌々しげに唇をねじ曲げた。新しい煙草を取り出そうとして、ばつこの悪そうな顔を偉民に向けた。

「おまえもわかるだろう。手持ち無沙汰になると、つい煙草に手が伸びる」

「わかりますよ」

偉民は微笑んだ。

* * *

陳文龍が用意してくれたのは神田神保町と水道橋のちょうど中間に位置する中華料理屋の二階の部屋だった。陳文龍と上海

亭」という料理屋の主人は懇意にしているらしく、部屋を借りた
という言葉に二つ返事で了承したらしい。

「この料理はなかなかいけるぞ」

陳文龍が店の脇にある階段を昇りながら言った。

「おれのツケでなんでも食わせてやってくれと言つてある。好きなものを好きなだけ食うといい」

「ありがとうございます」

「さあ、ここが新しいねぐらだ」

階段を昇りきつた先に部屋はあった。

「開けてみる」

陳文龍に促されて、偉民はノブに手をかけた。用心しながらそつとドアを開ける。煙草の煙が漂つてきた。

偉民はドアを閉めた。

「中にだれかいます」

「おまえの友達だよ。用心のしすぎだ」

もう一度ドアを開け、中に入った。奥から克泰がくわえ煙草で出てきた。

「なんだよ。待ち構えてたのにまたドアを閉めたりして」

「おまえがいるとは知らなかったんだ」

「狭いけど、いい部屋だぜ。下から四六時中いい匂いが漂つてくるのが玉に瑕だけだな」

克泰は煙を吐きながら言った。確かに、ニンニクと生姜しょうがを炒める香りが下から昇ってくる。

「じゃあ、おれは仕事があるからここで失礼する。夜、今後のことを話し合おう。下で飯でも食いながら待つてくれ」

陳文龍が軽快な足取りで階段を下つていった。偉民はドアを閉めた。

「心配したぞ。大怪我を負つたと聞いた。もういいのか？」

「脇腹と後頭部がまだ痛むが、問題ない」

偉民は靴を脱いだ。上がりかまち框の端つこに仕込み杖づえが立てかけてあった。

「いつもそいつを持ち歩けよ。そいつがあれば、そんな目には遭わなかったはずだ」

「油断していた」

「今の歌舞伎町じゃ、油断は即命取りだぞ。野上組の連中が血眼まなこになつておまえを探してるそうだ」

「おまえは大丈夫だったのか？」

「おれとおまえがダチだつてことを知つてる人間は歌舞伎町にはいないさ」

偉民は首を振つた。

「張栄健はおれたちのことを覚えてるぞ」

「葉曉丹は張栄健で間違いないのか？」

「ああ」

「くそ。のうのと戻つて来やがつて」

偉民と克泰は奥に移動した。六畳と四畳半の和室があるだけの質素な部屋だ。小さな台所と便所がある。

四畳半の部屋に煎餅布団せんぺいぶだんが二組、敷いてあった。六畳の部屋にはちゃぶ台が置かれている。

「飯は下で食べばいい。なかなかいけるぞ。それに、歌舞伎町と違っていちいち背後に気を配る必要がない」

「くれぐれも油断はするなよ……。大陸の人間はけっこういるのか？」

「それでもなさそうだよ」

偉民と克泰はちゃぶ台を挟んで腰を下ろした。克泰が差し出してきた煙草を受け取り、口にくわえた。自分でマツチを擦り、火を点ける。

目眩めまいがした。趙美蓮の家で世話になっているときは吸わなかったのだ。久しぶりのニコチンに体が驚いている。

「渋谷にいた仲間と連絡は取れたか？」

「三人、見つけたよ。おまえは名前も顔も知らないだろうが、渋谷の闇市でみんなの使いっ走りなんかしてた男たちだ。三人とも今は堅気の仕事に就いてるけど、話をしたら、昔の仲間の仇討ちをしたって乗り気だ」

「信用できるのか？」

「この十年、音信不通だったんだ。信用できるかどうかはおおいに確かめていくしかないだろう」

偉民はうなずいた。

「三人とも昼間は仕事があるから、動けるのは夜だけだ」

「仕事を辞めてもらうことはできるか？」

「どうやって食い扶持をあてがうんだ？」

「陳大哥に出してもらおう」

克泰の顔がかすかに歪んだ。

「おまえには気前がいいいだろうが、あの男はドケチで有名なんだぜ。政治家や利用できる人間には金をばらまくけど、それ以外は……」

克泰は言葉を濁した。

「おれが頼めば出してくれるさ」

「話はしてみるけど、確約はできない」

「それでいい」

偉民はちゃぶ台の上の灰皿に煙草を押しつけた。

「飯を食べよう。この二日間、粥しか腹に入れてないんだ。ニンニクの香りを嗅いでたら、腹が鳴って止まらなくなった」

「大丈夫か。いきなり脂っこいものを胃に入れて」

「怪我を治すためにすこしでも精のつくものを食っておかなきゃ」「いいだろう。おれはまだ腹は減ってないが、付き合うよ」

偉民と克泰は同時に腰を上げた。

「この部屋の鍵だ。おれもひとつ預かってる」

克泰から鍵を受け取った。

部屋を出る直前、仕込み杖に手を伸ばした。階下の料理屋へ行くだけだが、用心に越したことはない。

張栄健も野上修おさむも、歌舞伎町の覇権を握ろうと血みどろの闘いを続けているのだ。

「おれもこれをいつも持ち歩くようにしてる」

克泰がシャツをまくり上げた。腰にピストルがささっている。回転式の小型ピストルだった。

「使うときは用心しろよ」

偉民は言った。

「使う機会がなけりゃ万々歳なんだけどな」

克泰が答えた。

階下に降り、〈上海亭〉に入った。昼食時のせい、店内は盛況だった。

克泰は慣れた足取りで奥へ進み、カウンターの端に腰を下ろした。

「石先生、昨日話した、おれの親友、楊偉民です」

厨房で鍋をふるっている男に声をかける。

「いらっしやい」

男が顔を上げた。日本語に少し中国訛りがある。ごま塩頭で尻に皺が多い。背が高く、偏平な顔立ちをしており、北方の中国人を思わせた。上海人ではなさそう。

「石旭先生だ」

克泰は偉民に男の名を告げた。

「日本では石田旭という名前になってるよ。石田さんと呼んでください。先生はいらないから」

石旭が言った。

「楊です。これからなにかとお世話になります」

偉民は頭を下げてから克泰の左隣に座った。

「石先生は戦前、留学生として来日して、戦争が終わっても祖国には帰らなかったんだ」

克泰が小声で言った。

「大学じゃ、建築を学んでいたそう。インテリだぞ」

偉民はうなずき、壁にある品書きを見た。

「今日はね、いい砂肝が入ってるんだ。砂肝の唐揚げはどうか？ 美味いよ」

「じゃあ、それをお願いします。それから、青菜の炒め物と炒飯をお願いします」

「郭君は？」

「おれは腹が減ってないから偉民の皿から少し分けてもらいますよ」

「了解」

石旭はにこやかに微笑んだ。

「食い終わったら、おれは例の三人に会いに行ってくる」

克泰が台湾語に切り替えた。石旭には分かるまい。

「ああ、頼む」

「おまえは部屋で寝てろよ」

「そういうわけにも行かない。ちょっと新宿の様子を探ってくる」

「馬鹿を言うな。まだ怪我が癒えたわけじゃないんだぞ」

「無理はしないよ」

「まったく、おまえは言い出したら聞かないからなあ」

克泰は嘆息した。

「経緯は耳にしているだろう？ 張栄健とじかに話したんだ」

偉民は言った。

「あいつは仲間を売ったことを齒牙しがにもかけていなかった。あいっだけはゆるせない。この手でカタをつけなきゃ気が済まない」

偉民は唇を噛んだ。

「おまえは昌明さんや勝雄シケンさんに可愛がられてたもんな」

「あのふたりだけじゃない。租界を——台湾人の新世界を信じて渋谷に集まった多くの仲間も死んだ」

「おまえは租界に懐疑的だったじゃないか」

「それとこれは話が別だ」

偉民が目を向けると、克泰は顔を逸らした。

「時々、おまえの目つきが怖いよ。台湾でどんな目に遭ってきたのかはわからないけど、中身が変わっちまったように思える」

「どんな目つきだ？」

偉民は訊いた。

「なんというのかな……殺し屋の目つきだ」

「そうか」

「おれはおれでヤク中の目つきになってたんだろうな。あれから十年だ。人も変わる」

克泰が口を閉じた。

「お待ちどおさま」

砂肝の唐揚げが目の前に置かれた。偉民は箸を手に持ち、取り

皿に克泰の分を盛った。取り皿を押しやり、砂肝を自分の口に放り込む。衣はしっかりと揚がっているが、中の砂肝は柔らかかった。下味もしつかりとついている。

「どうかね、うちの味は？」

石旭が自信に溢れた目を偉民に向けてきた。

「美味しいです」

偉民は素直な言葉を口にした。

「そりゃよかった。弟子入りした料理人が厳しい人でね、朝から晩まで叱られながら覚えたんだ。それで不味まずいって言われたら、やつてられないよ。こっちはサービスだ」

石旭が湯気の立つ皿をカウンターに置いた。茹でたての餃子ジャオツだった。

「ありがとうございます」

「いいんだよ。ただで食わせてもらうのは居心地が悪いっていうなら、文龍に請求するだけだから」

「遠慮せずに温かい内に食えよ。最高だから」

克泰が偉民を肘ひじで突いた。

「いただきます」

偉民は調味料をつけずに餃子を直接口に放り込んだ。皮を噛むと、火傷しそうなほどに熱いものが口の中に広がった。脂だ。偉民は牛肉でも豚肉でもない旨味に唸うんった。

「羊の肉だよ。日本人はあまり羊を食べないけど、これが一番だね」

石旭が言った。偉民はうなずき、餃子をもうひとつ食べた。血となれ、肉となれ、おれの傷を癒せ——呪文のように心の中で唱えながら肉を咀嚼した。

* * *

花園町の老婆の店で欧恵博と落ち合うことにした。歌舞伎町に足を踏み入れるのはさすがに危険だと判断したのだ。

欧恵博は約束の時間になつても姿を現さなかった。偉民は老婆の淹れた茶を啜り、煙草をふかして時間を潰した。

「蓮々があなたの体は傷だらけだって言つてたよ」
リヤン

いつものように店の奥で編み物をしながら老婆が口を開いた。

「戦争にでも行つてたのかい？」

「この十年、台湾にいたんですよ」

偉民は答えた。

「白色恐怖^{テロ}って言つたかね？ 台湾も大変だねえ。大陸も大陸で、共産党の田舎者が天下を握つて、なにがなんだかわからないことになつてゐるって話だよ。わたしの祖国はどうなつてしまふのかね」

「さあ。おれにはわかりません」

老婆が微笑んだ。

「あなたは少なくとも正直だね」

ドアが開き、明るい光が老婆の顔を照らした。欧恵博が店に入つてくる。

「すみません、大哥。野暮用に少し手間どつちまつて」
「気にするな」

偉民は残つていた茶を啜った。

「怪我の具合はどうですか？」

「もう大丈夫だ」

「大人の話だと、大怪我を負われたつてことですけど」

欧恵博が右隣に腰掛けた。

「あの人は大袈婆なんだ」

「でも……おれだけ逃げちまつて。本当に申し訳なく思つてゐます」

「おまえが伝えてくれたおかげで大哥がすぐに助け出してくれたんじゃないか。そんなことより、歌舞伎町の様子を聞かせてくれ」

「大哥がいなくなつて、台湾の連中が調子に乗つてます。しばらく息を潜めてたくせに、大勢でつるんで、あちこちの店にみかじめをたかつてますよ。腹が立つけど、おれたちも大哥がいないと氣勢が上がらなくて」

「野上組は？」

「あつちはあつちで、大人の息のかかった店ばかり狙つて嫌がらせを繰り返してます。まず、台湾の愚連隊を追い払えよつて思うんですけどね」

(つづく)